

第五條 看守ノ試験ハ看守長二名以上立合ノ上第一課長之ヲ施行スルモノトス

第六條 試験ニ合格セシ者一年内ハ其合格ヲ有教トス但體格ハ此限ニアラス

第七條 看守ニ採用スヘシト定リタル者ハ典獄親ク左ノ諸件ヲ宣告シ暫書ヲ徴シタル上採用スヘシ

一 看守タル者ハ官吏服務紀律ヲ恪守スヘキハ言ヲ俟タス常ニ上官ノ命令ヲ遵守シ勤務中ハ勿論勤務ニ服セサルトキト雖政治ノ是非得失ヲ論評スルカ如キコト決シテアルマシキ事

一 看守タル者ハ在監人ト相狎昵スルカ如キコトナク職務上ニ於テ負擔スル百般ノ責務ハ最モ嚴正忠實ニ之ヲ踐行スヘキ事

一 看守タル者ハ一旦奉職ノ上ハ他念ナク職務ニ從事シ五箇年未滿ニシテ一身ノ故ヲ以テ辭職スルカ如キコト決シテアルマシキ事

一 看守タル者ハ自身ハ勿論家族ニ至ル迄専ラ品行ヲ正シクシ監獄官吏タリ又其家族タル體面ヲ汚損スルカ如キ所業決シテアルマシキ事

第八條 看守タルヘキ者ヨリ呈セシムヘキ暫文ハ左ノ如シ但典獄ノ面前ニ於テ本人ヲシテ自書捺印セシムヘシ

暫文

某儀

今般何某監獄看守志願仕候ニ付御採用ヲ被ルニ於テハ官吏服務紀律ヲ恪守仕ルヘキハ勿論在監人ニ對シテ決シテ相狎昵スルカ如キコトナク總テノ法律命令ヲ遵守シ職任上百般ノ責務ハ嚴正忠實ニ踐行仕ルヘク又一身ノ故ヲ以テ自ラ職務御免相願候様ノ儀決シテ無之且ツ自身ハ勿論家族ニ至ル迄品行方正ニ相保テ監獄官吏タリ又其家族タル體面ヲ汚損致シ候様ノ所業決シテ仕ルマシク依テ暫文如件

府縣國郡市町村番地身分

何 某 實印

第九條 本則ヲ施行スル方法細目ハ典獄之ヲ定メ司法大臣ニ報告スヘシ

●統監府營林廠職員特別任用令 四十年三月 勅令第七十四號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ統監府營林廠職員特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

●統監府營林廠職員特別任用令

第一條 統監府營林廠長及統監府營林廠事務官ハ左ニ掲クル者ノ中ヨリ文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用スルコトヲ得

一 陸軍將校同相當官ニシテ森林事務ニ從事スル者又ハ從事シタル者

二 森林行政ニ關スル高等文官ノ職ニ在ル者又ハ在リタル者

第二條 統監府營林廠屬ハ森林行政ニ關スル判任官ノ職ニ在ル者又ハ在リタル者ノ中ヨリ文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用スルコトヲ得

附則

本令ハ明治四十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●統監府通信官署職員特別任用令 三十八年十二月 勅令第二百七十八號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ統監府通信官署職員特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

●統監府通信官署職員特別任用令

統監府通信官署職員ノ任用ニ關シテハ統監府通信事務官ニハ通信事務官、統監府通信事務官補ニハ通信事務官補、統監府通信屬ニハ通信屬、統監府通信手ニハ通信手、統監府郵便所長ニハ三等郵便局長ニ關スル規定ヲ準用ス

統監府通信官署官制施行ノ際現ニ韓國ニ在勤スル通信事務官補ハ統監府通信事務官補、通信屬ハ統監府通信屬、通信手ハ統監府通信手ニ直ニ任用セラレタルモノトス

附則

本令ハ明治三十九年一月十日ヨリ之ヲ施行ス

(參照)

●通信事務官、通信事務官補特別任用令 三十年八月 勅令第二百八十一號

朕通信事務官通信事務官補特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

●通信事務官、通信事務官補特別任用令

第一條 〔通信事務官ハ滿二年以上鐵道事務官船舶檢所檢官通信事務官ノ職ニ在ル者ヨリ任用スルコトヲ得其ノ通信事務官在職年數ニ第二輯官規 第三章 任用 試驗 一三九

ハ一等郵便電信局長在職年數ヲ通算ス

第二條 通信事務官ハ滿五年以上通信事務ニ從事シ現ニ判任官ニ級俸以上ノ俸給ヲ受クル者通信事務官補ハ滿三年以上通信事務ニ從事シ現ニ判任官五級俸以上ノ俸給ヲ受クル者ヨリ任用スルコトヲ得

第三條 前條ニ依リ任用セラレタル通信事務官補ハ通信事務官ニ任用スルコトヲ得但シ判任官三級俸以下ニシテ通信事務官補ニ任用セラレタル者ハ滿二年以上在職スルニアラサレハ通信事務官ニ任用スルコトヲ得ス

第四條 本令ニ依リ任用セントストキハ總テ文官高等試験委員ノ銜ヲ經ヘシ

(參照)

●鐵道書記補、通信手特別任用令 三十六年十二月 勅令第二百六十八號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ鐵道書記補通信手特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鐵道書記補、通信手特別任用令

第一條 鐵道書記補、通信手ハ選信大臣ノ定ムル試験規則ニ依リ之ヲ任用スルコトヲ得

本令施行ノ際通信書記補ノ職ニ在ル者ハ前項ノ規定ニ拘ラス通信手ニ任用スルコトヲ得

第二條 前條ニ依リ任用シタル判任官ニシテ滿二年以上其ノ職ニ在リタル者ハ文官普通試験ヲ要セス選信部内ノ判任官ニ任用スルコトヲ得 其ノ通信書記補ヨリ任用セラレタル者ニ在リテハ其ノ前官在職年數ヲ通算ス

第三條 本令施行ノ際通信書記補タル者ニシテ二箇年以上其ノ職ニ在ル者ハ文官普通試験ヲ要セス選信部内ノ判任官ニ任用スルコトヲ得

附則

鐵道書記補、通信書記補特別任用令ハ之ヲ廢止ス

(參照)

●三等郵便局長任用制 二十年十二月 勅令第六十六號

朕三等郵便局長任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

三等郵便局長ハ其地ニ在住シ相當ノ資産アル者ヲ選任スルノ必要アルヲ以テ選信大臣別ニ採用規則ヲ定メテ之ヲ選任スヘシ但該規則ニ依リ選任シタル三等郵便局長ハ他ノ判任官ニ任スルコトヲ得ス

●統監府郵便所長採用規則 四十年一月 統令第一號

統監府郵便所長採用規則左ノ通定ム

統監府郵便所長採用規則

第一條 統監府郵便所長ハ年齢滿二十年以上ノ男子ニシテ左ニ掲クル各號ノ資格ヲ具備スル者ヨリ之ヲ採用ス

一 其ノ郵便所所在地ニ在住スル者

二 實價三百圓以上ノ不動産若ハ記名國債證券ヲ所有スル者又ハ統監府通信管理局長ニ於テ同額以上ノ確實ナル資産ヲ有スト認メタル者但シ滿三年以上通信業務ニ従事スル官吏ハ本號ノ資格ヲ要セス

第二條 左ニ掲クル各號ノ一ニ該當スル者ハ統監府郵便所長ト爲ルコトヲ得ス
一 重罪ヲ犯シタル者但シ國事犯ニシテ復權シタル者ハ此ノ限ニ在ラス
二 輕罪ヲ犯シタル者但シ輕禁錮ニシテ滿期後滿五箇年ヲ經過シタル者ハ此ノ限ニ在ラス

三 故意ヲ以テ通信ニ關スル罪ヲ犯シ刑ニ處セラレタル者
四 懲戒處分ニ依リ官職ヲ免セラレ滿二箇年ヲ經過セサル者

第三條 統監府郵便所長誠實ニ其ノ職務ヲ奉シタル後老年又ハ疾病其ノ他ノ事故ニ依リ其ノ職ヲ辭スルカ或ハ在職中死亡セシトキ其ノ嗣子又ハ相續人タル男子年齢滿十六年以上ニ及ビ第一條各號ノ資格ヲ具備シ且第二條各號ニ該當セサル者ハ特ニ採用スルコトヲ得

第四條 非戸主ニシテ其ノ戸主實價三百圓以上ノ不動産若ハ記名國債證券ヲ所有スル者又ハ統監府通信管理局長ニ於テ同額以上ノ確實ナル資産ヲ有スト認メタル者ノ保障アル場合ニ於テハ其ノ本人ノ資産第一條第二號ニ適合セサルモ特ニ採用スルコトヲ得

第二輯 官規 第三章 任用 採用 試驗

●韓國政府ニ聘用官吏ノ轉任兼任ニ關スル制

三十九年六月
勅令第百九十七號

改正 四〇年勅令二〇號

一四二

朕韓國政府ニ聘用セララルル者ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
韓國政府ニ聘用セラレタル官吏及待遇官吏ハ聘用ノ儘統監府又ハ其ノ所屬官署ノ職員ニ限リ轉任又ハ兼任セシムルコトヲ得現ニ統監府又ハ其ノ所屬官署ノ職員ニシテ韓國政府ニ聘用セラレタル者亦同シ
前項ノ場合ニ於テハ聘用ヲ丁ル迄臨時其ノ轉任又ハ兼任ノ官職ヲ増置セラレタルモノトシ明治三十七年勅令第九十五號第二項及第三項ノ規定ヲ準用ス
韓國政府ノ聘用ニ應セントスル者ヲ聘用ニ關スル手續中ニ於テ統監府又ハ其ノ所屬官署ノ職員ニ任命スル場合亦前項ニ同シ

●在外指定學校職員ノ進退報告方

四十一年六月
統監第十號

理事 廳

在外指定學校職員ノ採用、解職、増俸、減俸其ノ他進退ハ其ノ都度之ヲ統監ニ報告スヘシ其ノ新ニ採用シタル者ハ履歷書ヲ添附スヘシ

●文官試験規則

二十六年十月
勅令第百九十七號

改正 三四年勅令一四六號、三八年一九一號 四二年一五五號

朕文官試験規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文官試験規則

第一章 總則

第一條 文官試験ハ別ニ規程ヲ設クルモノノ外本令ニ依リ之ヲ行フ
第二條 文官試験ヲ分チテ文官高等試験及文官普通試験ノ二種トス

第三條 文官試験ヲ行フヘキ期日及場所ハ豫メ官報ヲ以テ之ヲ公告シ東京以外ノ地ニ於テ行フ試験ニ在リテハ仍其ノ地方ノ新聞紙一種以上ニ公告スヘシ

第四條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ文官試験ヲ受クルコトヲ得ス

- 一 禁錮以上ノ刑ニ處セラレタル者
- 二 破産若ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權ヒサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者
- 第五條 文官試験ヲ受ケテ合格シタル者ニハ合格證書ヲ付與ス
- 第六條 不正ノ方法ニ因リ試験ヲ受ケント企テタル者及試験ニ關スル規程ニ違背シタル者ハ其ノ期ノ試験ヲ受クルコトヲ得ス試験合格證書ヲ受領シタル後は等ノ事實發覺シタルトキハ其ノ合格證書ヲ無効トス
- 第七條 文官試験ヲ出願スル者ニハ手数料トシテ高等試験ニ在リテハ金十圓、普通試験ニ在リテハ金二圓ヲ納メシム

第二章 文官高等試験

第八條 文官高等試験ハ毎年一回東京ニ於テ文官高等試験委員之ヲ行フ

第八條ノ二 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ニ非サレハ文官高等試験ヲ受クルコトヲ得ス

- 一 中學校ヲ卒業シタル者
- 二 專門學校令ニ基キ一般ノ專門學校入學ニ關シ試験檢定合格證書ヲ有シ又ハ無試験檢定ヲ受クル資格ヲ有スルモノ
- 三 中學校卒業以上ノ學力ヲ以テ入學程度トスル官立公立學校ニ入學シタル者又ハ其ノ豫備科ヲ卒業シタル者
- 四 文官高等試験委員ニ於テ普通教育ニ關シ中學校ト同等以上ト認ムル外國ノ學校ヲ卒業シタル者

第九條 文官高等試験ヲ分チテ豫備試験及本試験トス豫備試験ニ合格シタル者ニアラサレハ本試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十條 豫備試験ハ受験人本試験ヲ受クルニ相当ナル學識ヲ有スル者ト認ムヘキヤ否ヲ考試スルヲ以テ目的トス

第十一條 豫備試験ハ論文及外國語ニ付之ヲ行フ
論文試験ハ法律經濟ニ關スル文題ヲ課シ之ヲ行ヒ外國語試験ハ英語、佛語及獨語ノ中ニ就キ豫メ一種ヲ選擇セシメ之ヲ行フ

第十二條 帝國大學法科大學、舊東京大學法學部、文學部及舊司法省法學校正則部ノ卒業證書ヲ有スル者及學習院大學科四年ノ課程ヲ卒業シタル者ハ豫備試験ヲ免ス

第十三條 本試験ハ受験人學理上ノ原則及現行法令ニ通曉シ並ニ其ノ修得シタル學術ヲ實務ニ應用スルノ能力アルヤ否ヲ考試スルヲ以テ目的トス

第十四條 本試験ハ左ノ科目ヲ用キテ之ヲ行フ

- 一 憲法
- 二 刑法
- 三 民法
- 四 行政法

- 五 經濟學
- 六 國際法

以上ノ科目ハ試験ノ際選擇取捨スルニトヲ得ス

- 一 財政學
- 二 商法
- 三 刑事訴訟法
- 四 民事訴訟法

以上ノ科目ハ受験者ヲシテ其ノ中ニ就キ豫メ一科目ヲ選擇セシメ之ヲ試験ス

第十五條 本試験ハ分テ筆記試験及口述試験トス筆記試験ニ合格シタル者ニアラサレハ口述試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十六條 豫備試験及本試験ノ合格者ヲ定ムル方法ハ試験委員ノ議定スル所ニ依ル

第十七條 文官高等試験ニ關スル細則ハ閣令ヲ以テ之ヲ定ム

第三章 文官普通試験

第十八條 文官普通試験ハ各官廳ノ須要ニ應シ其ノ應ノ文官普通試験委員之ヲ行フ

第十九條 文官普通試験ノ科目ハ尋常中學校ノ課程ヲ標準トシ各官廳所掌ノ事務ヲ斟酌シテ文官普通試験委員之ヲ定メ文官高等試験委員ノ承認ヲ經ヘシ

第二十條 文官普通試験ニ關スル細則ハ文官普通試験委員之ヲ定メ文官高等試験委員ニ報告スヘシ

附則

第二十一條 本令ハ明治二十七年一月一日ヨリ施行ス

統監府看守考査及試験規則

四十二年十二月
統監第四十九號

統監府監獄

統監府看守考査及試験規則左ノ通定ム

統監府看守考査及試験規則

第一條 統監府看守ノ考査及試験ニ付テハ明治三十六年司法省訓令第三號看守考試規程ヲ準用ス但シ同規程

第四條ハ此ノ限ニ在ラス

第二條 三年以上看守ノ職務ニ從事セサル統監府看守ニ付テハ考査表ノ記入ヲ省略スルコトヲ得

第三條 試験ハ左ノ科目ニ就キ之ヲ行フ但シ第五號ノ科目ハ便宜之ヲ省略スルコトヲ得

一 監獄ニ關スル法規

二 刑事ニ關スル法規ノ大要

三 會計ニ關スル法規ノ大要

四 算術(比例百分算迄)

五 韓國語

韓國人タル統監府看守ノ試験ニ付テハ前項ノ科目中韓國語ヲ日本國語ニ變更ス

第四條 考査及試験ヲ行フヘキ時期ハ須要ニ應シ統監府司法廳長官之ヲ定ム

第五條 統監府典獄試験ヲ行ヒタルトキハ試験成績表ニ考查表ヲ添ヘ統監府司法廳長官ニ之ヲ報告スヘシ
第六條 考查表及試験成績表ハ別記様式ニ依ル

(別記様式)

試験成績表	
試験科目	試験科目
	監獄ニ關スル法規 刑事ニ關スル法規 會計ニ關スル法規 算術 韓國語又ハ日本語 平均點數

備考
一 試験科目ノ點數ハ各科目百點ヲ以テ滿點トス

考查表	
明治 年 月 日 拜命	「某」監獄看守(部長) 氏 名
明治 年 月 日 精勤證書授與	生 年 月 日
考查事項	實 務 成 績
至 自 明治 年 月 日 至 自 明治 年 月 日	至 自 明治 年 月 日 至 自 明治 年 月 日
職務執行ノ常否	
姿勢禮式服裝其ノ他 紀律ニ關スル事項	

勤務ノ勉否	
書類報告ノ整否	
特技ノ有無	
何	何
何	何
考備	<p>一 統監府看守ニシテ轉職シタルトキハ本表ヲ轉職先ノ統監府監獄ニ引繼クヘキモノトス</p>

●統監府通信官署職員試験ニ關スル制

三十九年一月 統令第二號

明治二十八年二月 遞信省令第二號鐵道書記補通信手試験規則ハ統監府通信官署ニ之ヲ準用ス

(參照)

●鐵道書記補、通信手試験規則 二十八年二月 改正 二九年遞令一號、七號、三〇年 二九號 三六年五八號

明治二十三年八月遞信省令第十六號鐵道書記補、郵便電信書記補及郵便爲替貯金書記補試験規則左ノ通り改正ス

鐵道書記補、通信手試験規則

第一條 鐵道書記補、通信手ハ本規則第二條ニ掲クル者ヲ除クノ外試験合格者中ヨリ任用ス

第二條 左ノ資格ノ一ヲ有スル者ハ特ニ試験ヲ須非ス 遞信省文官普通試驗委員ノ銜ヲ經テ直ニ鐵道書記補、通信手ニ任用スルコトヲ得

一 官立公立尋常中學校三學年以上ノ修業證書ヲ有スル者及之ト同等以上ト認ムル官立公立私立學校又ハ司法省指定法律學校ノ卒業證書ヲ有スル者

二 官立公立學校ノ教員タルヘキ免許狀ヲ有スル者

三 陸海軍現役滿期ノ下士以上及陸軍上等兵又ハ之ト相當ノモノニシテ下士適任證書ヲ有スル者

四 判任文官ノ職ニアリタル者

五 滿二年以上遞信省鐵道局、通信局、經理局、鐵道作業局及通信官署ノ雇員ヲ現ニ勤績スル者

六 滿五年以上巡查ノ職ニ在リタル者

第三條 試驗ハ鐵道作業局長官、一等郵便局長、郵便爲替貯金管理所長須要ニ應シ各局所ニ於テ適宜之ヲ行フ

第四條 試験ヲ行フヘキ期日及場所ハ官報若クハ試驗施行地ノ新聞紙ニ廣告ス

第五條 年齡滿十六年以上三十五年以下ノ男子ニシテ身體健全且左ノ諸項ノ一ニ該當セサル者ハ試験ヲ受ケルコトヲ得

一 重罪ヲ犯シタル者

但國事犯ニシテ復權シタル者ハ此限ニアラス

二 定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

三 破産者クハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者

第六條 試験ヲ受ケント欲スル者ハ願書及履歷書ニ左ノ證書ヲ添ヘ試験期日十四日前ニ試験ヲ行ヘフキ局所ニ差出スヘシ

第二輯 官規 第三章 任用 採用 試驗

但願書ハ第一號履歷書ハ第二號ノ書式ニ依リ認ムヘシ

一 身分、職業、年齢及兵役ニ關スル市區町村長ノ證明書

二 本規則第五號一項但書及同三項ニ該當スル者ハ其ノ復權又ハ債務ノ辨償ヲ終ヘタル證明書

第七條 試験ヲ受ケント欲スル者ハ試験手数料トシテ金五拾錢ヲ納ムヘシ

但其手数料ハ(登記印紙)ヲ用ヒ之ヲ願書ニ貼附スヘシ

手数料ハ願書ヲ取下ケ又ハ試験ヲ受ケサルトキト雖モ還付セス

第八條 不正ノ方法ニ依リ試験ヲ受ケント企テタル者及試験ニ關スル規程ニ違背シタル者ハ其ノ期ノ試験ヲ受クルコトヲ得ス若シ事後其事

實發見シタルトキハ其合格ヲ無効トス

第九條 試験ヲ分チテ第一次試験及第二次試験トシ第一次試験ノ際價格検査ヲ行フ

第一次試験ニ合格シタル者ニアラサレハ第二次試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十條 第一次試験ハ左ノ科目ニ就キ之ヲ行フ

一 讀 書 漢文交リ文

二 作 文 普通往復文、記事文

三 筆 蹟 楷書、行書

第十一條 第二次試験ハ左ノ科目ニ就キ之ヲ行フ

一 算 術 筆算(比例)珠算(四則)

二 地 理 本邦及外國地理ノ大要

三 歷 史 本邦歴史ノ大要

以上ハ悉ク之ヲ課ス

一 外國語 讀力、譯解、會話書取

二 簿 記 官用簿記(日記簿及原簿)

三 電氣通信技術 實 地

四 鐵道ニ關スル法令 大 意

五 郵便及小包郵便ニ關スル法令 大 意

六 郵便爲替貯金ニ關スル法令 大 意

七 電信ニ關スル法令 大 意

八 會計法及會計規則 大 意

九 刑 法 大 意

以上ハ其所要ニ依リ其一以上ヲ選ミテ之ヲ課ス

第十二條 試験合格者ハ通信省文官普通試験委員之ヲ査定ス

第十三條 試験合格者ニハ合格證書ヲ付與ス

但其有效期間ハ合格證書ノ日附ヨリ滿六箇月トス

附 則

第十四條 本令ハ明治二十八年三月十一日ヨリ施行ス

第十五條 本令施行ノ際現ニ通信部内ニ奉職スル職員ハ本令施行ノ日ヨリ三箇月間ニ限り通信省文官普通試験委員ノ銓衡ヲ經テ直ニ書記補

ニ任用スルコトヲ得

第一號書式 (用紙美濃紙字體楷行書一通)

書記補 受験願

私儀(鐵道書記補(通信手)志願ニ付御試驗被下度別紙履歷書及證明書相添此段相願候也

應府縣華士族平民 氏 名 印

年 月 日

鐵道作業局長官氏名宛

某地郵便局長氏名宛

郵便爲替貯金管理所長氏名宛

第二號書式 (用紙美濃紙字體楷行書一通)

應府縣華士族平民 氏 名

年 月 日 生

本 籍

第二輯 官規 第三章 任用 採用 試驗

- 一廳府縣何市何郡區何町村何番地戸主又ハ何某何男兄弟伯叔父等
現 住 所
- 一廳府縣何市何郡區何町村何番地(何某方寄留)
住 所ノ 移 動
- 一何年何月何地ニ生レ何年何月迄居住
- 一何年何月何地ニ移轉シ何年何月迄居住
- 右ハ居住ヲ移轉スル毎ニ之ヲ記スヘシ
- 學 事
- 一何年何月ヨリ何地何業ニ就キ又ハ官公私立何學校ニ於テ何學ヲ修メ何年何月ニ至ル所修ノ科目大略何々
- 一何年何月ヨリ何地官公私立何學校ニ入り何學科ヲ修業シ何年何月卒業ス其證書ノ寫別紙ノ如シ
- 修業何年何月間ニシテ其科目ハ何々
- 一何年何月何地何學校若ハ何地ニ於テ何々ノ試験ヲ受ケ及第ス其證書若ハ免許狀ノ寫別紙ノ如シ受験ノ科目ハ何々
- 職 業
- 一何年何月何地官公私立何學校何科教員トナリ教授ニ從事シ何年何月解職其間何々ヲ兼勤シ何々ノ事務ニ從事ス其ノ辭令左ノ如シ
- 此所ニ辭令ノ全文ヲ各通トモ掲クヘシ又私立學校等ニテ辭令ナキモノハ其條給等ヲ本文ニ記スヘシ
- 一何年何月何官廳ニ於テ何々ノ拜命何年何月マテ何々ノ事務ニ從事シ何年何月解職其辭令左ノ如シ
- 官記辭令各其全文ヲ掲クヘシ
- 一何年何月ヨリ何地何會社ニ傭ハレ(給料何圓)何々ノ業務ニ從事シ何年何月ニ至テ解傭其間給料ノ増減
- 一何年何月ヨリ何年何月マテ何業ニ從事ス
- 一何年何月ヨリ何々ノ著譯ニ從事シ何年何月ニ至ル其著譯スル所ノ番名左ノ如シ
- 著譯番名ヲ掲クヘシ
- 賞 罰
- 一何年何月何地ニ於テ何々ノ事由ノ爲メ賞ヲ受ケ其ノ辭令左ノ如シ
- 辭令全文ヲ掲クヘシ辭令ナキモノハ本文中ニ受賞ノ事由ヲ記スヘシ
- 一何年何月何地ニ於テ何々ノ事由ノ爲メ罰ヲ受ケ

辭令アルモノハ各其全文ヲ掲ク辭令ナキモノハ本文中ニ其事由ヲ記シ又裁判所ノ宣告書ハ其要ヲ記スヘシ總テ罰ハ其受罰ノ日數科
料罰金ノ額等ヲ記スヘシ

破産家資分散又ハ身代限處分ノ有無

一何年何月何地ニ於テ身代限ノ處分ヲ受ケ何年何月負債ノ辨濟ヲシタルコト又ハ破産若クハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ何年何月復權シタル
コト

裁判所ノ申渡ヲ記スヘシ

一破産若クハ家資分散ノ宣告又ハ身代限ノ處分ヲ受ケタルコトナシ

右之通相違無之候也

右
氏 名 印

第四章 恩給退隱料及扶助料、退官賜金

一五四

●官吏恩給法

二十三年六月
法律第四十三號

改正

三十三年
法律一〇號

四一年
五四號

朕官吏恩給法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏恩給法

第一條 文官判任以上ノ者退官シタルトキハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第二條 在官滿十五年以上ノ者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ終身恩給ヲ給ス

一 年齡六十歳ヲ超ニ退官ヲ許シタルトキ

二 傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職ニ堪ヘス退官ヲ許シタルトキ

三 廢官廢廳若クハ官廳事務ノ伸縮又ハ非職滿期ニ依リ退官シタルトキ

第三條 左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身恩給ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテ

ノ増加恩給ヲ給ス

一 公務ニ因リ傷疾ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘス退官シタルト

キ

二 公務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲メニ疾病ニ罹リ一肢

以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘス退官シタルトキ

第四條 滿五年以上國務大臣ノ職ニ在ル者退官シタルトキハ第二條ノ制限ニ拘ハラズ恩給ヲ給ス

第五條 恩給ノ年額ハ退官現時ノ俸給ト在官年數トニ依リ之ヲ定ム即チ在官滿十五年以上十六年未滿ニシテ

退官シタル者ノ恩給年額ハ俸給年額ノ二百四十分ノ六十トシ十五年以後滿一年毎ニ二百四十分ノ一ヲ加ヘ

滿四十年ニ至テ止ム但在官四十年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又十五年未滿ノ者ニ給スヘキ恩給

ハ十五年ノ額トス

非職滿期ニ由テ退官シタル者ノ恩給ハ其在職最終ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス

交際官及領事貿易事務官等ノ恩給ハ其官等ニ對スル普通文官ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス

兼官ニ依テ受クル加俸ハ恩給年額ヲ算定スルニ當リ之ヲ除算スヘシ

恩給年額單位未滿ノ數ハ單位ニ滿タシム

第六條 恩給ヲ受ケ又ハ恩給ヲ受ケスシテ退官シタル者在官中ノ公務ニ起因スル傷疾疾病引續キ重症ニ趨キ

タルトキ其事由ヲ詳悉シ左ノ期限内ニ申出レハ査覈ノ上相當ノ恩給ヲ給ス

一 一肢ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後二個年

二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ又ハ兩眼ヲ盲シ若クハ二肢ヲ亡シ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後三個

年

第七條 在官年數ハ判任官以上初任ノ月ヨリ起算シ退官ノ月ヲ以テ終リトス

明治四年八月以前ヨリ任官セラレタル者ハ同年同月ヨリ起算ス但本項ニ掲クル者退官スルトキハ明治四年

七月以前ノ勤務ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸ノ半額ヲ以テ在官年數ノ一個年ニ當テ其年數

ニ應スル金額ヲ一時支給ス

第八條 左ニ掲クル月數及日數ハ在官年數中ニ算入スヘシ

一 判任以上出仕官ニ在ルノ月數

二 武官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ軍人恩給ヲ受ケスシテ現役ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ其現役中

ノ日數

三 從軍年加算ノ年月

四 非職及休職中ノ月數

五 退官ノ後再ヒ任官シタルモノハ前在官ノ月數

六 宮内官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ恩給ヲ受ケスシテ宮内官ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ宮内判任官以上在官中ノ月數

第九條 左ニ掲クル月數及日數ハ在官年數中ヨリ除算スヘシ

一 年齢二十歳未満者ノ在官月數

二 高等官試補及判任官見習中ノ月數

三 郡區判任官ヲ除クノ外政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官職ニ在ル月數及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ル月數

四 御用掛雇等外出仕勤任ノ月數

五 第八條第二ニ掲クル者ニ在リテハ軍人恩給法ニ依リ除算スヘキ日數

六 自己ノ便宜ニ依リ退官シタル後又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官シタル後再ヒ任官シタル者ニ在テハ其前官ノ月數

第十條 文官ニシテ從軍シタル者ハ軍人恩給法ノ算則ニ照シテ其從軍年ヲ加算ス

第十一條 恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ滿一年以上在官シタル後退官シタルトキハ左ノ區別ニ依リ恩給ヲ給ス

一 退官現時ノ俸給前後相同シカラサルトキハ前官年數ヲ後官年數ニ通算シ後官ニ對スル恩給額ト前ノ恩給額トヲ比較シ其多キ方ヲ給ス

二 退官現時ノ俸給前後相同シキトキハ在官年數ニ依リ恩給ヲ增加ス但前官十五年未滿ニシテ恩給ヲ受ケタル者ニ在テハ前後通算シテ十六年以上ニ至ラサレハ増加セス

第十二條 恩給ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ恩給ヲ剝奪ス左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其間恩給ヲ停止ス

一 判任以上ノ官ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルトキ但商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ルトキハ此限ニア

ラス

二 公權ヲ停止セラレタルトキ

第十三條 年齢未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退官シタル者又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官シタル者ハ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失フ

法令ヲ以テ設立シタル議會ノ議員並市長町村長助役收入役名譽職參事會員及東京市京都市大阪市北海道ノ區長沖繩縣區制ニ依ル區長及居留民團ノ民長助役會計役ト爲リタルノ故ヲ以テ退官シタル者ハ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失ハス

第十四條 郡區判任官ヲ除クノ外政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官吏及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並高等官試補判任官見習ハ恩給ヲ受クルノ權ナキモノトス

商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並高等官試補判任官見習ニシテ公務ノ爲メ傷病ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ此法律第三條ニ該當スル者ニ限リ退官又ハ罷免現時ノ俸給四分ノ一ヲ終身支給スルコトヲ得

第十五條 恩給支給ノ期ハ退官ノ翌月ヨリ始マリ死亡ノ月ヲ以テ終ルモノトス

第十六條 恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇年內ニ請求セサレハ其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第十七條 恩給ノ支給ハ本屬長官ノ證明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁定ス

行政上ノ處分ニ因リ恩給ニ關スル權利ヲ障害セラレタル者ハ六箇月以内ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フコトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一箇年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但左ノ事件ニ關シテハ恩給局ノ裁決ハ終審確定ノモノトス

一 傷病疾病ノ原因及其輕重

二 職務ニ堪エルト否ラサルト

第十八條 恩給ハ賣買讓與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得ス

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受ケタルモノハ總テ其恩給令ニ依ルヘシ但其權利消滅及停

止ハ此法律ニ依ル

第二十條 此法律施行前ニ退官シタル者ノ恩給ハ明治十七年達官更恩給令ニ依ルヘシ但此法律施行ノ日ヨリ
 三箇年内ニ請求セサレハ之ヲ受クヘキ權利ヲ拋棄シタルモノトス
 第二十一條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス
 従前ノ命令ニシテ此法律ニ牴觸スルモノハ總テ廢止ス

●官吏恩給法施行規則

二十三年七月 閣令第三號

改正 二七年閣令五號四一年五號

官吏恩給法施行規則左ノ通定ム

官吏恩給法施行規則

第一章 恩給ノ請求

第一條 官吏恩給法第二條、第三條、第六條及第七條第二項、第十四條第二項ニ依リ恩給ヲ受クヘキ者ハ恩
 給請求書ヲ退官當時ノ本屬廳ノ長官ニ差出スヘシ但廢官廢廳ニ當リタルトキハ其事務ノ引繼ヲ受ケタル官
 廳ノ長官ニ差出スヘシ

第二條 官吏恩給法第四條ニ依リ恩給ヲ受クヘキ者ハ恩給請求書ヲ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

第三條 恩給請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ

一 在官中履歷書

二 市町村長ノ證明シタル戸籍調書

但官吏恩給法第十四條第二項ニ掲ケタル者ハ之ヲ添付スルニ及ハス

第四條 公務ノ爲傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ恩給ヲ請求スル者ハ前條ニ掲クル書類ノ外左ノ書類ヲ以テ其
 事實ヲ證明スヘシ官吏恩給法第六條ニ依リ恩給ヲ請求スル者亦同シ

一 現認證書又ハ之ヲ證スル公文ノ寫若クハ口供書

二 醫師ノ診斷證書

第五條 恩給ノ請求ヲ受ケタル各廳長官ハ查覈ノ上請求ノ理由アリト認ムルトキハ請求者ノ在官年數及恩給
 年額計算書ヲ作り證據書類ヲ添ヘ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

各廳長官ニ於テ請求ノ理由ナシト認ムルトキハ意見ヲ具シテ之ヲ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

第六條 内閣ニ於テ前條ノ請求ヲ許可シタルトキハ恩給證書ヲ作り本屬廳ヲ經テ本人居住地ノ地方廳ヲシテ
 之ヲ下付セシム但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ

恩給證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ内閣ハ其旨ヲ大藏省ニ通報スヘシ

第二章 恩給ノ支給

第七條 恩給ハ其年額ヲ四分シ四月七月十月一月ニ於テ其前三箇月分ヲ大藏省ヨリ本人居住地ノ地方廳ヲ經
 テ支給ス但權利消滅若クハ停止ノトキ及一時支給ノ金額ハ期月ニ拘ハラヌ之ヲ支給ス

第八條 恩給ヲ受クル者其金額ヲ受領セントスルトキハ恩給證書ヲ以テ其受領權アルコトヲ證明スヘシ

第九條 恩給ヲ受クル者他ノ地方ニ居住ヲ轉スルトキハ直ニ舊居住地ノ地方廳ニ届出ヘシ

舊居住地ノ地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ直ニ新居住地ノ地方廳ニ其者ニ係ル恩給支給ノ引繼
 ヲ爲シ其旨ヲ大藏省ニ通知スヘシ

第十條 官吏恩給法第十二條ニ當リタル者ノ恩給支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

- 一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日「刑法ノ刑ニ處セラレタル者ニ在リテハ裁判確定ノ日」 日本臣民タルノ分
 限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日ヲ以テ支給ヲ終ル
- 二 判任官以上ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルトキハ俸給ノ支給ヲ始ムル日ノ前日ヲ以テ支給ヲ終リ其退官
 シタルトキハ俸給ノ支給ヲ終リタル日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム
- 三 公權ヲ停止セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日「刑法ノ刑ニ處セラレタル者ニ在リテハ裁判確定ノ日」 ヲ以テ支給ヲ終リ刑
 ノ執行ヲ終リタル日ノ翌日又ハ其執行ヲ受クルコトナキニ至リタル日ヨリ支給ヲ始ム

第十一條 官吏恩給法第七條第二項ニ掲クル月俸トハ明治四年六月東京淺草米廩ノ平均相場ニ依リ當時ノ官
祿一箇月分ニ相當スル金額トス

第十二條 官吏恩給法第三條ニ掲クル最下金額十分ノ七マテノ増加恩給ノ等差ハ左ノ如シ

第一項 兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ 十分ノ七

第二項 前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ六

第三項 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ 十分ノ五

第四項 前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ四

第五項 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ 十分ノ三

第六項 前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ二

傷痕疾病ノ等差ハ明治十八年達文官傷痕疾病等差例ニ依ル

第三章 恩給ノ停止

第十三條 恩給ヲ受クル者重罪若クハ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ受ケ若クハ之ヲ取消サ
レタルトキハ其確定裁判ノ宣告ヲ爲シタル裁判所ヨリ之ヲ本人恩給ノ支給ヲ受クル地方廳ニ通知スヘシ

第十四條 官吏恩給法第十二條第二項ノ第一ニ當ル者アルトキハ其任用シタル官廳ヨリ本人恩給ノ支給ヲ受
クル地方廳ニ通知スヘシ解任シタルトキモ亦同シ但此通知書ニハ俸給ノ支給ヲ始ムル日(解任ノトキハ支
給ヲ終リタル日)ヲ付記スヘシ

第十五條 恩給ヲ受クル者死去シタルトキハ其遺族ヨリ地方廳ニ届出ヘシ其遺族ニシテ扶助料ヲ受クヘキ權
利ナキトキハ死去ノ届出ヲ爲スト同時ニ恩給證書ヲ返納スヘシ

第十六條 地方廳ニ於テ第十三條若クハ第十四條ノ通知又ハ第十五條ノ届出ヲ受ケタルトキハ之ヲ大藏省ニ
通知シ大藏省ハ之ヲ内閣恩給局ニ通知スヘシ
死亡又ハ權利消滅ノ爲メ返納スヘキ恩給證書ハ地方廳ニ於テ之ヲ收メ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第四章 雜則

第十七條 水火災盜難等ニ由リ恩給證書ヲ亡失シタル者ハ居住地ノ地方廳ニ届出ヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ其事實ヲ調査シ亡失ノ事由ヲ具シテ内閣恩給局ニ申出ヘシ此場
合ニ於テ恩給局ハ恩給證書ノ謄本ヲ作り地方廳ヲ經テ本人ニ下付スヘシ

前項恩給證書ノ謄本ハ恩給證書ト同一ノ效力アルモノトス

第十八條 恩給ヲ受クル者改氏名シタルトキハ居住地ノ地方廳ニ届出ヘシ地方廳ハ恩給證書ノ裏面ニ其事實
ヲ記載シ長官署名捺印ノ上本人ニ下付シ其旨ヲ内閣恩給局及大藏省ニ通知スヘシ

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受クル者左ノ場合ニ於テハ本則ニ依ル

一 死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ

二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ

三 改氏名又ハ居住地ヲ轉シタルトキ

第二十條 官吏恩給法第二十條ニ依リ恩給ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘシ

第二十一條 市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本規則ニ依リ市町村長ノ爲スヘキ職務ハ區戸長ニ於テ之
ヲ行フヘシ

●官吏遺族扶助法

二十三年六月 改正 三二年法律一六號、三三年一一號
法律第四十四號

朕官吏遺族扶助法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏遺族扶助法

第一條 文官判任以上ノ者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定スル所ニ依リ扶助料ヲ受
クルノ權利ヲ有ス但第二條ノ納金ヲナスヘキ義務ナキ者ノ遺族ハ此限ニアラス
一 在官十五年以上ノ者在官中死去シタルトキ

- 二 在官十五年未滿ノ者公務ノ爲死去シタルトキ
- 三 恩給ヲ受クル者死去シタルトキ
- 第二條 文官判任以上ノ者ハ其俸給百分ノ一ヲ國庫ニ納ムヘシ
- 第三條 交際官及領事貿易事務官等其俸給普通文官ヨリ多額ナルトキハ普通文官ノ俸給ニ依リ少額ナルトキハ現ニ受クル所ノ俸給ニ依リ第二條ノ納金ヲ爲スヘシ
- 郡判任官ヲ除クノ外政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官吏及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏ハ第二條ノ納金ヲ要セス
- 第四條 寡婦扶助料年額ハ亡夫ノ受ケタル若クハ受クヘキ恩給年額三分ノ一トス
- 公務ノ爲メ受ケタル傷病ニ原因シテ死去シ又ハ非常ノ勞働及困苦ヲ忍ビ勤務ニ從事シ爲メニ發病死去シ又ハ公務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病ニ感染シテ死去シ又ハ戰地ニ於テ若クハ公務旅行中流行病ニ罹リ死去シタル者ノ寡婦扶助料ハ亡夫ノ俸給ニ對シ官吏恩給法第五條ニ依リ算出シタル恩給年額三分ノ二トス
- 扶助料年額圓位未滿ノ數ハ圓位ニ滿タシム
- 第五條 寡婦ナキトキ又ハ扶助料ヲ受クル寡婦死去シ若クハ權利消滅シタルトキハ其扶助料ヲ孤兒ニ給ス
- 第六條 孤兒扶助料ハ數子アルトキハ家名繼襲者ニ給シ戸主ニ非サル者ノ孤兒ニ在テハ長子ニ給ス其繼襲者及長子死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿ツルトキハ順次年少者ニ轉給スルモノトス但家名繼襲者ヲ除クノ外男子ヲ先ニシ女子ヲ後ニス
- 第七條 恩給ヲ受ケタル者ノ寡婦ニシテ其夫退官後結婚シタル者ハ扶助料ヲ受クルコトヲ得ス
- 第八條 此法律ニ於テ孤兒トハ年齢二十歳未滿ノ男女子ニシテ未タ結婚セサル者ヲ云フ但養男女子ハ家名繼襲者ニ限ル
- 第九條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル月ノ翌月ヨリ之ヲ給ス
- 第十條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦及孤兒ナク若クハ扶助料ヲ受ケタル寡婦及孤兒戸籍ヲ去リ若クハ死去シ若クハ權利消滅シタルトキ父母又ハ祖父母アルトキハ寡婦ニ相當スル扶助料ノ全額ヲ其父母又ハ祖父母ニ終身給スルコトヲ得

- 其扶助料ハ先ツ父ニ給シ其父存在セサルトキ若ハ權利消滅シタルトキハ母ニ給ス母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ轉給スルハ順次此例ニ依ル
- 第十一條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戸籍内ニ在ル二十歳未滿又ハ廢疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキトキハ寡婦ニ相當スル扶助料一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ人員ニ拘ラス一時限リ其兄弟姉妹ニ給スルコトヲ得
- 第十二條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ權利ノ生シタル日ヨリ三箇年内ニ請求セサレハ其權利ヲ拋棄シタルモノトス
- 第十三條 扶助料ハ賣買讓與質入書入ヌルコトヲ得ス又負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得ス
- 第十四條 扶助料ヲ受クルノ權利ハ左ノ時ヨリ消滅ス
 - 一 寡婦死去又ハ結婚シ若クハ戸籍ヲ去リタル月ノ翌月
 - 二 孤兒死去又ハ結婚シ又ハ他家ノ養子女トナリ又ハ年齢二十歳ニ滿チタル月ノ翌月
 - 三 父母祖父母死去シ又ハ戸籍ヲ去リタル月ノ翌月
- 第十五條 孤兒二十歳ニ滿ツルモ廢疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハス他ニ給養スル者ナキトキハ寡婦扶助料ノ三分ノ一ヲ其孤兒ニ各終身給スルコトヲ得但一戸籍内ニ寡婦ト同額ノ扶助料ヲ受クル者アルトキハ其間之ヲ給セス
- 第十六條 扶助料ヲ受クル者日本臣民タルノ分限ヲ失ヒ若クハ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ扶助料ノ支給ヲ廢ス
- 公權ヲ停止セラレタルトキハ其間支給ヲ停止ス
- 扶助料ヲ受クル者公權停止中ハ其轉給ヲ受クヘキ者ニ之ヲ給ス

第十七條 在官十五年未滿ノ者在官中公務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス
前項ノ扶助金ハ在職最終ノ俸給年額百分ノ一ヲ在官年數ニ乗シタル額トス但一年未滿ノ在官月數ハ計算セ
ス

第十八條 扶助料ノ支給ハ地方長官ノ申牒ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁定ス
行政上ノ處分ニ因リ扶助料ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六箇月以内ニ恩給局ニ具申シテ裁決
ヲ請フコトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一箇年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ扶助料ヲ受ケタル者及恩給ヲ受ケタル者ノ遺族扶助料ハ總テ其恩
給令ニ依ルヘシ但其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル
第二十條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

●官吏遺族扶助法施行規則 二十三年七月 閣令第四號

改正 二七年閣令六號、三七年一號、四一年六號

官吏遺族扶助法施行規則左ノ通定ム

官吏遺族扶助法施行規則

第一章 扶助料ノ請求

第一條 官吏遺族扶助法第一條第一第二及第十七條ニ當ル者アリタルトキハ本屬廳ヨリ死者ノ履歷書ヲ其遺
族ニ下付スヘシ遺族ハ之ヲ以テ扶助料又ハ一時扶助金請求ノ證ト爲スヘシ

第二條 官吏遺族扶助法第一條第三ニ當ル者ノ遺族ハ其恩給證書ヲ以テ扶助料請求ノ證ト爲スヘシ

第三條 官吏遺族扶助法第四條第二項ニ當ル者アリタルトキハ本屬廳ニ於テ事實ヲ查覈シ其傷痍者クハ疾病
ノ公務ニ起因シタル證據トナルヘキ書類及醫師ノ診察ヲ爲サシメタル場合ニ於テハ其診斷書ヲ併セテ其遺
族ニ下付スヘシ遺族ハ之ヲ以テ扶助料請求ノ證ト爲スヘシ

第四條 扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿チタルトキ其扶助料ノ轉給ヲ請フ者

ハ前者ノ扶助料證書ヲ以テ請求ノ證ト爲スヘシ

第五條 公權停止ニ依リ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ハ確定裁判ノ宣告書寫ヲ以テ請求ノ證ト爲スヘシ

第六條 官吏遺族扶助法第十一條及第十五條ニ當ル者ハ其事由ヲ詳記シ痲疾不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハ
サル者ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ扶助料ヲ請求スヘシ

第七條 官吏遺族扶助法ニ依リ扶助料ヲ請求スル者ハ其ノ請求書ニ戶籍謄本及第一條乃至第六條ニ掲クル書
類ヲ添ヘ住所地ノ地方長官ニ差出スヘシ

第八條 扶助料ノ請求ヲ受ケタル地方長官ハ查覈ノ上扶助料年額ノ計算書ヲ作り證據書類ヲ添ヘ内閣總理大
臣ニ差出スヘシ

内閣ニ於テ之ヲ許可シタルトキハ扶助料證書ヲ作り地方廳ヲシテ之ヲ本人ニ下付セシム但一時ノ支給ニ係
ルモノハ辭令書ヲ用ユ

扶助料證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ内閣ハ其旨ヲ大藏省ニ通報スヘシ

第二章 納金ノ徴收

第九條 官吏遺族扶助法第二條ニ掲クル納金ハ俸給支給ノトキ各廳ニ於テ之ヲ徴收シテ國庫ニ納ムヘシ

第三章 扶助料ノ支給及停止

第十條 扶助料ノ支給ハ官吏恩給法施行規則第七條、第八條、第九條及第十條第一第三ノ例ニ依ル

第十一條 扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿チタルトキハ地方廳ニ於テ扶助料
ノ支給ヲ廢シ其旨ヲ大藏省ニ通知スヘシ

前項ノ場合ニ於テ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ナキトキハ地方廳ニ於テ其扶助料證書ヲ收メテ内閣恩給局ニ
送付スヘシ

第十二條 官吏恩給法施行規則第十三條ハ扶助料ヲ受クル者ニ之ヲ準用ス

第十三條 大藏省又ハ地方廳ニ於テ第十一條又ハ第十二條ニ依ル通知ヲ受ケタルトキハ官吏恩給法施行規則

第十六條ノ例ニ依ル

雜則

第十四條 水火災盜難等ニ依リ扶助料證書ヲ亡失シタルトキ及扶助料ヲ受クル者改氏名ヲ爲シタルトキハ官吏恩給法施行規則第十七條及第十八條ノ例ニ依ル

第十五條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ扶助料ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘシ同令ニ依リ扶助料ヲ受クル者ハ左ノ場合ニ於テ本則ニ依ル

- 一 死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ
- 二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ
- 三 改氏名又ハ居住地ヲ轉シタルトキ

第十六條 (削除)

●官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則

二十九年三月 法律第三十六號

改正

三三年法律一二號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則

第一條 地方稅支辨ノ俸給ヲ受ケタル郡區長ノ在官月數ハ官吏ノ恩給及遺族扶助ニ關スル在官年數中ニ算入ス

第二條 明治二十三年七月一日以後ニ退官シタル文官判任以上ノ者ニシテ地方稅支辨ノ俸給ヲ受ケタル郡區長在官中ノ月數ヲ除算シ恩給ヲ受ケ若ハ之カ爲恩給ヲ受ケサリシ者ニハ其ノ月數ヲ算入シ恩給ヲ增加シ又ハ新ニ之ヲ給スルコトヲ得

第三條 第二條ニ相當スル者在官中又ハ退官ノ後死去シ其ノ遺族ニシテ扶助料若ハ一時扶助金ヲ受ケ又ハ之ヲ受ケサリシ者ニハ第一條ニ依リ算定シタル恩給年額若ハ在官年數ニ依リ其ノ扶助料若ハ一時扶助金ヲ増

加シ又ハ新ニ之ヲ給スルコトヲ得

第四條 第二條、第三條ニ依リ新ニ恩給又ハ扶助料ヲ受クル者ハ左ノ方法ニ依リ最後ニ受ケタル退官賜金又ハ一時扶助金ノ一部ヲ返納セシム

新ニ受クヘキ恩給又ハ扶助料年額ニ其ノ退官又ハ死去以後新ニ恩給又ハ扶助料ヲ受クル日ニ至ルマテノ年數ヲ乘シ月數ハ其ノ月割額ヲ加ヘ退官賜金一時扶助金ヲ其總額ニ對照シ若超過アルトキハ其超過額ヲ新ニ受クヘキ恩給又ハ扶助料中ヨリ控除ス

第五條 恩給ヲ受クル者郡判任官ニ任用セラレタルトキハ其ノ間恩給ヲ停止ス

第六條 第二條、第三條ニ依リ給スル恩給及扶助料ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ起算シテ之ヲ給ス

第七條 第二條、第三條ニ依リ受クヘキ恩給、扶助料又ハ一時扶助金ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ一箇年内ニ請求セサレハ其ノ權利ヲ拋棄シタルモノトス

第八條 此ノ法律ニ於テ特別ノ規定ヲ設ケサルモノハ總テ官吏恩給法及官吏遺族扶助法ノ例ニ依ル

第九條 此ノ法律ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

●官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則施行規則

二十九年三月 閣令第二號

官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則施行規則左ノ通定ム

官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則施行規則

第一條 官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則第二條ニ依リ恩給ノ增加ヲ受ケ若クハ新ニ恩給ヲ受ケントスル者ハ恩給請求書ヲ退官當時ノ本屬廳ノ長官ニ差出スヘシ但廢官廢廳ニ當リタルトキハ其ノ事務ノ引繼ヲ受ケタル官廳ノ長官ニ差出スヘシ

第二條 官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則第三條ニ依リ扶助料又ハ一時扶助金ノ増加ヲ受ケ若クハ新ニ之ヲ受ケントスル者ハ其ノ請求書ヲ居住地ノ地方長官ニ差出スヘシ

第三條 恩給又ハ扶助料若クハ一時扶助金ノ請求書ニハ左ノ書類ヲ添附スヘシ

一 在官中ノ履歷書

二 市町村長ノ證明シタル戶籍寫

但恩給ヲ請求スル者ニ在リテハ其ノ退官當時ノ戶籍寫扶助料若クハ一時扶助金ヲ請求スル者ニ在リテハ元官吏タリシ者死亡當時ノ戶籍寫及明治二十九年四月一日現在ノ戶籍寫トス

三 官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則施行前ニ恩給又ハ扶助料若クハ一時扶助金ヲ受ケタル者ニ在リテハ其ノ證書若クハ辭令書

第四條 第一條ニ依リ新ニ恩給ノ請求ヲ受ケタル各廳長官ハ官吏恩給法施行規則第五條ニ掲クル計算書ノ外退官當時給與シタル退官賜金ノ調書ヲ添附スヘシ

第五條 恩給ヲ受ケタル者ヲ郡區書記ニ任用シ若クハ解任シタルトキハ官吏恩給法施行規則第十條、第十四條及第十六條ヲ準用ス但從來任用シタル者ハ直ニ本條ノ手續ヲ爲スヘシ

第六條 本規則ニ於テ特別ノ規程ヲ設ケサルモノハ總テ官吏恩給法施行規則及官吏遺族扶助法施行規則ノ例ニ依ル

● 統監府官吏ノ恩給及遺族扶助料ニ關スル制 四十年五月 法律第四十八號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル統監府及關東都督府等在勤官吏ノ恩給及遺族扶助料ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十三年法律第七十五號第一條ノ規定ハ別ニ勅令ヲ以テ定ムルモノヲ除クノ外統監府及關東都督府並其ノ所屬官署ニ在勤スル判任以上ノ官吏ニ之ヲ準用ス

附則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本法ノ規定ハ統監府及其ノ所屬官署ニ在勤スル者ニ關シテハ明治二十九年二月以降、關東都督府及其ノ所屬官署ニ在勤スル者ニ關シテハ明治三十九年九月以降ノ在職月數ニモ之ヲ適用ス

(參照)

明治三十三年法律第七十五號

第一條 臺灣又ハ樺太ニ在勤スル文官判任以上ノ者ニシテ三箇年以上引續キ在勤シタル者ニハ官吏恩給法並官吏遺族扶助法ノ在官年數計算

ニ於テ其ノ在職一箇月ニ對シ半箇月ヲ加算ス但シ從軍年ノ加算アル場合ハ此ノ限ニ在ラス

前項ニ依リ加算シタル年月數ハ軍人恩給法ニ於テ文官服務中ノ日數中ニ算入ス

第一項ノ加算ハ臺灣ニ到著シタル日ニ始マル

● 同上法律ヲ適用セサル官吏ニ關スル制 四十年五月 勅令第八十八號

朕明治四十年法律第四十八號ヲ適用セサル官吏ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治四十年法律第四十八號ハ政府ヨリ俸給ノ支給ヲ受ケサル官吏ニ之ヲ適用セス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

● 巡查看守退隱料及遺族扶助料法 三十四年七月 法律第三十八號 改正 三十八年法律二十八號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル巡查看守退隱料及遺族扶助料法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

巡查看守退隱料及遺族扶助料法

第一條 巡査又ハ看守勤續十年以上ニシテ左ノ各號ノ一ニ當ルトキハ退隱料ヲ給ス

一 年齡五十歳ヲ超ヘ退職シタルトキ

二 傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ其ノ職ニ堪ヘス退職シタルトキ

三 廢官廢廳ニ依リ退職シタルトキ

四 身體若ハ精神ノ衰弱又ハ事務ノ都合ニ依リ退職ヲ命セラレタルトキ
前項ノ退隱料年額ハ退職當時ニ於ケル月俸三箇月分トシ勤続十年以上三十年ニ至ル迄一年ヲ加フル毎ニ退
職當時ノ月俸額十分ノ一ヲ増加ス

第二條 巡查又ハ看守勤続一年以上十年未滿ニシテ第一條第一項各號ノ一ニ當ルトキハ一時金ヲ給ス但シ退
隱料ヲ受クル者又ハ受クヘキ者ハ此ノ限ニ在ラス

一時金ハ退職當時ニ於ケル月俸額ノ三分ノ二ニ勤続年數ヲ乘シタル額トス

第三條 退隱料ヲ受クル者又ハ受クヘキ者再ヒ前職ニ就キ勤続一年以上ニシテ第一條第一項各號ノ一ニ當ル
トキハ前後通算シテ勤続三十年ニ至ル迄後ノ勤続一年ヲ加フル毎ニ後ノ退職當時ニ於ケル月俸額十分ノ一
ヲ退隱料年額ニ増加ス

一時金ヲ受ケタル者又ハ受クヘキ者再ヒ前職ニ就キ第一條第一項各號ノ一ニ當ルトキハ前後通算シテ勤続
十年以上ニ至ル者ニハ第一條ニ依リ退隱料ヲ給シ十年未滿ノ者ニハ第二條ニ依リ後ノ勤続年數ニ對スル一
時金ヲ給ス

第四條 巡查又ハ看守職務ノ爲傷痕ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ又ハ之ニ準スヘキ者ト爲リ其
ノ職ニ堪ヘス退職シタルトキハ退隱料ヲ給ス

前項ノ退隱料年額ハ退職當時ノ月俸三箇月分乃至六箇月分トス

第一條及第三條ニ依リ退隱料ヲ受クル者又ハ受クヘキ者本條第一項ニ當ルトキハ其ノ退隱料年額ニ退職當
時ノ月俸四箇月分以内ヲ増加ス

前二項ニ依ル退隱料年額及增加金額ハ傷痕疾病ノ輕重ニ依リ之ヲ定ム

第五條 前條ノ規定ハ職務ノ爲傷痕ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ退職シタル後一年以内ニ其ノ傷痕疾病ニ起因シ前
條第一項ニ當ルニ至リタル者ニ之ヲ準用ス

第六條 巡查又ハ看守交互ニ轉職シ又ハ他ノ官職ニ轉シタルトキハ事務ノ都合ニ依リ退職ヲ命セラレタル者

ト看做ス

第七條 巡查又ハ看守左ノ各號ノ一ニ當ルトキハ遺族ニ扶助料ヲ給ス

一 職務ノ爲傷痕ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ在職中死亡シタルトキ

二 勤続十年以上ニシテ在職中死亡シタルトキ

三 限隱料ヲ受ケ又ハ受クヘクシテ死亡シタルトキ

扶助料年額ハ前項第一號ノ場合ニ在リテハ第四條ニ依リ査定シタル金額ノ三分ノ二トシ第二號ノ場合ニ在
リテハ第一條又ハ第三條ニ依リ査定シタル金額ノ三分ノ一トシ第三號ノ場合ニ在リテハ其ノ退隱料年額ノ
三分ノ一トス但シ職務ノ爲傷痕ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ退職シタル後一年以内ニ其ノ傷痕疾病ニ起因シテ死
亡シタルトキハ第四條、第五條ニ依リ査定シタル金額ノ三分ノ二トス

第八條 扶助料ハ寡婦ニ給ス寡婦死亡シ又ハ扶助料ヲ受クヘカラサルトキハ子ニ給ス

數子間ニ在リテハ法定家督相續ノ順位ニ依リ最先者ニ給ス最先者死亡シ若ハ扶助料ヲ受クヘカラサルトキ
ハ順次次位者ニ轉給ス

民法第九百六十九條ニ依リ家督相續人タルコトヲ得サル者及推定家督相續人ニシテ廢除セラレタル者ニハ
扶助料ヲ給セス但シ疾病其ノ他身體又ハ精神ノ狀況ニ依リ家政ヲ執ルニ堪ヘサルカ爲廢除セラレタル者ハ
此ノ限ニ在ラス

養子ハ家督相續人ニ非サレハ扶助料ヲ給セス

第九條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦及子ナキトキハ扶助料ハ直系尊屬ニ給ス

前項ノ場合ニ在リテハ先ツ父ニ給シ父死亡シ又ハ扶助料ヲ受クヘカラサルトキハ母ニ給ス母ヨリ祖父ニ祖
父ヨリ祖母ニ轉給スルハ順次此ノ例ニ依ル

第十條 扶助料ヲ受クル者ナクシテ死亡シタル者ノ家ニ在ル兄弟姉妹二十歳未滿又ハ篤疾若ハ癡疾ニシテ自
活スルコト能ハサルトキハ扶助料ニ相當スル金額ノ三箇年分以内ヲ一時限リ給スルコトアルヘシ

第十一條 退隱料ヲ受ケタル者又ハ受クヘキ者左ノ各號ノ一ニ當ルトキハ之ヲ給セス

一 國籍ヲ喪失シタルトキ

二 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ

三 在職中ノ犯罪ニ依リ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

第十二條 遺族ニシテ左ノ各號ノ一ニ當ルトキハ扶助料ヲ給セス

一 前條第一號又ハ第二號ニ當ルトキ

二 寡婦婚姻シタルトキ

三 子年齢二十歳ニ滿チタルトキ

四 尊屬ノ女婚姻シタルトキ

第十三條 子二十歳ニ滿ルモ篤疾又ハ癡疾ニシテ自活スルコト能ハス他ニ扶助料ヲ受クル者ナキトキハ其ノ事由ノ存積スル間扶助料ノ三分ノ一ヲ給スルコトアルヘシ

第十四條 退隱料ヲ受クル者又ハ受クヘキ者左ノ各號ノ一ニ當ルトキハ其ノ間退隱料ノ支給ヲ停止ス

一 公權ヲ停止セラレタルトキ

二 六箇月以上行方不明ナルトキ

退隱料ヲ受クル者又ハ受クヘキ者再ヒ判任官待遇以上ノ官職ニ就キタル場合ニ於テハ其ノ俸給月額ニ退隱料月割額ヲ合シ退職當時ニ於ケル俸給月額ニ超過スルトキハ其ノ超過額ニ對スル退隱料ノ支給ヲ停止ス

第十五條 扶助料ヲ受クル者又ハ受クヘキ者前條第一項各號ノ一ニ當ルトキハ其ノ間扶助料ノ支給ヲ停止シ

第八條、第九條ノ順位ニ依リ之ヲ次位者ニ轉給ス

第十六條 退隱料及扶助料ノ年額並一時金ノ圓位未滿ハ圓位ニ滿タシム

第十七條 巡查又ハ看守ノ勤績年數ハ就職ノ月ヨリ起算シ退職ノ月ヲ以テ終ル但シ十二箇月未滿ノ端數ハ之ヲ算入セス

休職及教習中ノ月數ハ勤績年數ニ算入ス

第十八條 巡查又ハ看守其ノ職務ヲ以テ從軍シタルトキハ軍人恩給法ノ算則ニ照ラシテ從軍年ヲ加算ス

第十九條 本法ニ於テ寡婦、子、尊屬ト稱スルハ巡查又ハ看守タリシ者死亡ノ當時ヨリ引續キ其ノ家ニ在ル者ヲ謂フ但シ父死亡後出生シタル嫡出ノ子ハ死亡當時其ノ家ニ在ル者ト看做ス

第二十條 退隱料及扶助料ノ支給、停止及廢止ハ其ノ事由ノ生シタル翌月ヨリ之ヲ行フ

第二十一條 退隱料、一時金及扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル日ヨリ三年以内ニ請求スルニ非サレハ之ヲ給セス

第二十二條 退隱料ハ民事訴訟法第五百七十條及第六百十八條ノ規定ニ關シテハ恩給ト看做ス

第二十三條 本法ニ依ル給與金ノ支給ニ關スル事項ヲ裁定スヘキ行政官廳ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十四條 本法ニ依ル給與金ハ巡查又ハ看守最後ノ退職又ハ死亡當時ニ於テ俸給ヲ受ケタル經濟ノ負擔トス

第二十五條 本法ニ依ル給與金ノ一部又ハ全部ヲ拒否セラレタル者其ノ拒否ヲ不當ナリトスルトキハ訴願ヲ提起スルコトヲ得違法ニシテ權利ヲ傷害セラレタルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十六條 本法ハ陸軍監獄看守、海軍監獄看守、陸軍警守、海軍警查、貴族院守衛、衆議院守衛、女監取締及其ノ遺族ニ之ヲ適用ス

附則

第二十七條 本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(三十四年勅令第四百十七號ヲ以テ明治三十四年八月一日ヨリ施行ス)

第二十八條 明治十五年太政官達第四十一號巡查看守給助例ハ巡查、看守、陸軍監獄看守、海軍監獄看守、

海軍警査、貴族院守衛、衆議院守衛及其ノ遺族ニ之ヲ適用セス但シ巡查看守給助例ニ依リ現ニ給助ヲ受クル者又ハ既ニ受クヘキ事由ノ生シタル者又ハ其ノ事由ニ起因シテ一年以内ニ重症ニ趨キ又ハ死亡シタル者ニ對シテハ其ノ第一條乃至第七條ヲ適用スルノ外本法第三條、第十一條、第十二條、第十四條、第十五條第二十條第一項、第二十一條、第二十三條及第二十五條ヲ準用ス

明治十五年太政官達第六十六號ハ巡査、看守ニ明治三十三年法律第三十號ハ巡査、看守、陸軍監獄看守、陸軍警守、海軍監獄看守、海軍警査、貴族院守衛、衆議院守衛、女監取締及其ノ遺族ニ之ヲ適用セス

第二十九條 陸軍會計卒ニシテ陸軍監獄看守ノ職ヲ奉シ引續キ陸軍看守卒ト爲リ尙引續キ陸軍監獄看守ト爲リタル者又ハ陸軍看守卒ヨリ陸軍監獄看守トナリタル者ニ付テハ前在職中ノ年月數ヲ陸軍監獄看守ノ在職年月數ニ通算ス但シ軍人恩給法ニ依リ免除恩給ヲ受ケタル者ハ此ノ限ニ在ラス

前項ニ依リ通算シタル會計卒及看守卒ノ在職年月數ハ官吏恩給法ニ依ル在官年數及軍人恩給法ニ依ル服役年數ニハ之ヲ算入セス

附則 (二十八年法律第二十八號附則)

本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第二十九條ノ規定ハ明治三十四年八月一日以後本法施行以前ニ於テ退隱料、扶助料若ハ一時金ヲ受ケ又ハ受クヘキ事由ノ生シタル場合及勤績十年未滿ニシテ在職中死亡シタル者アリタル場合ニモ之ヲ適用ス
前項ノ期間内ニ於テ既ニ一時金ヲ受ケタル者又ハ其ノ遺族ニシテ前項ニ依リ退隱料又ハ扶助料ヲ受クルトキハ一時金ヲ返納セシム其ノ完納ニ至ル迄退隱料又ハ扶助料ヲ以テ返納金ニ充ツ
第二項ニ依リ退隱料、扶助料又ハ一時金ヲ請求シ得ヘキ期間ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス
女監取締ノ明治三十六年三月三十一日以前ニ於ケル勤績年數ハ巡査、看守退隱料及遺族扶助料法ニ規定スル勤績年數ニ非サルモノト看做ス

●巡查看守退隱料及遺族扶助料法施行令

三十四年七月 勅令第四百四十八號

改正

四〇年五月 勅令一九〇號

朕巡查看守退隱料及遺族扶助料法施行令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

巡查看守退隱料及遺族扶助料法施行令

第一條 巡查看守退隱料及遺族扶助料法第四條第二項ノ退隱料年額及同條第三項ノ增加金額ノ等差ハ左ノ如シ

退隱料年額	增加金額
第一 兩眼ヲ盲シ若ハ二肢以上ヲ亡シタルトキ	六箇月分
第二 前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リタルトキ	五箇月半分
第三 一肢ヲ亡シ若ハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ	五箇月分
第四 前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リタルトキ	四箇月半分
第五 一眼ヲ盲シ若ハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ	四箇月分
第六 前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リタルトキ	三箇月分
傷痕疾病ノ等差ハ文官傷痕疾病等差例ニ依ル	一箇月分

第二條 巡查看守退隱料及遺族扶助料法第二十三條ノ行政官廳ハ國庫ヨリ給與金ヲ支給スヘキ者ニ在リテハ内閣恩給局長、其ノ他ニ在リテハ地方長官(東京府ニアリテハ警視總監)トス

臺灣ニ於テハ前項ノ行政官廳ハ國庫ヨリ給與金ヲ支給スヘキ者ニ在リテハ臺灣總督其ノ他ニ在リテハ(知事及)廳長トス

第一項ノ行政官廳ハ統監府所屬ノ者ニ在リテハ統監、關東都督府所屬ノ者ニ在リテハ關東都督、樺太廳所屬ノ者ニ在リテハ樺太廳長官トス

附則

第二輯 官規 第四章 恩給退隱料及扶助料 退隱賜金

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●統監府巡查、看守及女監取締ノ退隱料及遺族扶助料ニ

關スル制 四十年五月
法律第四十九號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル統監府、關東都督府及樺太等在勤巡查、看守及女監取締ノ退隱料及遺族扶助料ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十五年法律第二十九號第一條ノ規定ハ別ニ勅令ヲ以テ定ムルモノヲ除クノ外統監府及關東都督府並其ノ所屬官署ニ在勤スル巡查、看守及女監取締ニ之ヲ準用ス樺太ニ在勤スル者ニ付亦同シ

附則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本法ノ規定ハ統監府及其ノ所屬官署ニ在勤スル者ニ關シテハ明治三十九年二月以降、關東都督府及其ノ所屬官署ニ在勤スル者ニ關シテハ明治三十九年九月以降ノ在職月數ニモ之ヲ適用ス

(參照)

明治三十五年法律第二十九條

第一條 養育ニ在勤スル巡查看守陸軍監獄看守陸軍警手及女監取締ニシテ二箇年以上引續キ在職シタル者ニハ巡查看守退隱料及遺族扶助料法ノ勤續年數計算ニ於テ其ノ在職一箇月ニ對シ半箇月ヲ加算ス但シ從軍年ノ加算アル場合ハ此ノ限ニ在ラス前項ノ加算ハ臺灣ニ到着シタル日ニ始マル

●同上法律ヲ適用セサル巡查、看守及女監取締ニ關スル制

四十年五月
勅令第百八十九號

朕明治四十年法律第四十九號ヲ適用セサル巡查、看守及女監取締ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
明治四十年法律第四十九號ハ政府ヨリ俸給ノ支給ヲ受ケサル巡查、看守及女監取締ニ之ヲ適用セス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●在外指定學校職員退隱料及遺族扶助料法

三十八年三月
法律第六十四號 改正 四〇年法律二號
四一年五月六號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル在外指定學校職員退隱料及遺族扶助料法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

在外指定學校職員退隱料及遺族扶助料法

第一條 本法ニ於テ在外指定學校ト稱スルハ在外國本邦人ノ爲ニ設置シタル學校ニシテ外務大臣及文部大臣ノ指定シタルモノヲ謂フ

第二條 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法ハ第一條、第八條、第十條第二項、第四項、第十六條、第十七條第一項、第二十條及第二十一條ヲ除クノ外在外指定學校ノ職員及其ノ遺族ニ關シ之ヲ準用ス但シ同法ニ規定スル府縣知事ノ職務ハ領事官之ヲ行フ

第三條 在外指定學校ノ職員ノ資格並其ノ就職及退職ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム
第三條 市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法、府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法、明治二十九年法律第十三號、明治三十三年法律第七十七號又ハ本法ニ依リ退隱料ヲ受クル者在外指定學校ノ職員トナリ退職現時ノ俸給額ト同額以上ノ俸給ヲ受クルトキハ其ノ間退隱料ノ支給ヲ停止ス

第四條 在外指定學校ノ職員左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ退隱料ヲ受クル資格ヲ失フ
一 年齡六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ因リ退職シタルトキ
二 服務上ノ義務ニ違背シ若ハ服務ヲ怠リ又ハ體面ヲ汚辱スルノ所爲アリタル爲其ノ職ヲ解カレタルトキ
三 教員免許狀褫奪ノ處分ヲ受ケタルトキ
四 禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ
五 信用若ハ風俗ヲ害スル罪ヲ犯シ罰金ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレタルトキ

第二輯 官規 第四章 恩給退隱料及扶助料 退官賜金

六 破産若ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケタルトキ

第五條 本法ニ依リ退隱料ヲ受クル者及前條各號ノ一ニ該當スル者ニハ退職給與金ヲ給セス

第六條 明治二十九年法律第十三號ハ第一條、第三條、第四條及第五條ヲ除クノ外在外指定學校ノ職員ニ關シ之ヲ準用ス

在外指定學校ノ職員ノ在職年月數ト公立學校ノ學校長、正教員、舎監、書記、公立圖書館ノ館長、司書、書記及小學校ノ本科正教員タルヘキ資格ヲ有スル公立幼稚園ノ保姆ノ在職年月數トハ退隱料、扶助料及扶助金ノ支給ニ關シ相互通算ス

第七條 本法ニ依リ支給スヘキ退隱料、退職給與金、扶助料及扶助金並其ノ支給ニ關スル費用ハ國庫ノ負擔トス

第八條 特別ノ地域ニ在リテハ勅令ヲ以テ本法中主務大臣及領事官ノ管掌ニ屬スル事項ヲ行フヘキ者ヲ定ムルコトヲ得

附則

本法ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●同上法律ニ依ル學校ノ指定

四十二年十一月末日現在

- 仁川居留民團立仁川尋常高等小學校 三十九年八月 統計第八十五號
- 京城居留民團立第一尋常高等小學校 三十九年八月 統計第九十一號
- 群山居留民團立群山尋常高等小學校 三十九年十月 統計第一百十二號
- 平壤居留民團立平壤尋常高等小學校 三十九年十月 統計第一百十三號

- 馬山居留民團立馬山尋常高等小學校 三十九年十月 統計第一百四號
- 元山居留民團立元山尋常高等小學校 三十九年十月 統計第一百七號
- 釜山居留民團立釜山商業學校 四十年一月 統計第十號
- 釜山居留民團立釜山高等女學校 同
- 釜山居留民團立釜山尋常高等小學校 同 改正 四十一年 統計第五十七號
- 釜山居留民團立釜山尋常小學校 四十年一月 統計第十號
- 釜山居留民團立草梁尋常小學校 同
- 木浦居留民團立木浦尋常高等小學校 四十年二月 統計第二十號
- 鎮南浦居留民團立鎮南浦尋常高等小學校 四十年二月 統計第二十八號
- 大邱居留民團立大邱尋常高等小學校 四十一年一月 統計第三號
- 龍山居留民團立龍山尋常高等小學校 四十一年三月 統計第四十六號
- 京城居留民團立第二尋常高等小學校 四十一年四月 統計第五十六號
- 京城居留民團立高等女學校 四十一年九月 統計第三十八號
- 新義州居留民團立新義州尋常高等小學校 四十二年四月 統計第三十五號
- 京城居留民團立京城中學校 四十二年六月 統計第五十一號

第二編 官規 第四章 恩給退隱料及扶助料 退官賜金

太田日本居留民立太田尋常高等小學校 四十二年七月 統告第六十二號
 開城居留民立開城尋常高等小學校 四十二年七月 統告第六十五號
 統營日本人會立統營尋常高等小學校 同

●同上法律ニ於ケル學校職員ノ資格及在職年數算定方 三十八年十一月 勅令第二百二十九號

朕在外指定學校職員退隱料及遺族扶助料法ニ於ケル學校職員ノ資格及在職年數算定方等ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

- 第一條 在外指定學校職員退隱料及遺族扶助料法ニ於テ職員ト稱スルハ學校長、教員、舍監及書記トス
- 在外指定學校中小學校若ハ實業補習學校ノ學科ヲ授クル學校又ハ之ニ準スヘキ學校ニ在リテハ訓導ヲ正教員、准訓導ヲ准教員トシ其ノ他ノ學校ニ在リテハ教諭、助教諭ヲ正教員、其ノ他ノ教員ヲ准教員トス
- 第二條 在外指定學校職員ノ在職年數ハ就職ノ月ヨリ起算シ退職ノ月ヲ以テ終トス
- 第三條 左ニ掲クル年數及月數ハ在職年數ヨリ除算スヘシ
 - 一 在外指定學校職員退隱料及遺族扶助料法第四條各號ノ一ニ該當シタル者再就職シタルトキハ其ノ前在職ノ年數及月數
 - 二 恩給又ハ退隱料ヲ受クヘキ職ニ在ル者ニシテ在外指定學校職員ヲ兼ヌルトキハ其ノ兼職中ノ年數及月數
- 第四條 在外指定學校ノ廢止又ハ指定取消ノ際其ノ學校職員タル者即日他ノ在外指定學校又ハ公立學校ノ職員ニ採用セラレタルトキハ勤績者ト看做ス
- 第五條 明治二十五年勅令第三十二號ハ在外指定學校職員退隱料及遺族扶助料ノ支給ニ關シ之ヲ準用ス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●在外指定學校職員退隱料及遺族扶助料等支給規則 三十八年十一月 文令第二十二號

- 第一條 明治二十五年文部省令第一號公立學校職員退隱料及遺族扶助料支給規則ハ第七條第二十五條ヲ除ク外在外指定學校職員退隱料及遺族扶助料等ノ支給ニ關シ之ヲ準用ス
- 第二條 在外指定學校職員退隱料及遺族扶助料法第二條及府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十條第一項ニ依リ退職給與金ヲ受クヘキ者ハ給與金請求書ヲ作リ在職中ノ履歷書ヲ添付シ退職ノ際勤務セシ學校所在地ヲ管轄スル領事官ニ差出スヘシ
- 領事官ニ於テ前項ノ請求書ヲ受ケタルトキハ事實ヲ調査シ證據書類ヲ添ヘ文部大臣ニ差出スヘシ

(參照)

支給上ニ關シ實際本則ニ依ル

●在外指定學校職員恩給審査規程 四十二年六月 統令第十九號

在外指定學校職員恩給審査規程左ノ通定ム

在外指定學校職員恩給審査規程

- 第一條 統監府ニ在外指定學校職員恩給審査委員ヲ置キ委員長一人及委員二人ヲ以テ之ヲ組織ス
- 在外指定學校職員恩給審査委員ハ在外指定學校職員ノ退隱料及遺族扶助料ヲ受クヘキ資格及權利ヲ審査ス
- 第二條 在外指定學校職員恩給審査委員長ハ審査ニ關スル事務ヲ管理シ審査ノ結果ヲ統監ニ具申ス
- 第三條 在外指定學校職員恩給審査委員長及委員ハ統監府高等官ノ中ヨリ統監之ヲ命ス
- 第四條 統監府ニ在外指定學校職員恩給顧問醫ヲ置キ在外指定學校職員退隱料及遺族扶助料ニ關スル醫術上ノ事項ヲ審査ス

在外指定學校職員恩給顧問醫ハ統監之ヲ命ス

第五條 在外指定學校職員恩給審査委員ノ事務ニ關シ書記ヲ置キ統監府屬ヲ以テ之ニ充ツ

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●韓國居留民團立在外指定學校職員ノ退隱料及遺族扶助料ニ

關スル制

四十年四月
法律第四十四號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル韓國ニ在勤スル居留民團立在外指定學校職員ノ退隱料及遺族扶助料ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

韓國ニ在勤スル居留民團立在外指定學校職員ニシテ三箇年以上引續キ在職シタル者ニハ在外指定學校職員退隱料及遺族扶助料法ノ在職年數計算ニ於テ其ノ在職一箇月ニ對シ半箇月ヲ加算ス但シ從軍年ノ加算アル場合ハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ加算ハ任地ニ到著シタル日ニ始ル

附則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前地ニ到著シタル者ニ付テハ本法施行ノ日ヲ以テ到著ノ日ト看做ス

●文官判任以上ノ者退官賜金制

二十三年六月
勅令第九十八號

朕茲ニ文官判任官以上ノ者退官賜金ノ件ヲ裁可ス

文官判任以上ノ者在官滿一年以上十五年未滿ニシテ退官シタル者ニハ退官現時ノ俸給半箇月分ヲ以テ在官年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス但非職滿期ニ由リ退官シタル者ハ其在職最終ノ俸給額ニ

依リ之ヲ給ス

本令施行前ニ滿年賜金若クハ一時賜金ヲ受ケタル者又ハ前項ノ賜金ヲ受ケタル者再ヒ任官シ自後退官シタルトキハ前項ニ掲クル在官年數ヲ其再任ノ日ヨリ起算ス

恩給ヲ受クル者並自己ノ便宜ニ由リ退官シタル者又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ由リ免官シタル者ニハ本令ノ賜金ヲ給セス

本令ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

●官吏傳染病豫防救治ノ出務上感染死亡ノ手當金給與方

十九年七月
勅令第二十三號

各官廳

官吏准官吏公務ニ依リ傳染病豫防救治ニ從事シ爲メニ感染シ又ハ死亡シタルトキハ左ノ區別ニ從ヒ手當金ヲ給ス

- 一 手當金ヲ分チ吊祭料、救助料、療治料ノ三種トス
- 一 救助料ハ感染者又ハ死亡シタル者ノ遺族ニ之ヲ給ス
- 一 療治料ハ感染者治療看護ノ雜費トシテ之ヲ給ス
- 一 吊祭料ハ年俸十二分ノ一若クハ月俸一箇月分若クハ日給三十日分ヲ給ス但官ヨリ埋葬スル者ハ之ヲ給セス
- 一 救助料ヲ分テ二等トス
 - 一 等 俸給五箇月分日給百五十日分
 - 二 等 俸給三箇月分日給九十日分
- 一 感染者死亡シタルトキハ一等救助料ヲ給シ死亡セサルトキハ二等救助料ヲ給ス
- 一 療治料ハ一日一圓ヲ給ス但官ヨリ治療スル者ハ之ヲ給セス

●官吏療治料給與制

二十五年九月
勅令第八十號

朕官吏療治料給與ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
官吏ニシテ職務ノ爲メ傷疾ヲ受ケタル者ハ特別ノ規定アルモノヲ除ク外療治料實費ヲ以テ給與ス
但府縣ノ收入ヨリ給料ヲ受クル者ノ療治料ハ其府縣ノ負擔トス

●傳染病豫防救治ニ従事スル者ノ手當金ニ關スル制

三十三年三月
法律第三十號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル傳染病豫防救治ニ従事スル者ノ手當金ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
第一條 判任以上ノ官吏ニ非スシテ傳染病ノ豫防救治ニ従事スル者公務ニ因リ病毒ニ感染シ又ハ之ニ原因シ
テ死亡シタルトキハ本法ノ規定ニ依リ手當金ヲ給ス
第二條 手當金ハ左ノ四種トス

- 一 療治料
- 二 給助料
- 三 弔祭料
- 四 遺族扶助料

第三條 病毒ニ感染シタル者ニハ療治料ヲ給ス感染者治愈シタルトキハ給助料ヲ給シ死亡シタルトキハ其ノ
遺族ニ弔祭料及遺族扶助料ヲ給ス遺族ナキトキハ葬儀ヲ行フ者ニ弔祭料ヲ給ス
遺族中遺族扶助料ヲ受クヘキ者ノ順位ハ官吏遺族扶助法ノ例ニ依ル
第四條 遺族扶助料ハ死者ノ受ケタル給料ノ金額ニ應シ別表ニ依リ一時之ヲ給ス其ノ給料ヲ受ケサル者ニ在
リテハ別表ノ範圍内ニ於テ本屬長官適宜之ヲ給ス
第五條 療治料ハ命令ノ定ムル區別ニ依リ一日三圓以内ヲ給ス

給助料ハ遺族扶助料ノ二分ノ一ニ相當スル金額ヲ給ス

弔祭料ハ月給一箇月分又ハ日給三十日分ニ相當スル金額ヲ給ス其ノ給料ヲ受ケサル者ニ在リテハ本屬長官
適宜之ヲ給ス

第六條 手當金ハ國庫支辨ノ事務ニ従事スル者ニ在リテハ國庫ノ負擔トシ府縣費支辨ノ事務ニ従事スル者ニ
在リテハ府縣ノ負擔トス
第七條 地方長官ハ市區町村ニ指示シ本法ノ規定ニ準シ其ノ傳染病豫防救治ニ従事スル者ノ手當金支給ニ關
スル規定ヲ設ケシムルコトヲ得

(別表)

等	級	月	給	遺族扶助料
一	等	二百	以上	九百
二	等	百六十	以上	八百
三	等	百三十	以上	八百
四	等	百	以上	七百
五	等	八十	以上	六百
六	等	七十	以上	五百
七	等	六十	以上	四百
八	等	五十	以上	三百
九	等	四十	以上	二百
十	等	三十	以上	一百

十	一	等	二	十	四	以	上	二	百	五	十	四
十	二	等	十	四	以	上	二	百	五	十	四	四
十	三	等	十	四	未	滿	百					四

●同上療治料額

三十三年四月 勅令第四百四十二號

朕傳染病豫防救済ニ從事スル者ノ療治料ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 明治三十三年法律第三十號第五條ノ療治料ハ給料ヲ受クル者ニ在リテハ其給料額ニ依リ同俸別表ノ等級ニ照
 シ一等乃至四等ノ者ニハ一日三圓五等乃至十二等ノ者ニハ一日二圓十三等ノ者ニハ一日一圓ヲ給ス其ノ給料
 ヲ受ケサル者ニ在リテハ一日三圓以内ニ於テ本屬長官適宜之ヲ給ス

●官役職工人夫扶助令

四十年五月 勅令第四百八十六號

朕官役職工人夫扶助令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官役職工人夫扶助令

- 第一條 政府ニ於テ使役スル職工、人夫其ノ他ノ傭人自己ノ重大ナル過失ニ因ルニ非スシテ業務上傷病ヲ受
 ケ、疾病ニ罹リ又ハ死亡シタルトキハ特別ノ規定アルモノヲ除クノ外本令ニ依リ扶助金ヲ給ス
- 第二條 扶助金ヲ分テ左ノ五種トス
- 一 療治料
 - 二 給助料
 - 三 不具癱疾者扶助料
 - 四 遺族扶助料

五 葬祭料

第三條 療治料ハ傷病ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ治療ヲ要スル者、給助料ハ療養ノ爲休業中ノ者又ハ治療數月ヲ
 要スル見込ヲ以テ退業シタル者ニ之ヲ給ス
 不具癱疾者扶助料ハ終身自用ヲ辨スルコト能ハサル者、終身業務ヲ營ムコト能ハサル者其ノ他ノ不具癱疾
 者ニ之ヲ給ス
 葬祭料及遺族扶助料ハ死亡ノトキ死者ト同一ノ家ニ在リタル遺族ニ之ヲ給ス
 死者ニシテ前項ノ遺族ナキトキハ葬儀ヲ行フ者ニ葬祭料ヲ給スルコトヲ得
 第四條 遺族中葬祭料及遺族扶助料ヲ受クヘキ者ハ左ノ順位ニ依ル
 配遇者 子 父母 孫 祖父母 兄弟 姉妹
 前項同順位内ニ於テハ男ハ女ニ、長ハ幼ニ先ツ但シ家督相續人ハ最先トス
 第五條 不具癱疾者扶助料ヲ受ケ又ハ治療數月ヲ要スル見込ヲ以テ退業シタルトキハ療治料、葬祭料及遺族
 扶助料ヲ給セス
 第六條 扶助金ノ額ハ別表ニ依ル

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
 官役人夫死傷手當規則ハ之ヲ廢止ス
 (別表)

給助料	療治料		實費
	療養ノ爲休業中ノ者	治療數月ヲ要スル見込ヲ以テ退業シタル者	
	日給 二分ノ一以下	日給 三分ノ一以下	
	日給 五分ノ一以下	日給 三分ノ一以下	

不具癡疾者扶助料	終身自用ヲ辨スルコト能ハサル者	日給 百二十日分以上
	終身業務ヲ營ムコト能ハサル者	日給 百四十日分以上
葬	其ノ他ノ不具癡疾者	日給 百四十日分以上
		十圓以上十五圓以下
遺族扶助料		日給 百五十日分以上

一 不具癡疾者扶助料又ハ遺族扶助料ノ金額三十圓ニ充タサルトキハ三十圓ヲ給ス
 一 稼高ニ依リ賃錢ヲ受クル者ニ在リテハ前三十日間ノ就業平均額ニ依リ其ノ給額ヲ定ム但シ平均額ヲ算出スルコト能ハサルトキハ適宜之ヲ定ム

● 韓國在住者ノ恩賞諸祿受領ニ關スル制 四十年二月 統告第二十六號

- 一 韓國内ニ在住スル者ノ恩賞諸祿ハ是迄帝國内各府縣ヨリ直接交付シ來リタルモ來四月渡以降ハ所轄理事應又ハ(同支應)ヨリ之ヲ交付スルニ付每交付期月ニ所轄理事應又ハ同支應ニ就キ證書ノ檢閲ヲ受ケタル後現金ヲ受領スヘシ
- 二 韓國内ニ在住スル左記恩賞諸祿ノ受領者ハ證書ノ寫ヲ添付シテ原籍及現住所ヲ速ニ所轄理事應又ハ(同支應)ヘ届出ヘシ但シ證書ヲ提示シ口頭ニテ届出ルモ妨ナシ
 - 一 勳章年金
 - 二 軍人恩給
 - 三 同遺族扶助料
 - 四 官吏恩給

- 五 同遺族扶助料
- 六 公立學校職員退隱料及遺族扶助料
- 七 巡查看守退隱料及遺族扶助料(國庫支辨)

第五章 分限

一九〇

●文官分限令

三十二年三月
勅令第六十二號

改正

三六年勅令一五六號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ文官分限令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文官分限令

第一條 本令ハ親任式ヲ以テ敘任スル官、公使、祕書官及法令ニ別段ノ規定アルモノヲ除クノ外一般ノ文官ニ適用ス

第二條 官吏ハ刑法ノ宣告、懲戒ノ處分又ハ本令ニ依ルニ非サレハ其ノ官ヲ免セラルルコトナシ

第三條 官吏左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ官ヲ免スルコトヲ得

一 不具、痲疾ニ因リ又ハ身體若ハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルニ堪ヘサルトキ

二 傷疾ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リ其ノ職ニ堪ヘサルニ因リ又ハ自己ノ便宜ニ因リ免官ヲ願出タルトキ

三 官制又ハ定員ノ改正ニ因リ過員ヲ生シタルトキ

前項第一號ニ依リ其ノ官ヲ免スルトキハ高等官ニ在テハ文官高等懲戒委員會、判任官ニ在テハ文官普通懲戒委員會ノ審査ニ付ス

第四條 官吏ハ廢官若ハ廢廳ノ場合ニ於テハ當然退官者トス

第五條 第十一條第一項第三號及第四號ニ依リ休職ヲ命セラレ滿期ニ至リタルトキハ當然退官者トス

第六條 官吏ハ其ノ意ニ反シテ同等官以下ニ轉官セラルルコトナシ

第七條 文官高等懲戒委員會ニ顧問醫二人ヲ置ク

審査上必要ノ場合ニ於テハ臨時顧問醫ヲ加フルコトヲ得

第八條 文官普通懲戒委員會ニ臨時顧問醫ヲ置ク

第九條 懲戒委員會ハ本令ニ依ル審査ヲ爲ス前豫メ顧問醫ノ意見ヲ徵スヘシ

第十條 第三條第二項ニ依ル懲戒委員會ノ審査ニ關シテハ文官懲戒令第十二條、第十三條、第二十四條、第二十五條、第二十九條乃至第三十四條ノ規定ヲ準用ス

第十一條 官吏左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ休職ヲ命スルコトヲ得

一 懲戒令ノ規定ニ依リ懲戒委員會ノ審査ニ付セラレタルトキ

二 刑事事件ニ關シ告訴若ハ告發セラレタルトキ

三 官制又ハ定員ノ改正ニ因リ過員ヲ生シタルトキ

四 官廳事務ノ都合ニ依リ必要ナルトキ

前項休職ノ期間ハ第一號及第二號ノ場合ニ在テハ其ノ事件ノ懲戒委員會又ハ裁判所ニ繫屬中トシ第三號及

第四號ノ場合ニ在テハ高等官ニ付テハ滿二年、判任官ニ付テハ滿一年トス

第十二條 休職者ハ其ノ本官ヲ奉シテ職務ニ從事セス其ノ他總テ在職官吏ト異ナルコトナシ

前條第一項第三號及第四號ニ依リ休職ヲ命セラレタル者ニハ本屬長官ハ事務ノ都合ニ依リ何時ニテモ復職

ヲ命スルコトヲ得

第十三條 第十一條ニ依リ休職ヲ命セラレタル者ニハ其ノ休職中俸給ノ三分ノ一ヲ給ス

第十四條 免官ハ勅任官ニ在テハ内閣總理大臣、奏任官ニ在テハ内閣總理大臣ヲ經テ本屬長官奏請シ裁可ニ

依リ之ヲ行フ

休職ハ勅任官ニ在テハ内閣總理大臣奏請シ裁可ニ依リ之ヲ行ヒ奏任官ニ在テハ内閣總理大臣ノ認可ヲ經テ

本屬長官之ヲ命ス其ノ復職ヲ命スルトキ亦同シ

附則

第十五條 本令ハ明治三十二年四月十日ヨリ施行ス

官吏非職條例、明治二十三年勅令第二百八十六號其ノ他從前ノ命令ニシテ本令ノ規定ニ抵觸スルモノハ本

令施行ノ日ヨリ廢止ス

第十六條 本令施行前官吏非職條例又ハ明治二十三年勅令第二百八十六號ニ依リ非職又ハ休職ヲ命セラレ未
タ滿期ニ至ラサル者ハ本令第十一條第一項第四號ノ休職者ニ關スル規定ヲ適用ス但シ本令第十三條ハ此ノ
限ニ在ラス

第十七條 本令中休職トアルハ他ノ法令ニ於テ規定スル非職ト看做ス

●官吏ノ勤績ニ關スル制 二十六年十月 勅令第九十八號

朕官吏ノ勤績ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

廢官廢廳若クハ官名改定ノ際其ノ廢改ニ係ル官職ニ在ル者即日他官ニ任セララルトキハ勤績者トス

●理事廳看守ノ職ニ在リタル者勤績ニ關スル制 四十二年十一月 勅令第六十四號

統監府監獄官制施行ノ際理事廳看守ノ職ニ在リタル者ヨリ直ニ統監府看守ヲ命セラレタル者及統監府司法警察官官制施行ノ際韓國政府聘用中ノ統監府巡查又ハ理事廳巡查ヨリ直ニ統監府巡查ヲ命セラレタル者ハ勤績者トス

●統監府營林廠職員ニ任セラレタル陸軍現役將校同相當官ニ

關スル制 四十年三月 勅令第七十六號

朕陸軍現役將校同相當官ニシテ統監府營林廠職員ニ任セラレタル者ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
陸軍現役將校同相當官ニシテ統監府營林廠職員ニ任セラレタル者ハ陸軍ニ於テ之ヲ定員外ト爲スコトヲ得
前項ニ依リ定員外ト爲リタル者ニ對シテハ陸軍ニ在リテハ在職陸軍現役武官ニ關スル規定ヲ適用ス但シ給與
ニ關スル規定ハ此ノ限ニ在ラス

附則

本令ハ明治四十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●外國政府ニ聘用セラレタル官吏ニ關スル制 三十七年八月 勅令第九十五號 改正 三十九年 勅令二二三號

朕外國政府ニ聘用セラレタル官吏ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
在職官吏ニシテ許可ヲ受ケ外國政府ニ聘用セラレタル者アルトキハ其ノ聘用中ニ限り臨時其ノ官ヲ増置セラ
レタルモノトス其ノ現役軍人ナルトキハ定員外トス
前項ノ官吏ニ對シ必要アルトキハ特ニ在職者ニ關スル規定ヲ適用スルコトヲ得
前二項ノ場合ニ於テ俸給ハ之ヲ停止シ其ノ他ノ給與ハ之ヲ支給セス

附則

明治三十三年勅令第九號ハ之ヲ廢止ス

●官吏待遇者ニシテ外國政府ニ聘用セラレタルモノニ

關スル制 三十七年十二月 勅令第二百三十七號

朕官吏ノ待遇ヲ受クル在職者ニシテ外國政府ニ聘用セラレタルモノニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
明治三十七年勅令第九十五號ハ官吏ノ待遇ヲ受クル在職者ニシテ許可ヲ得テ外國政府ニ聘用セラレタルモ
ノニ之ヲ準用ス

●外國政府ニ聘用セラレタル判事檢事ニ關スル制 三十九年十月 勅令第二百八十一號

朕外國政府ニ聘用セラレタル判事檢事ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
在職判事檢事ニシテ許可ヲ受ケ外國政府ニ聘用セラレタル者ハ聘用中及其ノ聘用ノ終リタル後關員ナキ間之
ヲ定員外トス

前項ノ判事檢事ニ對シ必要アルトキハ特ニ在職者ニ關スル規定ヲ適用スルコトヲ得
前二項ノ場合ニ於テ俸給ハ之ヲ停止シ旅費ハ之ヲ支給セス

一九四

●東洋拓殖株式會社ノ職員ト爲リタル官吏ニ關スル

制 三十九年八月 改正 四一年勅令二三三號、三一六號
勅令第二百九號

朕南滿州鐵道株式會社ノ職員ト爲リタル官吏ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
在職官吏ニシテ南滿州鐵道株式會社東洋拓殖株式會社又ハ鴨綠江探木公司ノ職員ト爲リタル者ニ關シテハ明
治三十七年勅令第九十五號ヲ準用ス

第六章 服務紀律

●官吏服務紀律

二十年七月
勅令第三十九號

朕官吏服務紀律ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ施行セシム

官吏服務紀律

- 第一條 凡ソ官吏ハ天皇陛下及天皇陛下ノ政府ニ對シ忠順勤勉ヲ主トシ法律命令ニ從ヒ各其ノ職務ヲ盡スヘシ
- 第二條 官吏ハ其ノ職務ニ付本屬長官ノ命令ヲ遵守スヘシ但シ其ノ命令ニ對シ意見ヲ述ルコトヲ得
- 第三條 官吏ハ職務ノ内外ヲ問ハズ廉耻ヲ重シ貪汚ノ所爲アルヘカラス
- 第四條 官吏ハ己ノ職務ニ關スルト又ハ他ノ官吏ヨリ聞知シタルトヲ問ハズ官ノ機密ヲ漏洩スルコトヲ禁ス其ノ職ヲ退ク後ニ於テモ亦同様トス
- 裁判所ノ召喚ニ依リ證人又ハ鑑定人トナリ職務上ノ祕密ニ就キ訊問ヲ受クルトキハ本屬長官ノ許可ヲ得タル件ニ限リ供述スルコトヲ得
- 第五條 官吏ハ私ニ職務上未發ノ文書ヲ關係人ニ漏示スルコトヲ禁ス
- 第六條 官吏ハ本屬長官ノ許可ナクシテ擅ニ職務ヲ離レ及職務上居住ノ地ヲ離ルルコトヲ得ス
- 第七條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ營業會社ノ社長又ハ役員トナルコトヲ得ス
- 第八條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ其ノ職務ニ關シ慰勞又ハ謝儀又ハ何等ノ名義ヲ以テスルモ直接ト間接トヲ問ハズ總テ他人ノ贈遺ヲ受ルコトヲ得ス
- 官吏外國ノ君主又ハ政府ヨリ授與セントスル所ノ勳章榮賜俸給並贈遺ヲ受クルニハ天皇陛下ノ裁可ヲ要ス

第九條 左ニ掲ケタル者ト直接ニ關係ノ職務ニ居ルノ官吏ハ其ノ饗燕ヲ受クルコトヲ得ス

- 一 官廳ノ工事ヲ受負フ者
- 一 官廳ノ爲替方又ハ出納ヲ引受クル者
- 一 官廳ノ補助金ヲ受クル起業者
- 一 官廳ノ用品ヲ調達スル者
- 一 官廳ト諸般ノ契約ヲ結フ者

第十條 凡ソ上官タル者ハ職務ノ内外ヲ問ハス所屬官吏ヨリ贈遺ヲ受クルコトヲ得ス

第十一條 官吏並ニ其ノ家族ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ直接ト間接トヲ問ハス商業ヲ營ムコトヲ得

ス

第十二條 官吏ハ取引相場會社ノ社員タルコトヲ得ス及間接ニ相場商業ニ關係スルコトヲ得ス

第十三條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ本職ノ外ニ給料ヲ得テ他ノ事務ヲ行フコトヲ得ス

第十四條 浪費シテ産ヲ破リ其ノ分ニ應セサル負債ヲ爲ス者ハ過失ノ一タルヘシ

第十五條 官吏ハ私立郵船會社又ハ私立鐵道會社ヨリ無賃乘船無賃乘車切符ヲ受クルコトヲ得ス

第十六條 凡ソ局長、所長其ノ他一部ノ長ハ各所屬官吏ヲ監督シ其ノ過失若シ懲戒處分ヲ行フノ區域ノ内ニ

在ラサル者ハ之ヲ訓告スルコトヲ務ムヘシ若シ懲戒處分ヲ要スト認ムルトキハ事狀ヲ具ヘテ之ヲ本屬長官

ニ稟告スヘシ其ノ情ヲ知り隠蔽シテ稟告セサル者亦過失タルコトヲ免レス

第十七條 本紀律ハ高等官判任官及俸給ヲ得テ公務ヲ奉スル者ニ適用ス

● 不用品拂下ノトキ其ノ官廳所屬官吏ノ入札禁止

八八年八月 太政官達第五百二十二號

院省〔使〕廳府縣

〔官地官林及ヒ〕不用ノ物品等公ケノ入札法ヲ以テ拂下候節其官廳ニ屬スル官員ニ限リ本人ハ勿論其代理人ト

雖モ投票爲致候儀不相來候條此旨相達候事

● 官吏免官ノトキ事務引渡日限

六九年十二月 太政官達第四百一號

院省〔使〕府縣

諸官員免職ノ節從來擔當ノ事務ハ即日同官又ハ次官へ可引渡若事故有之難行届モノハ辭令拜受ノ翌日ヨリ五日ヲ限リ悉皆引渡可申〔尤有日限中ハ其日數ニ應シ前官月給三分ノ一下賜〕候此旨相達候事

● 理事官副理事官ニシテ轉勤ヲ命セラレタル場合ニ關スル制

四十年七月 統訓第十六號

理事應理事官又ハ〔支廳在勤〕副理事官ニシテ轉勤ヲ命セラレ未タ事務ノ引繼ヲ了セサル間ハ從前ノ通執務スヘシ

前項事務ノ引繼ヲ了シタルトキハ之ヲ告示スヘシ

● 統監府及所屬官署ノ執務時間

三十九年六月 閣令第三號

統監府及其ノ所屬官署ノ執務時間ハ統監ニ於テ適宜之ヲ定メ施行スルコトヲ得

● 統監府及所屬官署ノ執務時間

三十九年七月 統令第二十二號

改正 四〇年統令四〇號

統監府及所屬官署ノ執務時間左ノ通定メ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

統監府及所屬官署ノ執務時間

一 三月一日ヨリ六月三十日迄

午前九時ヨリ午後五時ニ至ル但シ土曜日ハ午後一時迄トス

七月一日ヨリ九月二十日迄

午前九時ヨリ午後一時ニ至ル

九月二十一日ヨリ十月三十一日迄

午前九時ヨリ午後五時ニ至ル但シ土曜日ハ午後一時迄トス

十一月二日ヨリ翌年二月末日迄

午前十時ヨリ午後四時ニ至ル但シ土曜日ハ午後一時迄トス

- 二 統監府所屬官署ノ職員ニシテ現業ニ従事スル者ノ執務時間ハ當該官署ノ長官之ヲ定ム
- 三 事務繁劇ノ場合ニ於テハ前記ノ時間ニ拘ラス執務ス

● 休暇日

六年十一月 改正 六年途三二一號
太政官告第二號

自今休暇左ノ通被定候事

一月一日ヨリ三日迄 十二月二十九日ヨリ三十一日迄

九年十二月三十一日
太政官途第二十七號

從前一六日休暇ノ處來ル四月ヨリ日曜日ヲ以テ休暇ト被定候條此旨相達候事
但土曜日ハ正午十二時ヨリ休暇タルヘキ事

● 祭日祝日等ノ休暇日

六年十一月 改正 一年途三三號、二年二七號
太政官布告第三四四號

年中祭日、祝日等ノ休暇日左ノ通候條此旨布告候事

- 元 始 祭 一月三日
- 新 年 宴 會 一月五日
- 孝 明 天 皇 祭 一月三十日

- 紀 元 節 二月十一日
- 神 武 天 皇 祭 四月三日
- 神 嘗 祭 十月十七日
- 天 長 節 十一月三日
- 新 嘗 祭 十一月二十三日
- 春 季 皇 靈 祭 春 分 日
- 秋 季 皇 靈 祭 秋 分 日

● 官員父母祭日休暇

六年九月十八號
太政官途第三百十八號

自今諸官員父母ノ祭日ニハ休暇ヲ賜リ候此旨相達候事

● 遠國出張官員歸京後休暇日限

三年八月
太政官布告

諸官員遠國出張歸京後左ノ通賜休暇候事

- 百 里 以 上 三 日
- 五 十 里 以 上 二 日
- 二 十 五 里 以 上 一 日

第七章 賞 罰

● 統監府看守及女監取締ノ精勤證書授與ニ關スル制

四十二年十二月
統訓第五十號

統 監 府 監 獄

統監府看守及統監府女監取締ノ精勤證書授與ニ付テハ明治三十六年司法省訓令第七號看守女監取締精勤證書授與規則ヲ準用ス

附 則

韓國ノ監獄看守ニシテ統監府看守採用規則施行ノ際統監府看守ニ採用セラレタル者ニ付テハ特ニ其ノ前職ノ勤績期間ヲ本令ノ勤績期間ニ算入スルコトヲ得
前項ノ場合ニ於テ前職勤務中韓國ノ懲戒ニ關スル規程ニ依リ懲戒ニ處セラレタル者ニ付テハ勤績期間ノ起算ハ看守女監取締精勤證書授與規則第三條ノ例ニ依ル

● 文官懲戒令

三十二年三月
勅令第六十三號

改正

三三年勅令二一號、三四年二一六號、三八年
二七九號、四〇年一〇七號、四二年五號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ文官懲戒令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文官懲戒令

第一章 總 則

第一條 親任式ヲ以テ敍任スル官及法令ニ別段ノ規定アルモノヲ除クノ外官吏ハ本令ニ依ルニ非サレハ懲戒ヲ受クルコトナシ

第二條 官吏ノ懲戒ヲ受クヘキ場合左ノ如シ

- 一 職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ
- 二 職務ノ内外ヲ問ハス官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキ

第三條 懲戒ハ左ノ如シ

- 一 免 官
- 二 減 俸
- 三 譴 責

第四條 免官ノ處分ヲ受ケタル者ハ其ノ官職ヲ失ヒタル日ヨリ二年間官職ニ就クコトヲ得ス

免官ノ處分ヲ受ケ其ノ情重キ者ハ位記ヲ返上セシム

第五條 減俸ハ一月以上一年以下年俸月割額若ハ月俸ノ三分之一以下ヲ減ス

第六條 勅任官ノ免官及減俸ハ懲戒委員會ノ議決ヲ具シ内閣總理大臣之ヲ奏請シ奏任官ノ免官ハ懲戒委員會ノ議決ヲ具シ内閣總理大臣ヲ經テ本屬長官之ヲ奏請シ裁可ニ依リ之ヲ行フ

奏任官ノ減俸及判任官ノ免官及減俸ハ懲戒委員會ノ議決ニ依リ本屬長官之ヲ行フ
譴責ハ本屬長官之ヲ行フ

第七條 懲戒ニ付セラルヘキ事件刑事裁判所ニ繫屬スル間ハ同一事件ニ對シ懲戒委員會ヲ開クコトヲ得ス

懲戒委員會ノ議決前懲戒ニ付スヘキ者ニ對シ刑事訴追ノ始マリタルトキハ事件ノ判決ヲ終ハルマテ懲戒委員會ノ開會ヲ停止ス

第二章 懲戒委員會

第一款 總 則

第八條 懲戒委員會ヲ分テ文官高等懲戒委員會及文官普通懲戒委員會トス

第九條 文官高等懲戒委員會ハ高等官ノ懲戒ヲ議決シ文官普通懲戒委員會ハ判任官ノ懲戒ヲ議決ス

第二款 文官高等懲戒委員會

第十條 文官高等懲戒委員會ハ委員長一人委員六人ヲ以テ組織ス

第十一條 委員長ハ樞密顧問官ノ中ヨリ委員ハ行政裁判所評定官、勅任判事及其ノ他

ノ勅任文官ノ中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス

委員會ニ豫備委員六人ヲ置キ前項ノ例ニ依リ之ヲ命ス

第十二條 委員會ハ委員長及委員ヲ併セ五人以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス
委員會ノ議事ハ多數ニ依リ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ委員長之ヲ決ス

第十三條 委員長事故アルトキハ上席ノ委員之ヲ代理ス

委員中事故アルトキ又ハ副員アルトキハ委員長ハ豫備委員ノ中ヨリ代理ヲ命ス

第十四條 委員及豫備委員ノ任期ハ三年トス

委員及豫備委員中副員アリテ補闕ノ爲任命セラレタル者ハ前任者ノ殘任期間在任ス

第十五條 委員長及委員ハ左ノ事項ニ該當スルトキハ之ヲ免ス

一 其ノ官職ヲ失ヒタルトキ

二 委員會所在地以外ニ任所ヲ轉シタルトキ

第十六條 委員會ニ幹事一人ヲ置ク

第十七條 幹事ハ高等官ノ中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス

第十八條 幹事ハ委員長ノ命ヲ承ケ委員會ノ議事ヲ準備シ庶務ヲ統理ス

第十九條 委員會ニ書記三人ヲ置ク

第二十條 書記ハ判任官ノ中ヨリ委員長之ヲ命ス

第二十一條 書記ハ幹事ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第三款 文官普通懲戒委員會

第二十二條 文官普通懲戒委員會ハ左ノ各官應ニ之ヲ置ク

一 内閣

一 樞密院

一 各省

一 統監府

一 臺灣總督府

一 關東都督府

一 鐵道院

一 會計検査院

一 行政裁判所

一 警視廳

一 北海道廳

一 樺太廳

一 府縣

一 貴族院事務局

一 衆議院事務局

前項ノ外各省大臣ニ於テ必要アリト認ムルトキハ其ノ所轄官廳ニ文官普通懲戒委員會ヲ置クコトヲ得

第二十三條 委員長ハ各官廳ノ長官ヲ以テ之ニ充ツ但シ内閣ニ在リテハ法制局長官、樞密院ニ在リテハ書記

官長、各省ニ在リテハ次官、統監府ニ在リテハ總務長官、臺灣總督府、關東都督府ニ在リテハ民政長官、

鐵道院ニ在リテハ副總裁ヲ以テ之ニ充ツ

委員ハ二人乃至六人トシ當該官廳高等官ノ中ヨリ本屬長官之ヲ命ス但シ内閣ニ在テハ賞勳局、法制局及内

閣所屬高等官ノ中ヨリ之ヲ命ス

特別ノ事情アルトキハ上級官廳ノ高等官ヲ以テ下級官廳ノ委員ニ充ツルコトヲ得

第二十四條 委員會ハ委員長及委員二名以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

第二十五條 委員長事故アルトキハ上席ノ委員之ヲ代理ス

第二十六條 委員會ニ書記二人ヲ置ク

第二十七條 書記ハ委員長所屬官廳ノ判任官ノ中ヨリ委員長之ヲ命ス

第二十八條 書記ハ委員長ノ命ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第三章 懲戒手續

第二十九條 本屬長官ハ所部ノ官吏ニシテ懲戒ニ當ルヘキ所爲アリト思料スルトキハ證憑ヲ具ヘ書面ヲ以テ

懲戒委員會ノ審査ヲ要求スヘシ

第三十條 前條ノ要求アリタルトキハ委員長ハ期日ヲ定メテ委員會ヲ招集スヘシ

委員會ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ本人ノ出頭ヲ命スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ本人所屬官廳ヨリ本官相當ノ旅費ヲ給スヘシ

第三十一條 委員會ニ於テ議決ヲナシタルトキハ其ノ理由ヲ具シ本屬長官ニ覆申スヘシ

第三十二條 委員長及委員ハ自己又ハ其ノ親族ニ關スル事件ノ會議ニ參與スルコトヲ得ス

第三十三條 委員會ノ審査手續ハ委員會之ヲ定ム

附則

第三十四條 高等官試補ハ高等官ニ準シ判任官見習ハ判任官ニ準シ本令ヲ適用ス

第三十五條 本令ハ明治三十二年四月十日ヨリ施行ス

官吏懲戒例ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

●官吏待遇者ノ懲戒ニ關スル制

四十年四月 勅令第四百七十七號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ官吏待遇者ノ懲戒ニ關スル件ヲ制可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏待遇者ノ懲戒ニ關シテハ別段ノ規定アルモノヲ除クノ外高等官ト同一ノ待遇ヲ受クル者ニハ文官懲戒令

中高等官ニ關スル規定ヲ準用シ判任官ト同一ノ待遇ヲ受クル者ニハ同令中判任官ニ關スル規定ヲ準用ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

神職懲戒令及明治三十二年勅令第三百四十九號ハ之ヲ廢止ス

●巡查及監獄判任待遇職員ノ懲戒ニ關スル制

四十年九月 勅令第二百九十三號

改正

四二年 勅令二六〇號

朕臺灣總督府、統監府及理事廳並關東都督府ノ巡查及判任待遇監獄職員等ノ懲戒ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府巡查巡查補及判任待遇監獄職員ノ懲戒ニ關スル規程ハ臺灣總督、統監府巡查及統監府監獄判任待遇職員ノ懲戒ニ關スル規程ハ統監、關東都督府巡查及判任待遇監獄職員ノ懲戒ニ關スル規程ハ關東都督之ヲ定ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●判任待遇統監府監獄職員ノ懲戒ニ關スル制

四十二年十一月 勅令第四百九十九號

判任待遇統監府監獄職員ノ懲戒ニ付テハ監獄判任待遇職員懲戒規程ヲ準用ス

附則

本令ハ明治四十二年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

第三輯 服制 徽章

第三輯 服制徽章

● 統監府及所屬官署職員服制

三十九年二月
勅令第十四號

改正

三十九年勅令一〇八號、四〇年
四四號、四一年七四號

朕統監府及所屬官署職員服制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
統監府及所屬官署職員服制左ノ通定ム

服制表

種別官等	地質	製式	袖章	肩章
親任	紺又ハ黒羅紗但シ夏ハ白地 リシネル	立襟一行鈕釦長シヤケツト、 形狀如圖	縦横六分銀色桐章三箇ヲ附 シ幅八分金線一條ヲ半面ニ 纏フ但シ夏ハ白色二分線一 條ヲ纏フ	長五寸五分總座幅四寸一分 總テ銀色桐章三箇ヲ附シ六 分ノ金龍目線、前襟ヲ附シ三 寸三分ノ長ニモ二寸一分ノ 寸三分ノ長ノ鈕釦一條ヲ附シ 條ノ金線四ノ長ニモ二寸一分 分ノ長ノ鈕釦一條ヲ附シ、 ス、色ノ差込座ハ幅四分無 地織金線一條トス
勅任	同上	同上	幅四分金線三條ヲ半面ニ纏 フ但シ夏ハ白色一分線三條 ヲ纏フ餘ハ同上	長四寸三分幅一寸七分、地 質紺又ハ黒羅紗、兩線及 端線ハ幅一分五厘ノ中間ニ 線目ノ幅一分五厘ノ中間ニ 線目ノ幅一分五厘ノ中間ニ 一、幅四分ノ長ニモ二寸一分 縦二及ニシテ金線六分ノ長 四箇ヲ附シ、座ハ幅四分無 地織金線一條トス
奏任	同上	同上	桐章二箇ヲ附シ幅四分金 線一條ヲ半面ニ纏フ但シ 夏ハ白色一分線二條ヲ纏 フ餘ハ同上	織職金線二條ヲ附シ幅四分 ノ長ニモ二寸一分ノ長ニ 桐章二箇ヲ附シ、座ハ幅四分 無地織金線一條トス
判任	同上	同上	桐章一箇ヲ附シ幅四分銀 線一條ヲ半面ニ纏フ但シ 夏ハ白色一分線一條ヲ纏 フ餘ハ同上	織職金線一條ヲ附シ幅四分 ノ長ニモ二寸一分ノ長ニ 桐章一箇ヲ附シ、座ハ幅四分 無地織金線一條トス

第三輯 服制、徽章

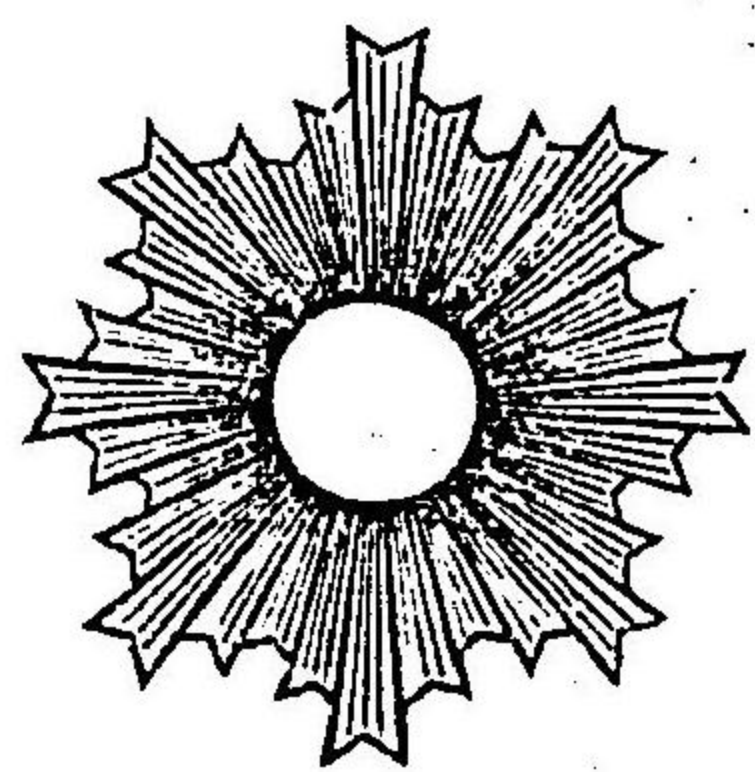
鈕 釦	袴			帽		佩 劍	劍 帶	劍 緒	
	地 質	製 式	地 質	製 式	徽 章				
桐章ヲ彫刻セル徑六分五分 ノ金色鈕釦五箇ヲ前部ニ附 ス	紺又ハ黒羅紗但シ夏ハ白地 リンネル	普通長袴	紺又ハ黒羅紗	圓形、黒革製前底及幅四分 ノ黒革製前部ヲ附シ、幅 兩端ハ各一箇ヲ以テ留ム 分ノ金釦各一箇ヲ以テ留 天非喰出ハ幅一分、形状 圖	前部ハ全徑一寸五分ノ金色 金釦製旭日章ヲ附シ、帽 周圍ニ幅一寸二分ノ縹織金 線一條ヲ纏フ	柄白鯨長五寸、縹黒革包長 二尺三寸、柄鑄銅輪及鍍金 具ニハ葉ヲ附シ、花ニ葉ヲ シ柄ニ桐章ヲ附ス、鍍金具 テ金色トス	黒革製幅一寸二分、鈞革ハ 幅七分、其ノ前部長八寸、後 長二尺五分、前部長一寸三 分、周圍ニ葉ヲ附シ、葉ノ 附シ中央ニ縹織金線一條ヲ 桐章ヲ附ス、其ノ他ノ鍍金 具ハ總テ金色	總頭茶壺形長一寸一分、 徑八分、總テ銀絲製餘ハ同 上	總頭茶壺形長一寸一分、 徑八分、總テ銀絲製餘ハ同 上
同上	同上	同上	同上	同上	帽ノ周圍ニ幅四分ノ縹織金 線三條ヲ纏フ餘ハ同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	帽ノ周圍ニ幅四分ノ縹織金 線二條ヲ纏フ餘ハ同上	柄鑄銅輪及鍍金具ニ葉附 上、桐花一箇宛ヲ附ス餘ハ同 上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上

二〇八

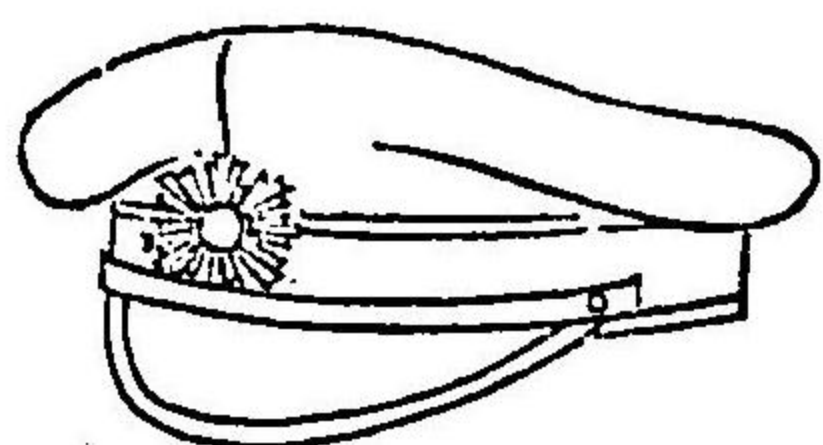
外 套		製 式	地 質
袖 章	雨 覆		
縱横六分ノ銀色桐章三箇ヲ 附シ、幅四分金線一條ヲ半面 ニ纏フ	紺又ハ黒羅紗	折襟胸二重、後面ノ裾ヲ制 キ、後面腰帶ニ帶鑄銅輪及 七箇ノ桐章ヲ彫刻セル金 色鈕釦ヲ附シ、前左右ノ腰 ニ各一箇ノ物ヲ入テ附ス、 狀如圖	紺又ハ黒羅紗
金線ヲ附セス餘ハ同上	同上	同上	同上
桐章二箇ヲ附ス餘ハ同上	同上	同上	同上
桐章一箇ヲ附ス餘ハ同上	同上	鈕釦ハ銀色トス餘ハ同上	同上

備考

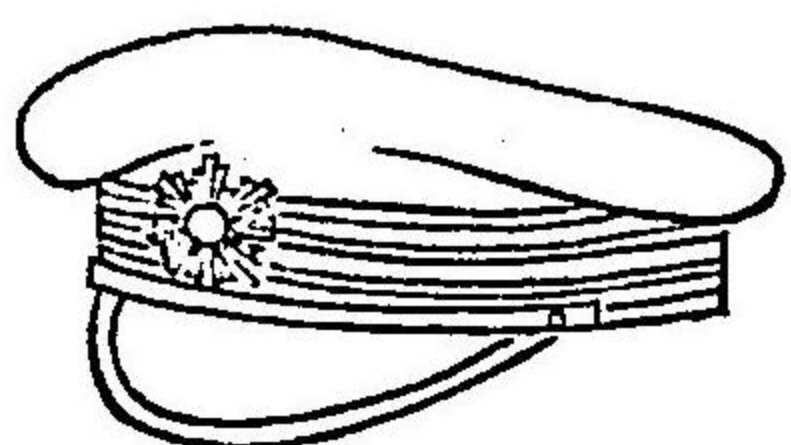
- 一 此ノ制服ハ紺又ハ黒地ノモノニ限リ大禮服又ハ通常禮服ニ代用スルコトヲ得
- 二 此ノ制服ニ肩章ヲ附セサルモノヲ略服トス
- 三 略服ヲ用ル場合ニ於テハ必要アルトキノ外、劔及劔帶ヲ佩用セサルモ妨ナシ
- 四 統監府及所屬官署職員ヲ識別スル爲特別ノ徽章ヲ附スルコトヲ得、徽章及其ノ附著方法ハ統監之ヲ定ム
- 五 夏期ハ略服ヲ用ル場合ニ限リ帽ニ薄白布ノ日覆ヲ用フルコトヲ得
- 六 警察官ノ制服ハ警察官及消防官制服及警察官及消防官帶劔ノ制ニ據ルコトヲ得、此ノ場合ニ於テ(警務總長ハ警視總監)統監府警視ハ警視廳各部長タル警視(理事廳警視ハ警務總長タル警視ノ制服ニ據ル)
- 七 此ノ制服ハ統監ノ定ムル所ニ依リ統監府及所屬官署ノ囑託員ニ適用スルコトヲ得
- 八 統監府所屬官署ノ職員ニシテ現業ニ従事スル者ノ略服ハ統監之ヲ定ムルコトヲ得



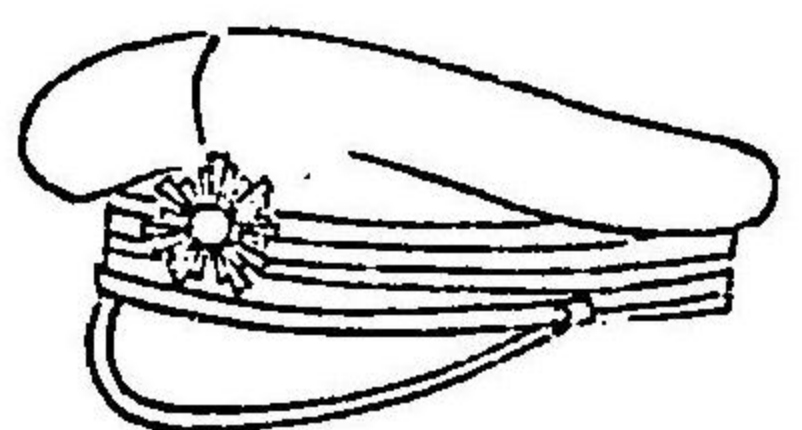
帽ノ前章



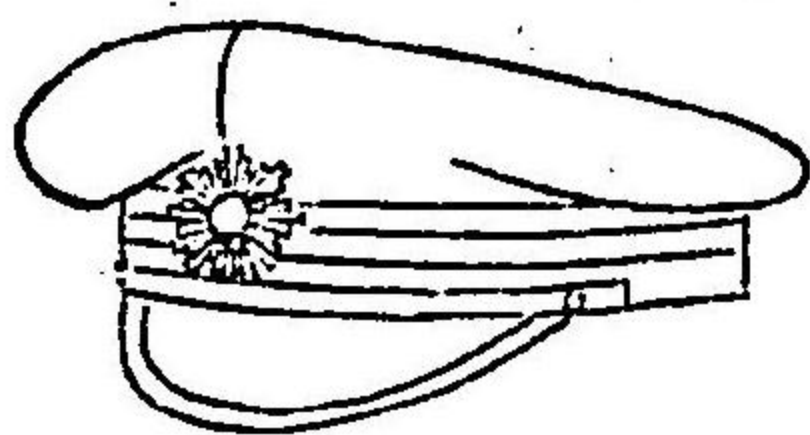
帽 親任



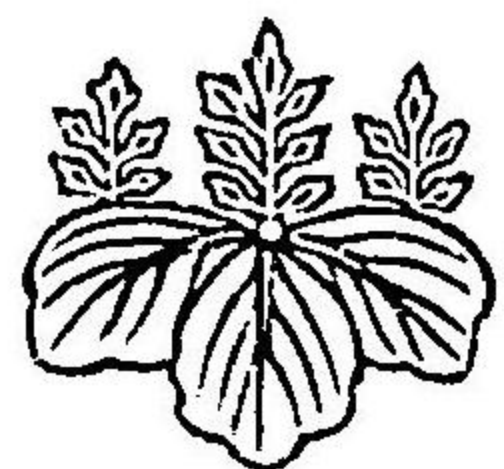
勅任



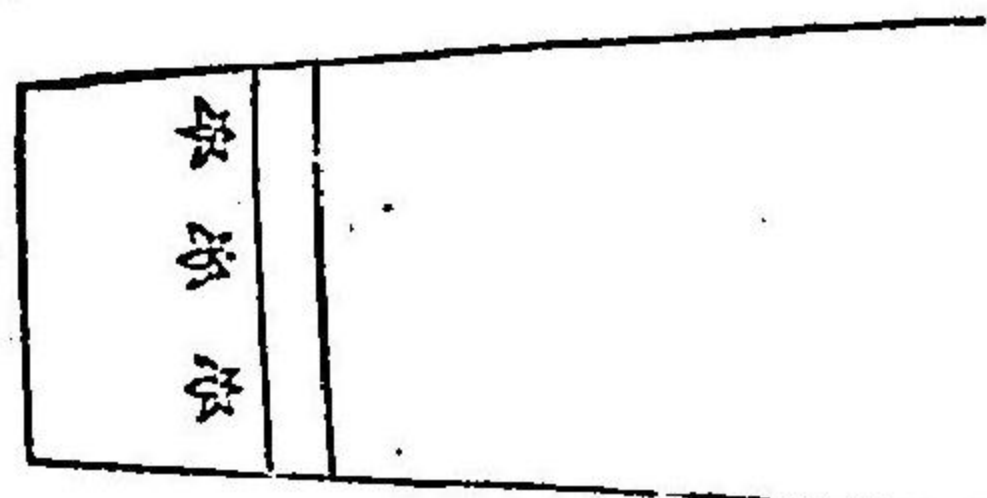
奏任



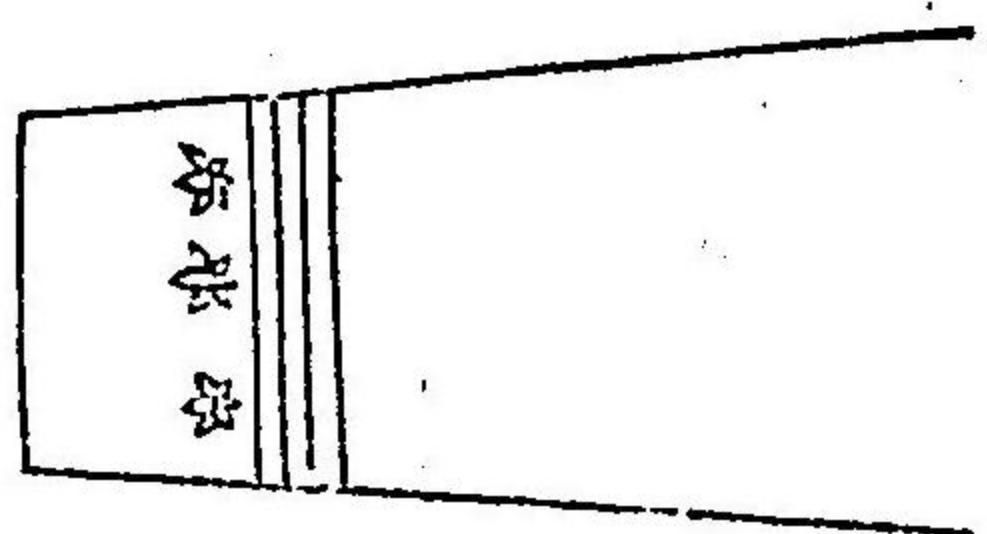
判任



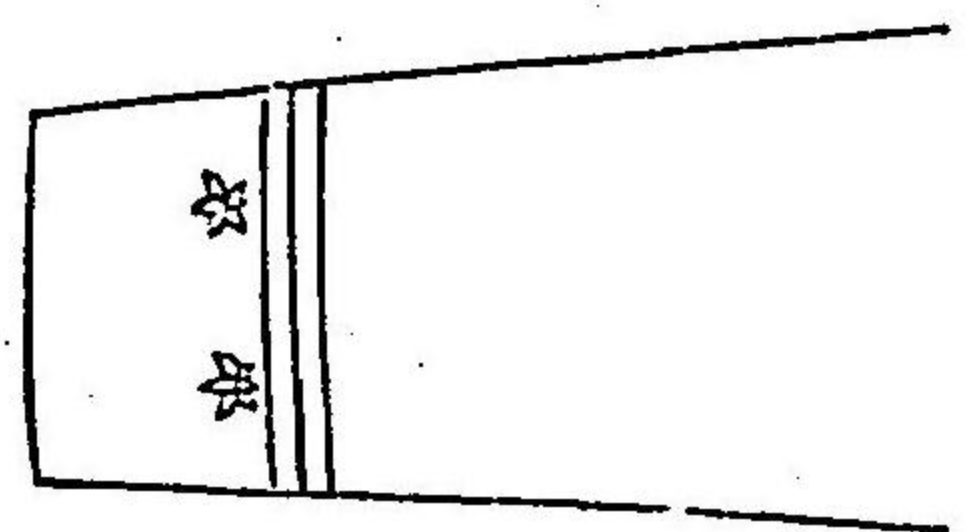
桐章



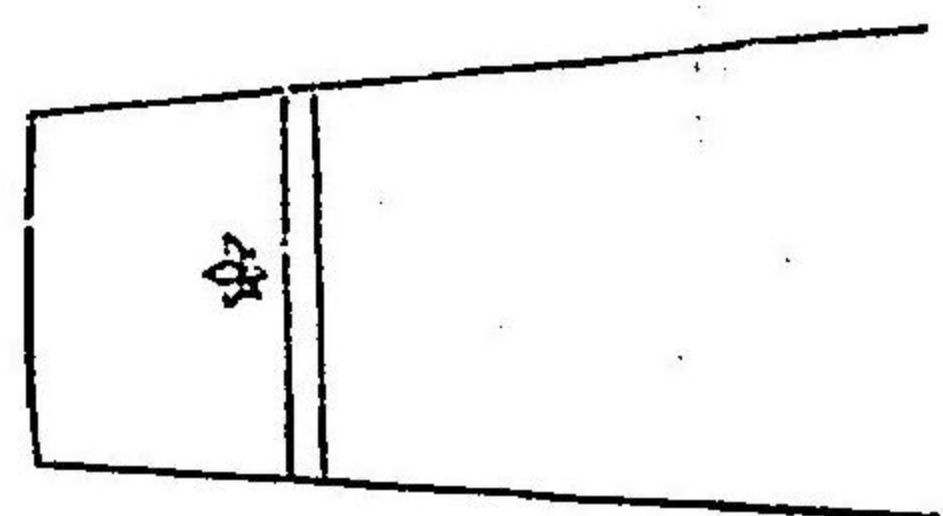
袖章 親任



勅任



奏任

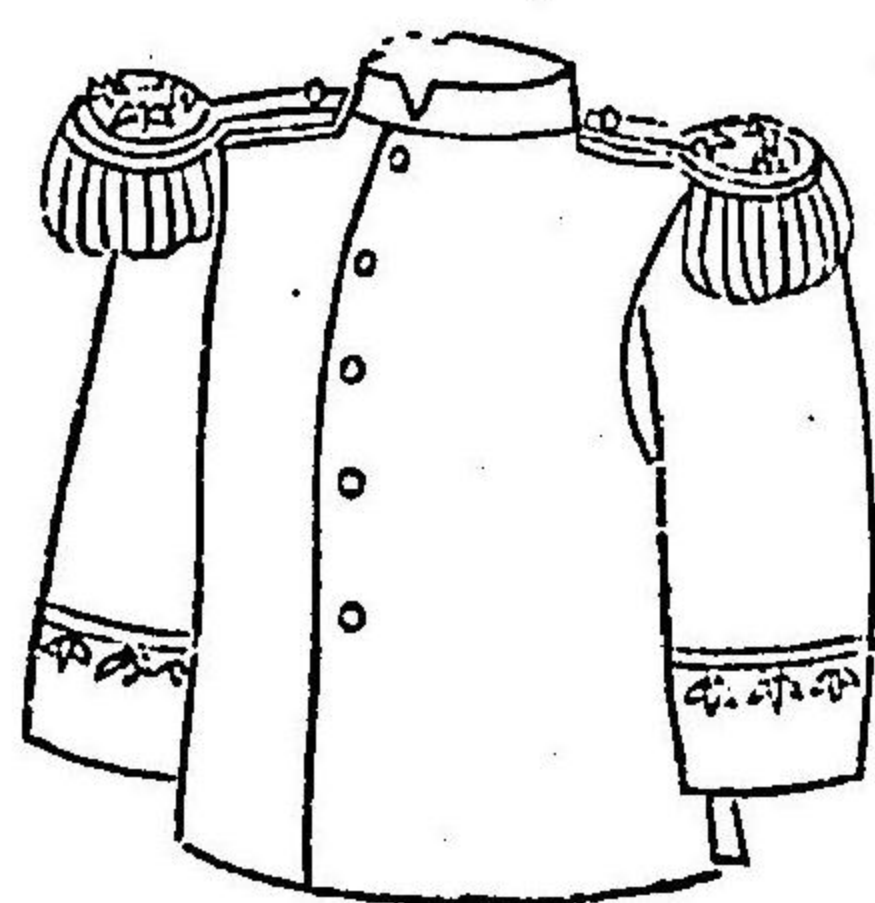


判任

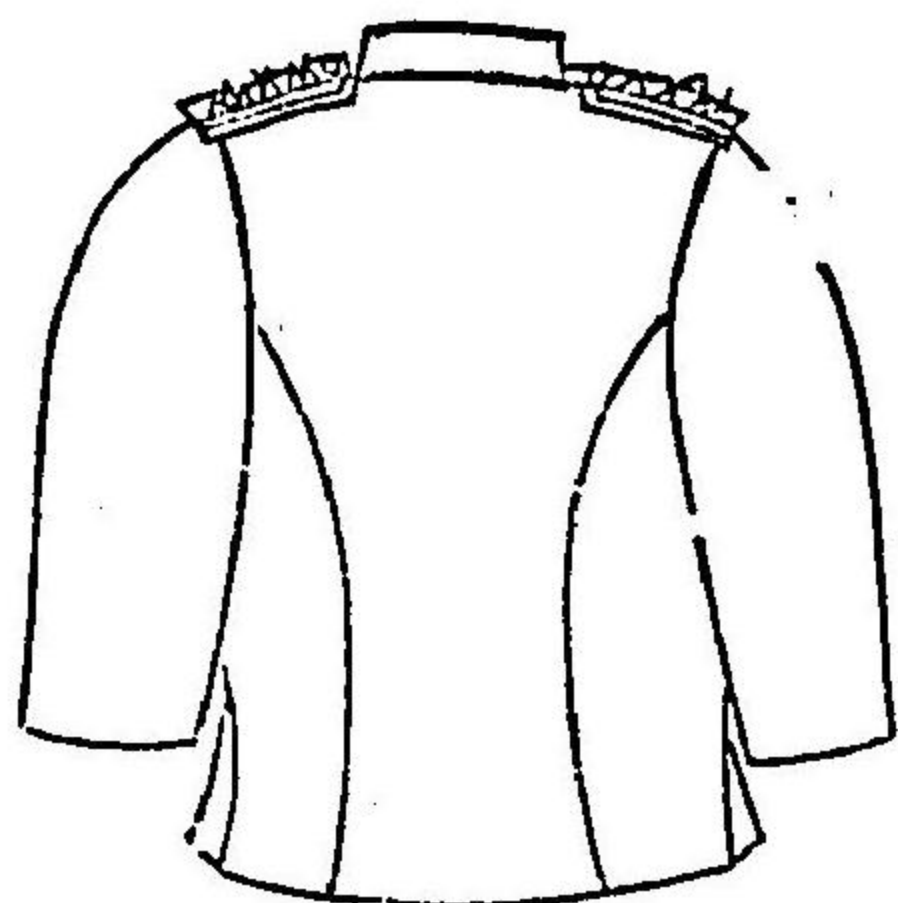
袖章 親任 勅任 奏任 判任



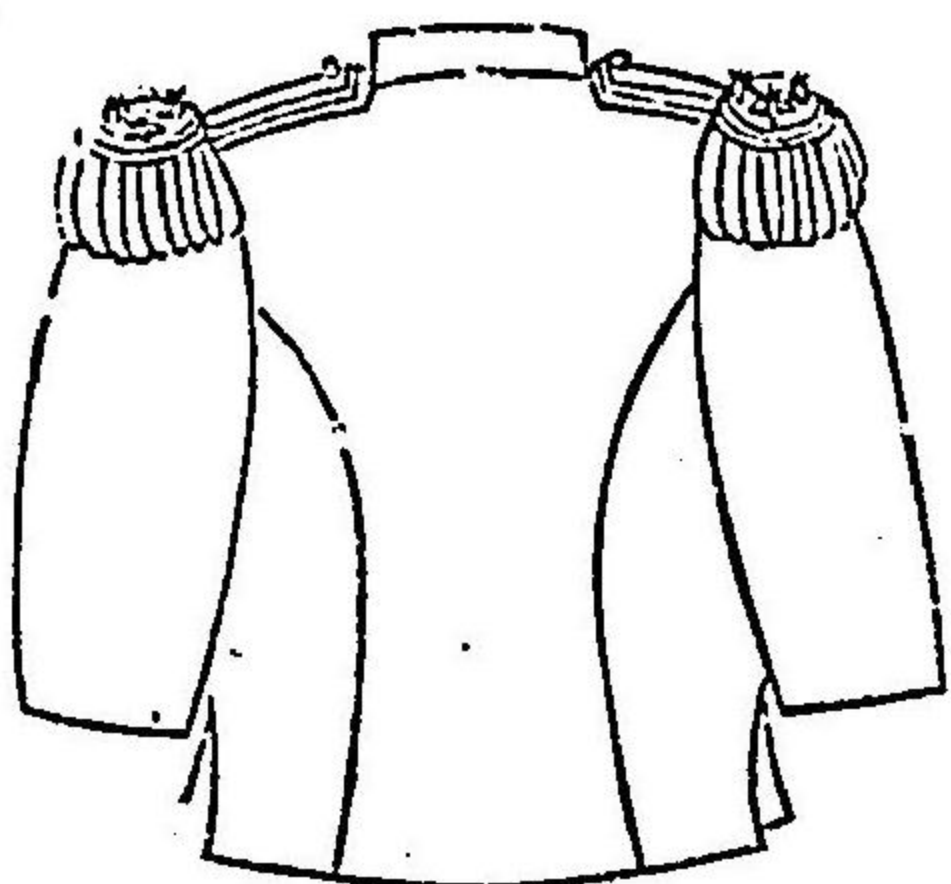
勅任 前面



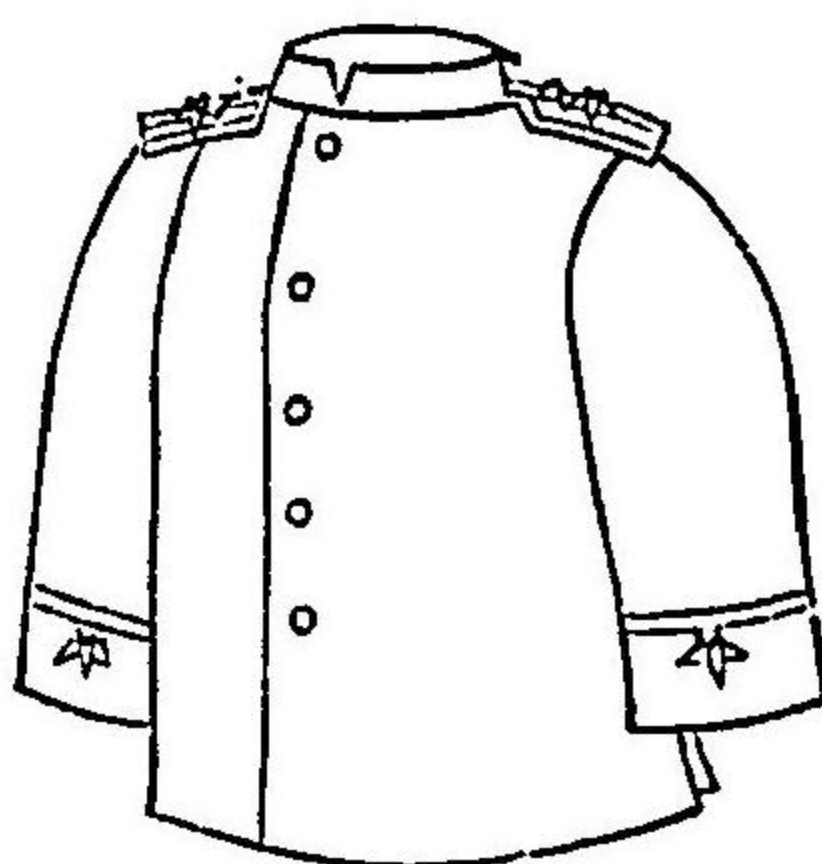
親任 前面



後面



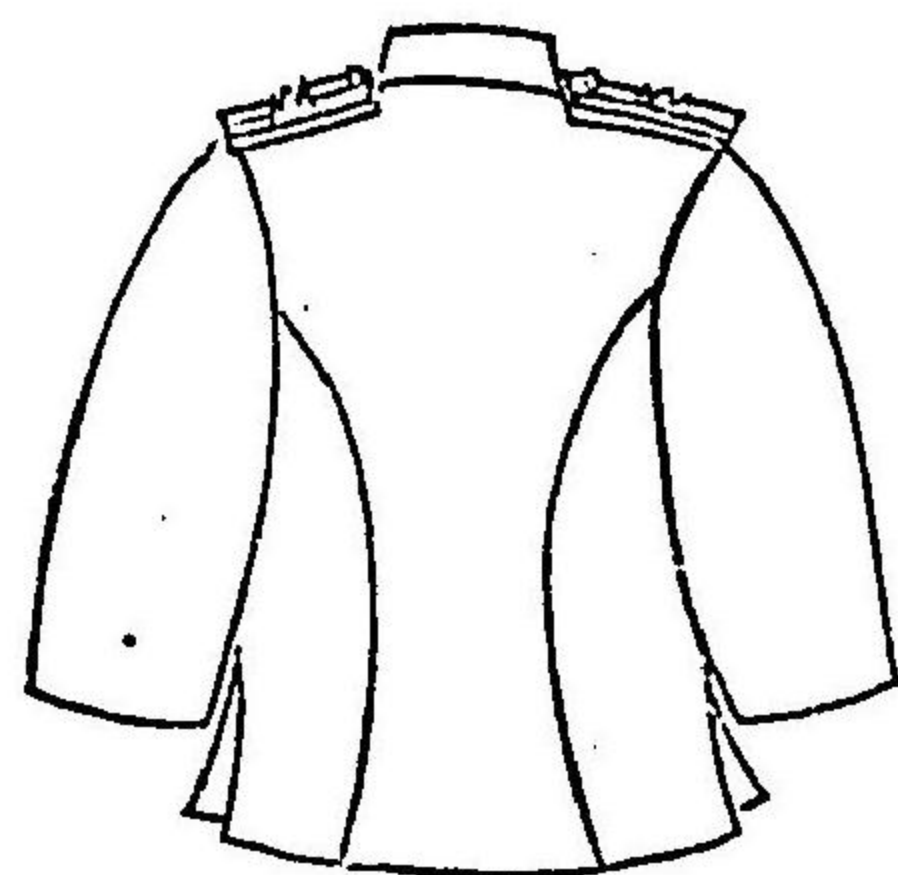
後面



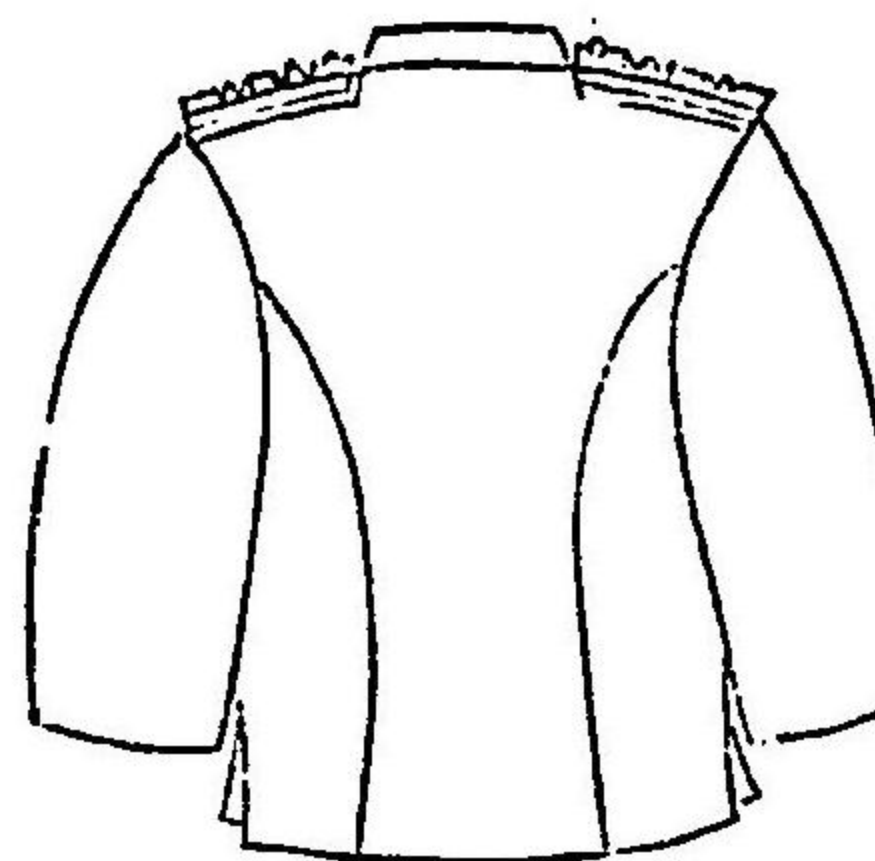
判任 前面



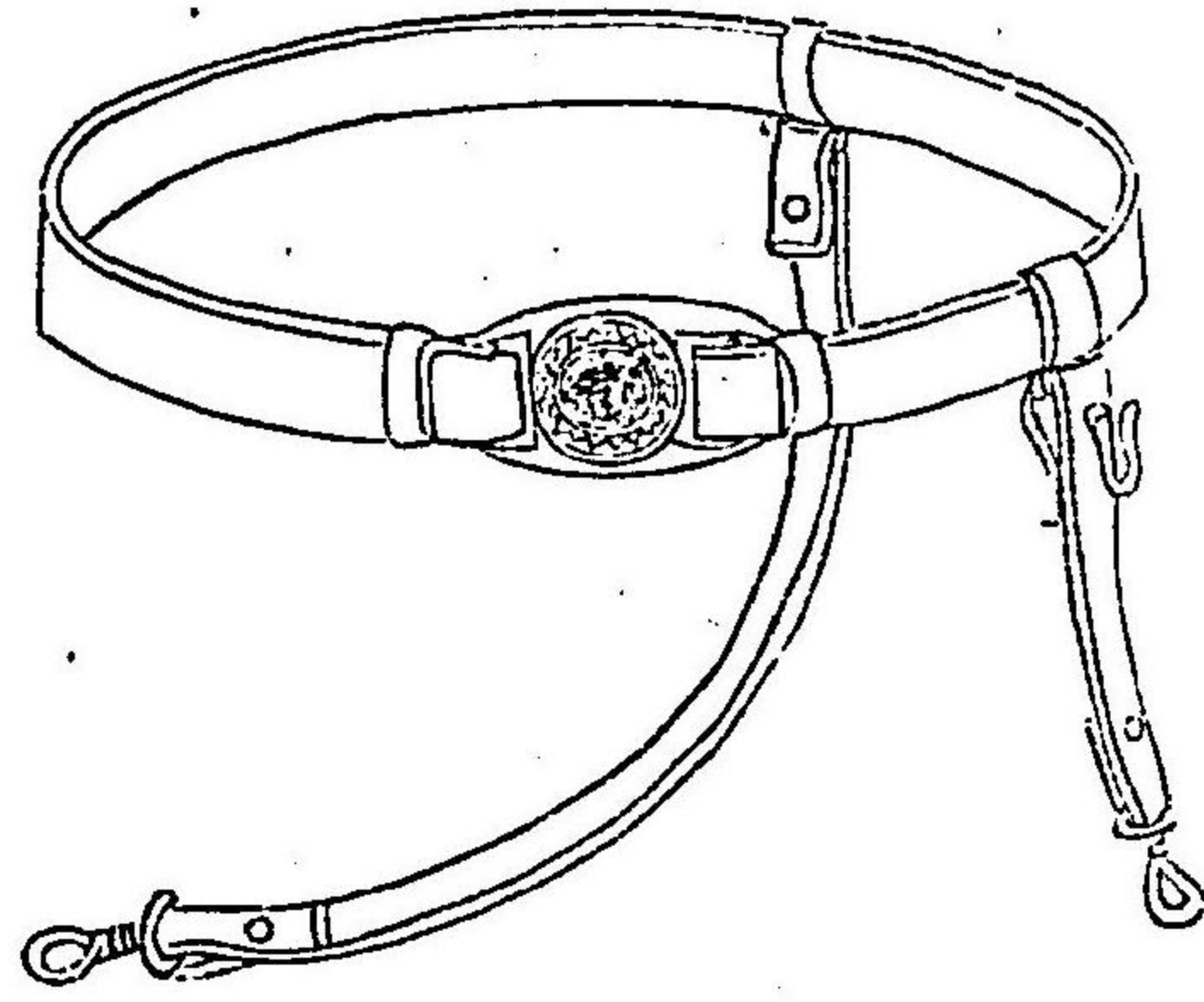
奏任 前面



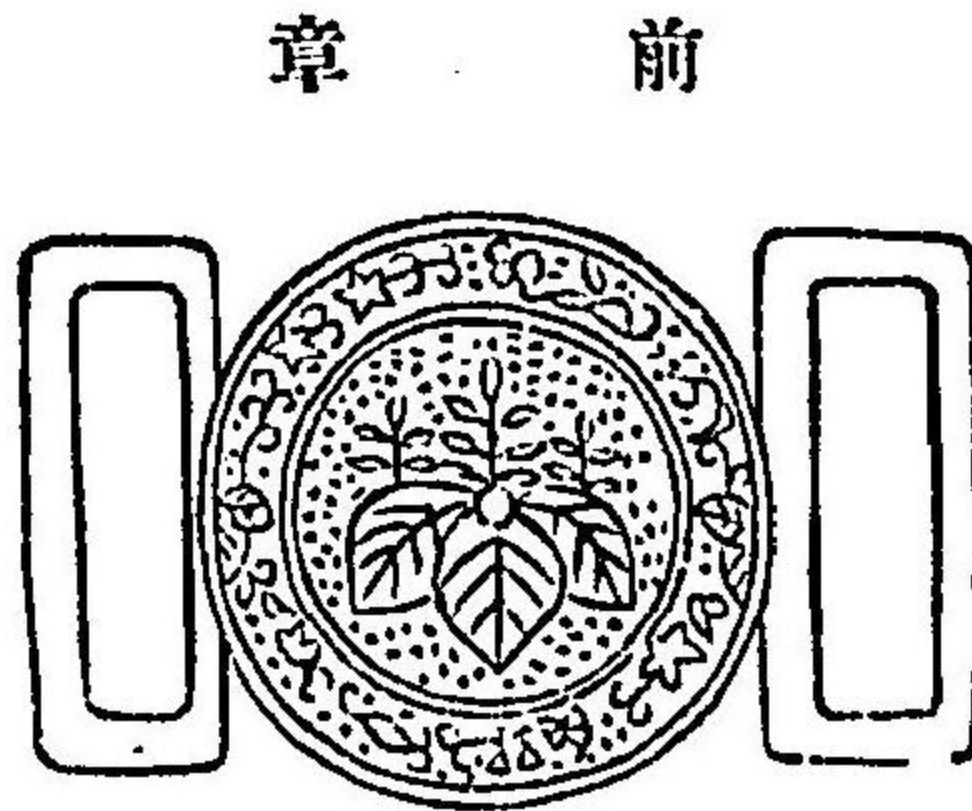
後面



後面



劍帶

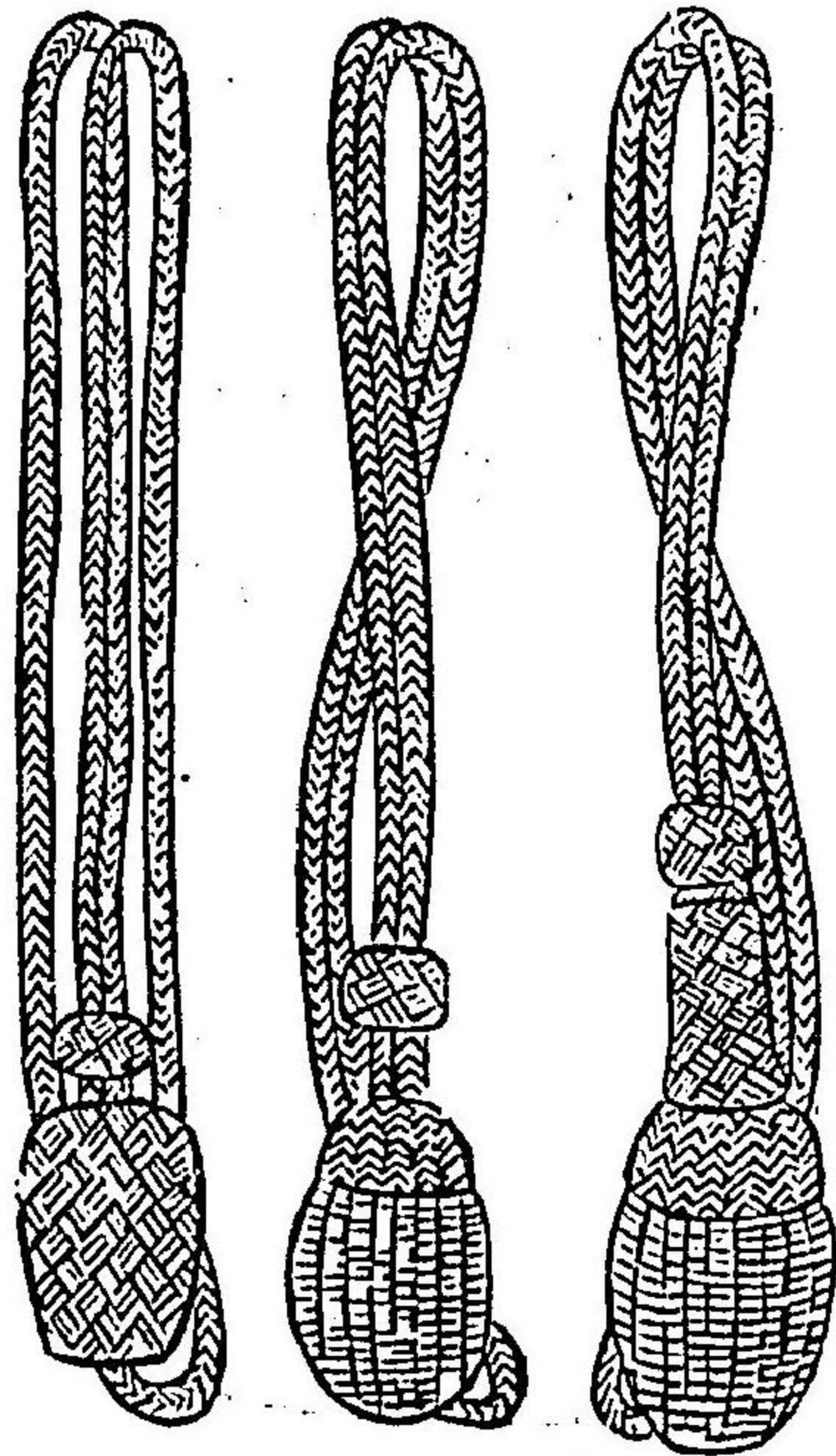


前章

鈕釦

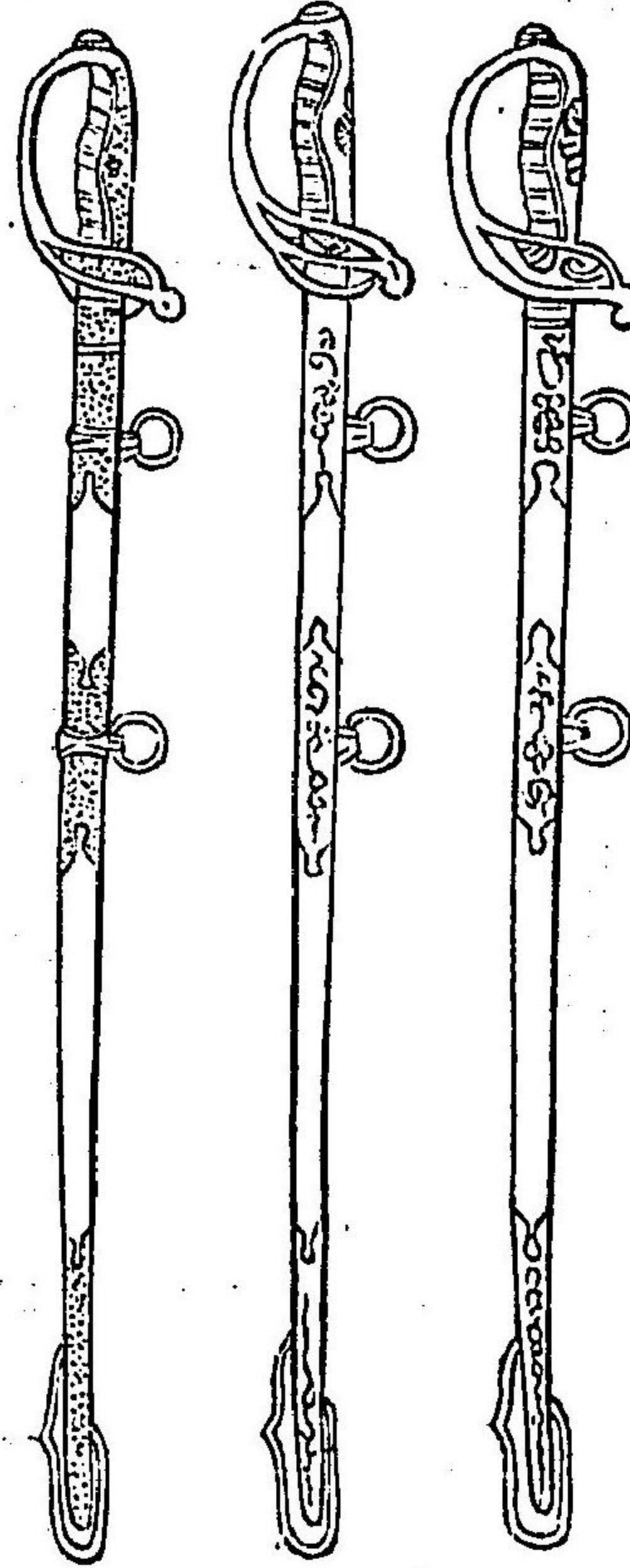


親親親
奏奏奏
緒緒緒
任任任

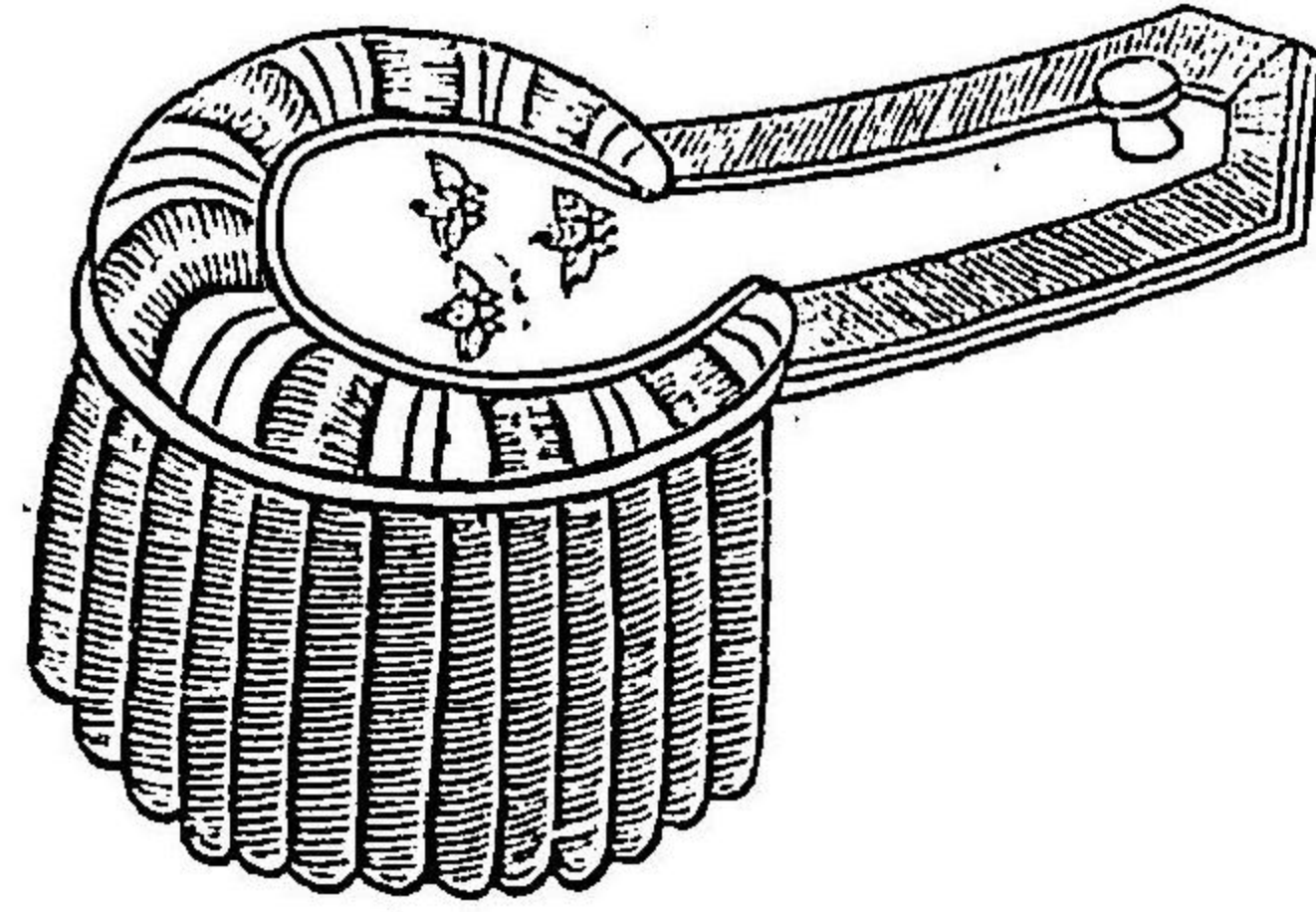


佩劍

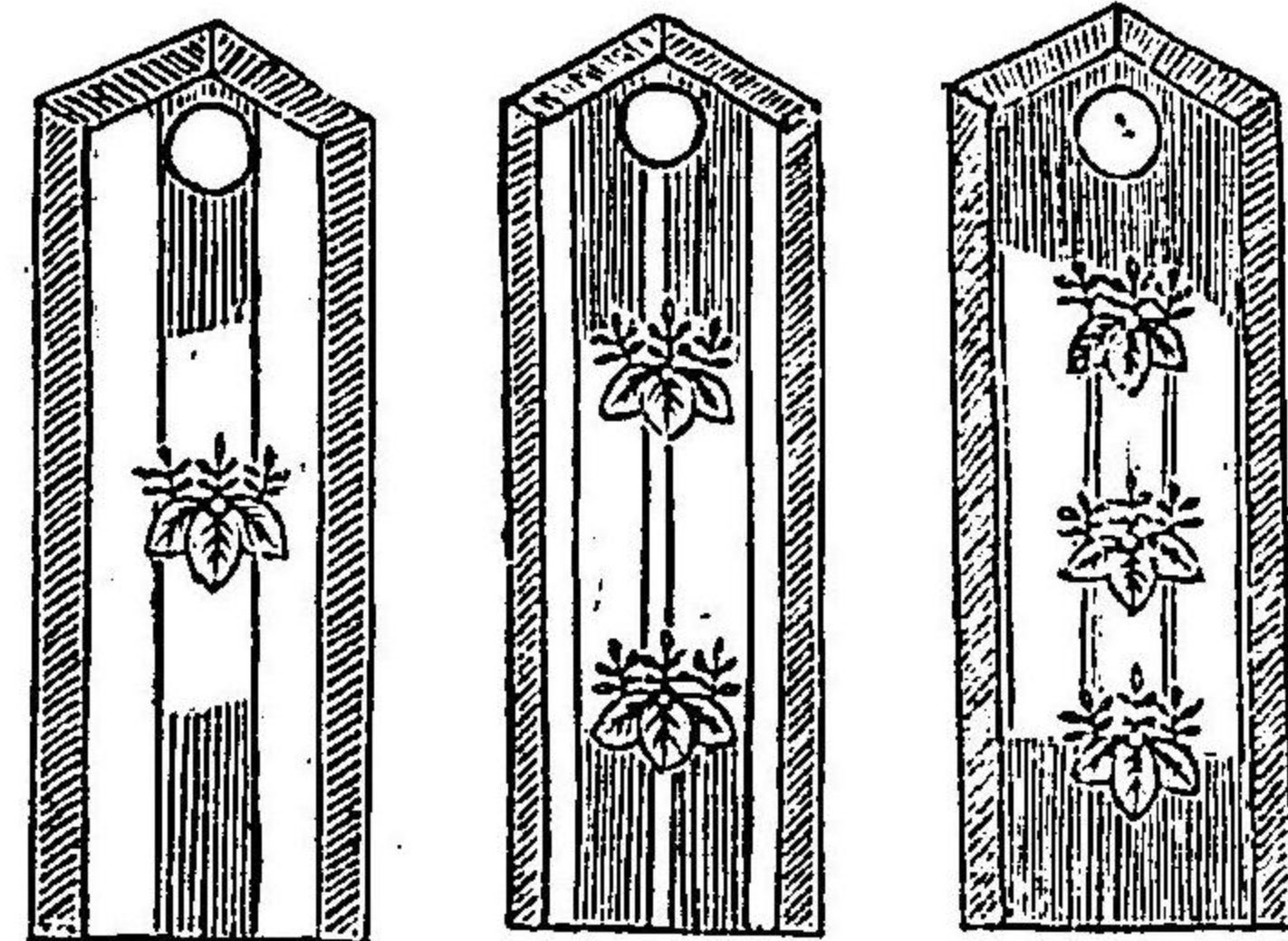
親親親
奏奏奏
任任任



肩親
章任



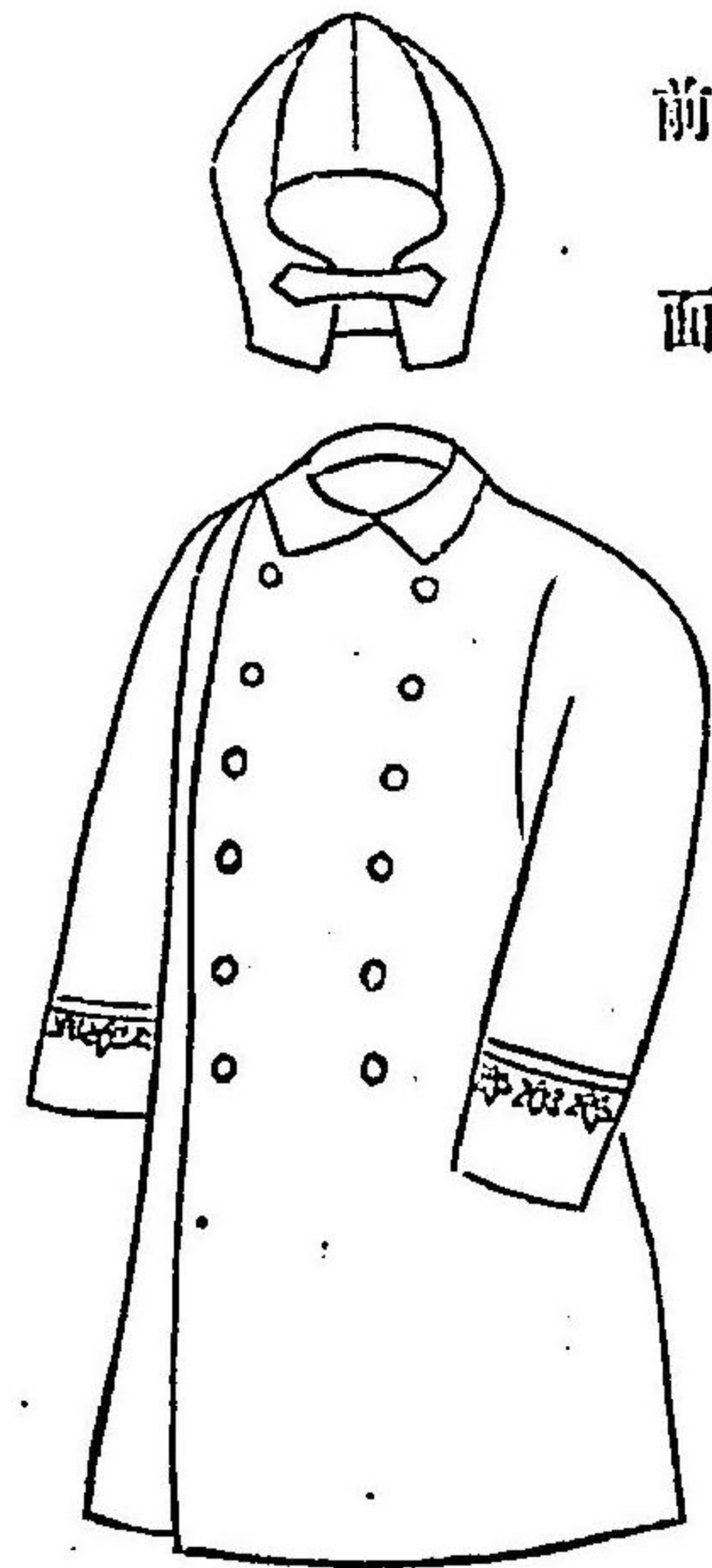
親親親
奏奏奏
任任任



外套

親任

前面



後面

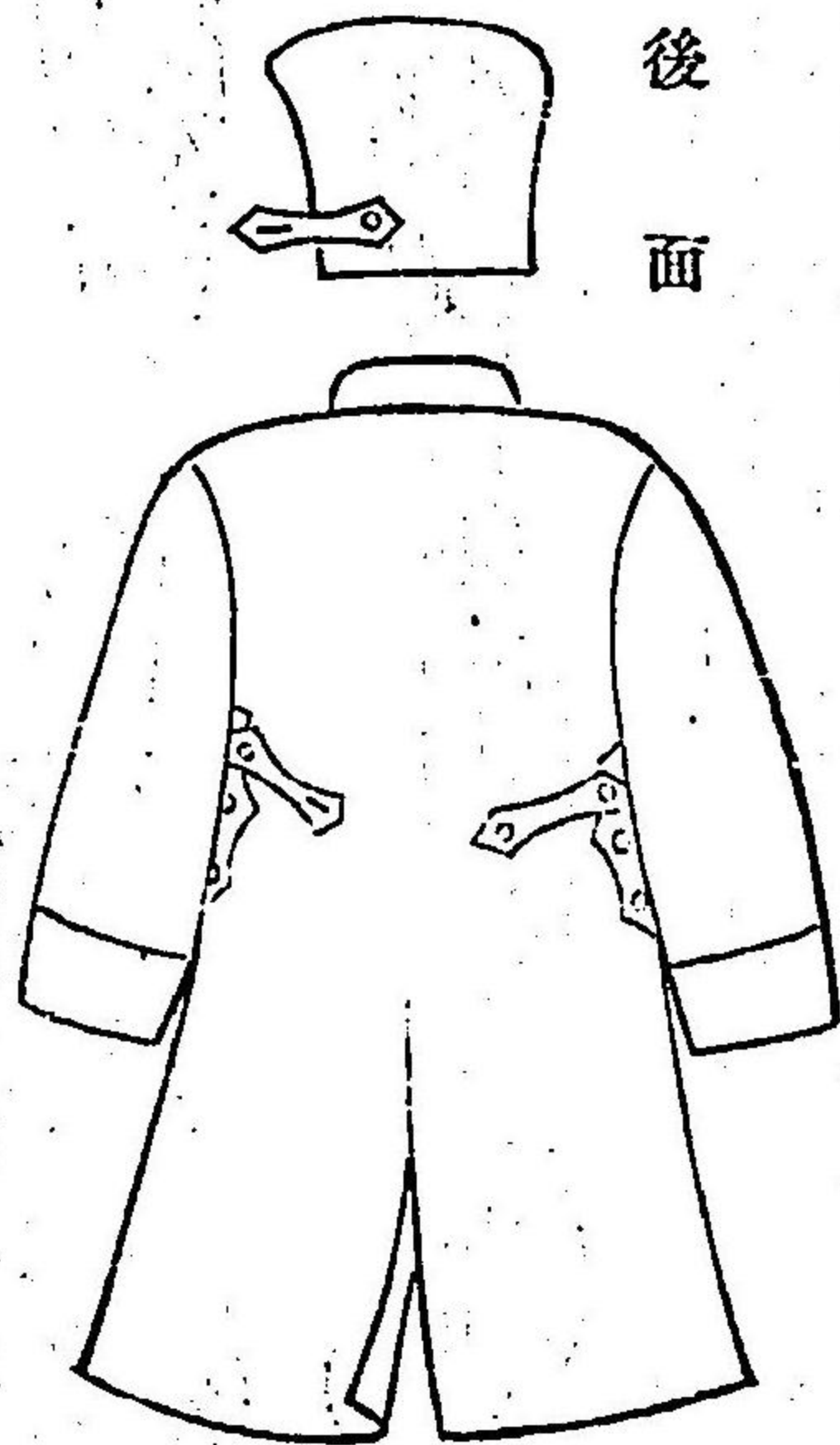


勅任

前面



後面



● 統監府及所屬官署職員襟章

三十九年七月 統令第二十三號

改正

四〇年統令一五號

四一年 四三號

四二年 三三號

四三年 一四三號

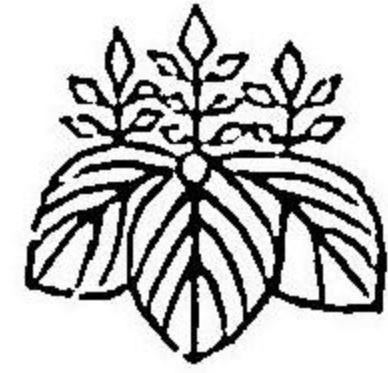
統監府及所屬官署職員ノ襟章左ノ通定ム

職員別	襟章
統監府職員	縦六分五厘横七分ノ金色桐章一箇ツツ襟部ノ兩前端ニ附ス
理事應職員	銀色桐章トス餘ハ同前
統監府通信官署職員	金色雷紋ノ上半部ニ銀色桐章ヲ附シタル縦六分五厘横八分ノモノトス餘ハ同前
統監府鐵道管理局職員	金色鐵道線路断面ノ上半部ニ銀色桐章ヲ附シタル縦六分五厘横八分ノモノトス餘ハ同前
統監府司法廳職員	縦六分五厘横七分ノ葉銀色、花金色ノ桐章一箇ツツ襟部ノ兩前端ニ附ス
統監府裁判所 判檢、書記長、通譯官、書記、通譯生	葉深紫色、花金色ノ桐章トス餘ハ同上 葉深緋色、花金色ノ桐章トス餘ハ同上 葉深綠色、花金色ノ桐章トス餘ハ同上
統監府監獄 典獄、看守長、通譯生	葉深茶色、花銀色ノ桐章トス餘ハ同上
統監府營林廠職員	金色「林」字ノ上半部ニ銀色桐章ヲ附シタル縦六分五厘横八分ノモノトス餘ハ同前
統監府特許局職員	金色星章ノ中部ニ銀色桐章ヲ附シタル縦横各八分ノモノトス餘ハ同前
韓國政府僱聘職員	金色八卦章ノ中部ニ銀色桐章ヲ附シタル縦六分五厘横八分ノモノトス餘ハ同前

備考 統監府職員ニシテ理事廳ニ在勤スル者ノ襟章ハ理事廳職員ニ同シ

第三輯 服制 徽章

統監府職員理事廳職員統監府司法廳職員統監府裁判所職員統監府監獄職員

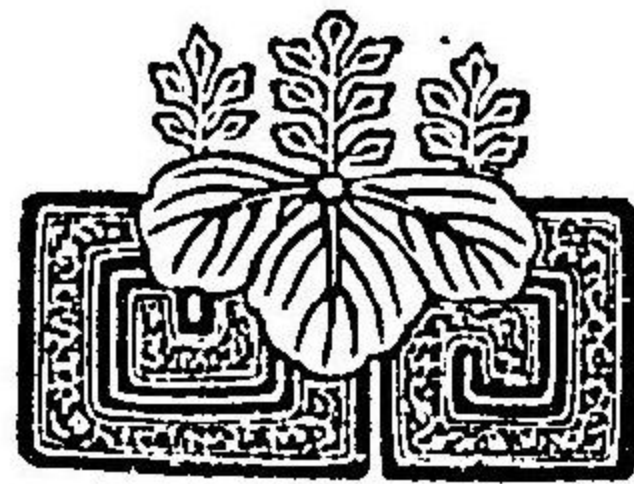


統監府鐵道管理局職員

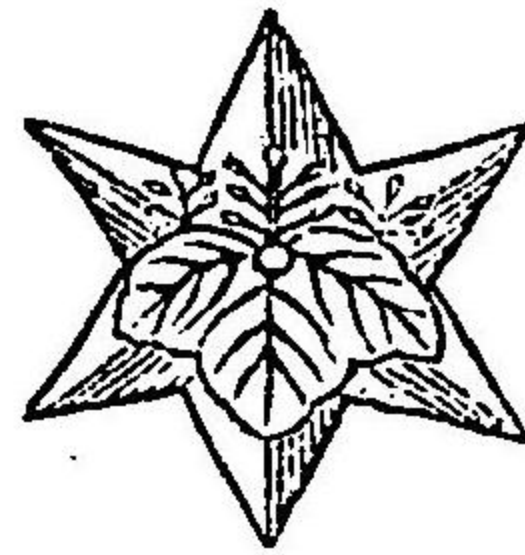


襟

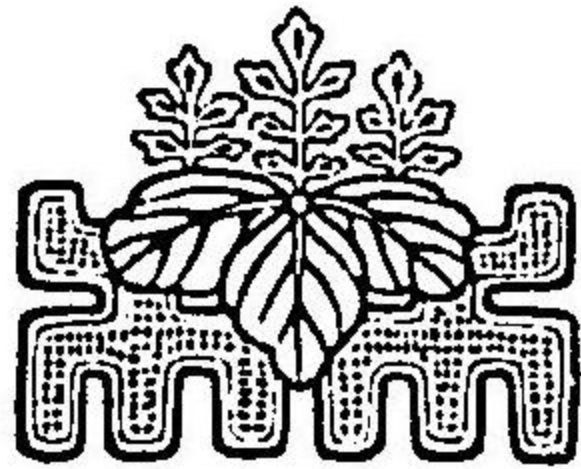
統監府通信官署職員



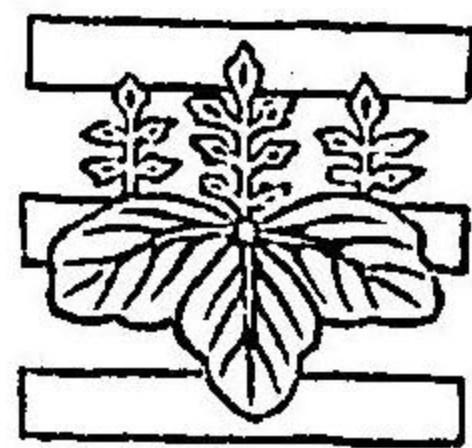
統監府特許局職員



統監府營林廠職員



韓國政府僱聘職員



圖

●統監旗制定

三十九年二月 勅令第二十一號

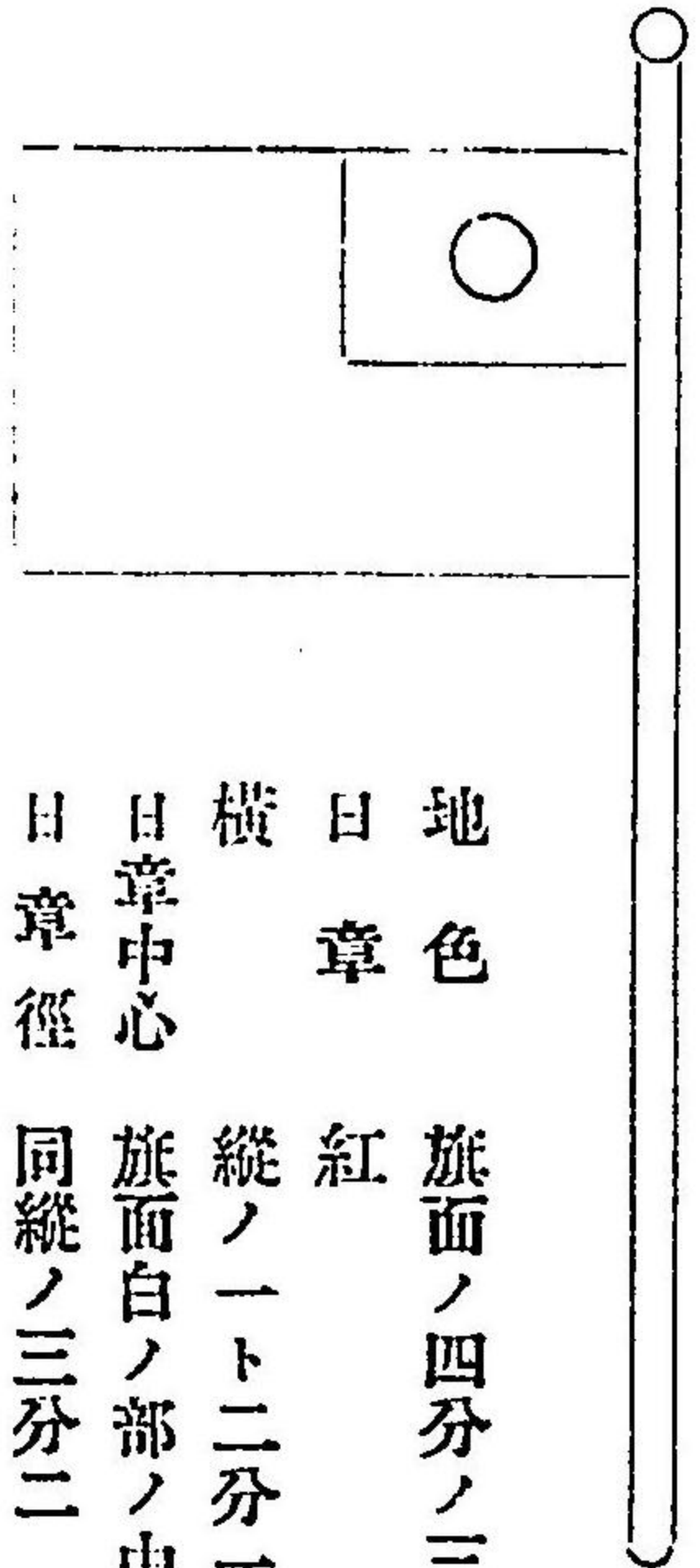
朕統監旗制定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

統監旗ノ制式ハ別圖定ムル所ニ依ル

統監旗ハ統監韓國ニ在ルトキ其ノ官廳ノ旗竿ニ掲ク

韓國領海ニ於テハ統監ノ坐乗スル船舶ニ統監旗ヲ掲クルコトヲ得

(別圖)



地色 旗面ノ四分ノ三ハ青四分ノ一ハ白

日章 紅

横 縦ノ一ト二分一

日章中心 旗面白ノ部ノ中心

日章徑 同縦ノ三分二

●統監府通信官署ノ徽章

三十九年六月 統告第五十三號

統監府通信官署ノ徽章ハ明治二十年遞信省告示第十一號(一)字形ヲ用フ

第四輯 公文式 雜

第四輯 公文式 雜

● 公式令

四十年一月
勅令第六號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ公式令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

公 式 令

- 第一條 皇室ノ大事ヲ宣詔シ及大權ノ施行ニ關スル勅旨ヲ宣詔スルハ別段ノ形式ニ依ルモノヲ除クノ外詔書ヲ以テス
- 詔書ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ其ノ皇室ノ大事ニ關スルモノニハ宮内大臣年月日ヲ記入シ内閣總理大臣ト俱ニ之ニ副署ス其ノ大權ノ施行ニ關スルモノニハ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署シ又ハ他ノ國務各大臣ト俱ニ之ニ副署ス
- 第二條 文書ニ由リ發スル勅旨ニシテ宣詔セサルモノハ別段ノ形式ニ依ルモノヲ除クノ外勅書ヲ以テス
- 勅書ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ其ノ皇室ノ事務ニ關スルモノニハ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス其ノ國務大臣ノ職務ニ關スルモノニハ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス
- 第三條 帝國憲法ノ改正ハ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス
- 前項ノ上諭ニハ樞密顧問ノ諮詢及帝國憲法第七十三條ニ依ル帝國議會ノ議決ヲ經タル旨ヲ記載シ親署ノ後御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ他ノ國務各大臣ト俱ニ之ニ副署ス
- 第四條 皇室典範ノ改正ハ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス
- 前項ノ上諭ニハ皇族會議及樞密顧問ノ諮詢ヲ經タル旨ヲ記載シ親署ノ後御璽ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ國務各大臣ト俱ニ之ニ副署ス
- 第五條 皇室典範ニ基ツク諸規則、宮内官制其ノ他皇室ノ事務ニ關シ勅定ヲ經タル規程ニシテ發表ヲ要スル

モノハ皇室令トシ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス國務大臣ノ職務ニ關連スル皇室令ノ上諭ニハ内閣總理大臣又ハ内閣總理大臣及主任ノ國務大臣ト俱ニ之ニ副署ス

皇族會議及樞密顧問又ハ其ノ一方ノ諮詢ヲ經タル皇室令ノ上諭ニハ其ノ旨ヲ記載ス

第六條 法律ハ上諭附ヲシテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ帝國議會ノ協賛ヲ經タル旨ヲ記載シ親署ノ後御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署シ又ハ他ノ國務各大臣若ハ主任ノ國務大臣ト俱ニ之ニ副署ス

樞密顧問ノ諮詢ヲ經タル法律ノ上諭ニハ其ノ旨ヲ記載ス

第七條 勅令ハ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署シ又ハ他ノ國務各大臣若ハ主任ノ國務大臣ト俱ニ之ニ副署ス

樞密顧問ノ諮詢ヲ經タル勅令及貴族院ノ諮詢又ハ議決ヲ經タル勅令ノ上諭ニハ其ノ旨ヲ記載シ帝國憲法第八條第一項又ハ第七十條第一項ニ依リ發スル勅令ノ上諭ニハ其ノ旨ヲ記載ス

帝國議會ニ於テ帝國憲法第八條第一項ノ勅令ヲ承諾セサル場合ニ於テ其ノ效力ヲ失フコトヲ公布スル勅令ノ上諭ニハ同條第二項ニ依ル旨ヲ記載ス

第八條 國際條約ヲ發表スルトキハ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ樞密顧問ノ諮詢ヲ經タル旨ヲ記載シ親署ノ後御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ主任ノ國務大臣ト俱ニ之ニ副署ス

第九條 豫算及豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スノ件ハ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ帝國議會ノ協賛ヲ經タル旨ヲ記載シ親署ノ後御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ主任ノ國務大臣ト俱ニ之ニ副署ス

第十條 閣令ニハ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ署名ス

省令ニハ各省大臣年月日ヲ記入シ之ニ署名ス

宮内省令ニハ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ニ署名ス

第十一條 皇室令、勅令、閣令及省令ハ別段ノ施行時期アル場合ノ外公布ノ日ヨリ起算シ滿二十日ヲ經テ之ヲ施行ス

第十二條 前數條ノ公文ヲ公布スルハ官報ヲ以テス

第十三條 國書其ノ他外交上ノ親書、條約批准書、全權委任狀、外國派遣官吏委任狀、名譽領事委任狀及外國領事認可狀ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ主任ノ國務大臣之ニ副署ス外務大臣ニ授クル全權委任狀ニハ内閣總理大臣之ニ副署ス

第十四條 親任式ヲ以テ任スル官ノ官記ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス宮内官ニ付テハ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス

内閣總理大臣ヲ任スルノ官記ニハ他ノ國務大臣又ハ内大臣、宮内大臣ヲ任スルノ官記ニハ内大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス

前二項ニ依ルモノノ外勅任官ノ官記ニハ御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス宮内官ニ付テハ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス

奏任官ノ官記ニハ内閣ノ印ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ヲ宣ス宮内官ニ付テハ宮内省ノ印ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ宣ス

第十五條 親任式ヲ以テ任シタル官ヲ免スルノ辭令書ニハ御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス

宮内官ニ付テハ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス

内閣總理大臣ヲ免スルノ辭令書ニハ他ノ國務大臣又ハ内大臣、宮内大臣ヲ免スルノ辭令書ニハ内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス

前二項ニ依ルモノノ外勅任官ヲ免スルノ辭令書ニハ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス宮内官ニ付テハ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス

奏任官ヲ免スルノ辭令書ニハ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ヲ宣ス宮内官ニ付テハ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ宣ス

第十六條 爵記ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス

第十七條 一位ノ位記ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス

二位以下四位以上ノ位記ニハ御璽ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス五位以下ノ位記ニハ宮内省ノ印ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ宣ス

第十八條 爵位ノ返上ヲ命シ又ハ允許スルノ辭令書ニハ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス

第十九條 勳三等功五級以上ノ勳記ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ勳四等功六級以下ノ勳記ニハ國璽ヲ鈐シ内閣總理大臣旨ヲ奉シ賞勳局總裁ヲシテ年月日ヲ記入シ之ニ署名セシム

勳記ニハ勳章ノ種別ニ從ヒ號數ヲ附シ簿冊ニ記入スル旨ヲ附記シ賞勳局ノ印ヲ鈐シ賞勳局書記官之ニ署名ス

第二十條 記章ノ證狀並外國勳章及記章ノ佩用免許ノ證狀ニハ内閣總理大臣旨ヲ奉シ賞勳局總裁ヲシテ年月日ヲ記入シ賞勳局ノ印ヲ鈐シ之ニ署名セシム

證狀ニハ其ノ種別ニ從ヒ號數ヲ附シ簿冊ニ記入スル旨ヲ附記シ賞勳局ノ印ヲ鈐シ賞勳局書記官之ニ署名ス

第二十一條 勳章及記章並外國勳章及記章ノ佩用免許ノ證狀ヲ擬奪スルノ辭令書ニハ内閣總理大臣旨ヲ奉シ賞勳局總裁ヲシテ年月日ヲ記入シ之ニ署名セシム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

公文式ハ之ヲ廢止ス

●韓國適用法律命令ノ施行時期ニ關スル制

四十年二月 勅令第十一號

朕韓國及關東州ニ於テ適用スル法律命令ノ施行時期ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

韓國及關東州ニ於テ適用スル法律命令ハ其ノ各官廳ニ到達シタル翌日ヨリ起算シ七日ヲ經テ施行ス但シ別段ノ施行時期アル場合ハ此ノ限ニ在ラス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十九年勅令第六十一號ハ之ヲ廢止ス

●統監府令公文式

三十九年一月 統令第四號

改正

三十九年統令三一號、四二年四號

統監府令公文式左ノ通相定ム

統監府令公文式

第一條 統監府令ハ其ノ統監府令ナルコトヲ明記シ統監之ニ署名シ公布ノ年月日ヲ記入シテ同日之ヲ公布ス

第二條 統監府令ハ統監府公報ヲ以テ布告ス

第三條 統監府令ハ其ノ各官廳ニ到達シタル翌日ヨリ起算シ滿七日ヲ經テ之ヲ施行ス但シ其ノ府令中ニ之ト異リタル施行時期ヲ定メタルトキハ此ノ限ニ在ラス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●統監府公報發行期日及其代價

四十二年三月 統令第二十八號

統監府公報ハ京城日報社ヲシテ每週土曜日之ヲ發行セシム但シ臨時ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス
購讀希望者ハ京城日報社ニ就キ購讀スヘシ一部代金ハ四錢トス

●理事廳令公文式

三十九年二月
統令第五號

理事廳令公文式左ノ通相定ム

理事廳令公文式

第一條 理事廳令ハ其ノ理事廳令ナルコトヲ明記シ理事官之ニ署名シ公布ノ年月日ヲ記入シテ同日之ヲ公布スヘシ

第二條 理事廳令ヲ布告スル方法ハ理事官之ヲ定ム

第三條 理事廳令ハ公布ノ日ヨリ起算シ滿七日ヲ經テ之ヲ施行ス但シ其ノ廳令中ニ之ト異リタル施行時期ヲ定メタルトキハ此ノ限ニ在ラス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●土木工事起業者保證金納付制

二十四年三月
勅令第二十六號

朕土木工事起業者保證金ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

土木工事ヲ特許スルニ方リ當該官廳ハ其起業者ヲシテ保證金ヲ納付セシムルコトヲ得
但有價證券ヲ以テ代用セシムルモ妨ケナシ

統監府公報、京城日報社ノシテ毎週土曜日之ヲ發行セシム但シ臨時ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス
購讀希望者、京城日報社ニ宛テ購讀スヘシ一部代金ハ四錢トス

●理事廳令公文式 三十九年二月
法令第五號

理事廳令公文式左ノ通知ス

理事廳令公文式

第一條 理事廳令ハ其ノ理事廳令ニ付トシテ附記シ理事官之署名ニ公布ノ年月日ヲ記入シ同日之ヲ公布スヘシ

第二條 理事廳令ヲ布告スル方法ハ理事官之ヲ定ム

第三條 理事廳令ハ公布ノ日ヨリ起算シ滿七日ノ經テ之ヲ施行ス但シ其ノ廳令中ニ之トモテテ施行時期ノ定メタルトキハ此ノ限ニ在ラス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●土木工事起業者保證金納付制 二十四年三月
勅令第五十六號

土木工事起業者保證金ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

土木工事ヲ特許スルニ方リ當該官廳ハ其起業者ヲシテ保證金ヲ納付セシムルコトヲ得
但シ保證金ヲ以テ代用セシムルモ妨ケナシ

第五輯 外事

第五輯 外事

第一章 條約及諸制

●日韓修好條規

九年三月
大告第三十四號

今般朝鮮國ト別冊ノ通り條約取結相成候條此旨布告候事
修好條規

大日本國

大朝鮮國ト素ヨリ友誼ニ敦ク年所ヲ歷有セリ今兩國ノ情意未タ洽カラサルヲ視ルニ因テ重テ舊好ヲ修メ親睦ヲ固フセント欲ス是ヲ以テ日本國政府ハ特命全權辦理大臣陸軍中將兼參議開拓長官黑田清隆特命全權辦理大臣議官井上馨ヲ簡ミ朝鮮國江華府ニ詣リ朝鮮國政府ハ判中樞府事申樞都摠府副摠管尹滋承ヲ簡ミ各奉スル所ノ諭旨ニ遵ヒ議立セル條款ヲ左ニ開列ス

第一款 朝鮮國ハ自主ノ邦ニシテ日本國ト平等ノ權ヲ保有セリ嗣後兩國和親ノ實ヲ表セント欲スルニハ彼此互ニ同等ノ禮儀ヲ以テ相接待シ寔モ侵越猜嫌スル事アルヘカラス先ツ從前交情阻塞ノ患ヲ爲セシ諸例規ヲ悉ク革除シ務メテ寬裕以通ノ法ヲ開擴シ以テ雙方トモ安寧ヲ永遠ニ期スヘシ

第二款 日本國政府ハ今ヨリ十五箇月ノ後時ニ隨ヒ使臣ヲ派出シ朝鮮國京城ニ至リ禮曹判書ニ親接シ交際ノ事務ヲ商議スルヲ得ヘシ該使臣或ハ留滯シ或ハ直ニ歸國スルモ共ニ其時宜ニ任スヘシ朝鮮國政府ハ何時ニテモ使臣ヲ派出シ日本國東京ニ到リ外務卿ニ親接シ交際事務ヲ商議スルヲ得ヘシ該使臣或ハ留滯シ或ハ直ニ歸國スルモ亦其時宜ニ任スヘシ

第三款 嗣後兩國相往復スル公用文ハ日本ハ其國文ヲ用ヒ今ヨリ十年間ハ添フルニ譯漢文ヲ以テシ朝鮮ハ眞文ヲ用フヘシ

第四款 朝鮮國釜山ノ草梁項ニハ日本公館アリテ年來兩國人民通商ノ地タリ今ヨリ從前ノ慣例及殘遺船等ノ事ヲ改革シ今般新立セル條款ヲ憑準トナシ貿易事務ヲ措辦スヘシ且又朝鮮國政府ハ第五款ニ載スル所ノ二口ヲ開キ日本人民ノ往來通商スルヲ准總スヘシ右ノ場所ニ就キ地面ヲ賃借シ家屋ヲ造營シ又ハ所在朝鮮人民ノ屋宅ヲ賃借スルモ各其隨意ニ任スヘシ

第五款 京圻、忠清、全羅、慶尙、咸鏡五道ノ沿海ニテ通商ニ便利ナル港口二個所ヲ見立タル後地名ヲ指定スヘシ開港ノ期ハ日本曆明治九年二月ヨリ朝鮮曆丙子年正月ヨリ共ニ數ヘテ二十個月ニ當ルヲ期トスヘシ

第六款 嗣後日本國船隻朝鮮國沿海ニ在リテ或ハ大風ニ遭ヒ又ハ薪糧ニ窮竭シ指定シタル港口ニ達スル能ハサル時ハ何レノ港灣ニテモ船隻ヲ寄泊シ風波ノ險ヲ避ケ要用品ヲ買入レ船具ヲ修繕シ柴炭類ヲ買求ムルヲ得ヘシ勿論其供給費用ハ總テ船主ヨリ賠償スヘシト雖モ是等ノ事ニ就テハ地方官人民トモニ其ノ困難ヲ體察シ眞實ニ憐恤ヲ加ヘ救援至ラサル無ク補給救テ吝惜スル無カルヘシ倘又兩國ノ船隻大洋中ニ破壞シ乘組人員何レノ地方ニテモ漂著スル時ハ其地ノ人民ヨリ即刻救助ノ手續ヲ施シ各人ノ性命ヲ保存セシメ地方官ニ届出該官ヨリ各本國ヘ護送スルカ又ハ其ノ近傍ニ在留セル本國ノ官員ニ引渡スヘシ

第七款 朝鮮國ノ沿海島嶼岩礁從前審權ヲ經サレハ極メテ危險トナスニ因リ日本國ノ航海者自由ニ海岸ヲ測量スルヲ准シ其ノ位置淺深ヲ審ニシ圖誌ヲ編製シ兩國船客ヲシテ危險ヲ避ケ安穩ニ航通スルヲ得セシムヘシ

第八款 嗣後日本國政府ヨリ朝鮮國指定各口ヘ時宜ニ隨ヒ日本商民ヲ管理スルノ官ヲ設ケ置クヘシ若シ兩國ニ交渉スル事件アル時ハ該官ヨリ其所ノ地方長官ニ會商シテ辦理セシ

第九款 兩國既ニ通好ヲ經タリ彼此ノ人民各自己ノ意見ニ任セ貿易セシムヘシ兩國官吏毫モ之ニ關係スルコトナシ又貿易ノ限制ヲ立テ或ハ禁沮スルヲ得ス倘シ兩國ノ商民欺罔街賣又ハ賃借價ハサルコトアル時ハ兩國ノ官吏嚴重ニ該通商民ヲ取糾シ債欠ヲ追辨セシムヘシ但シ兩國ノ政府ハ之ヲ代償スルノ理ナシ

第十款 日本國人民朝鮮國指定ノ各口ニ在留中若シ罪科ヲ犯シ朝鮮國人民ニ交渉スル事件ハ總テ日本國官員ノ審斷ニ歸スヘシ若シ朝鮮國人民罪科ヲ犯シ日本國人民ニ交渉スル事件ハ均シク朝鮮國官員ノ查辦ニ歸スヘシ尤雙方トモ各其國律ニ據リ裁判シ毫モ回護袒庇スルコトナク務メテ公平允當ノ裁判ヲ示スヘシ

第十一款 兩國既ニ通好ヲ經タレハ別ニ通商章程ヲ設立シ兩國商民ノ便利ヲ與フヘシ且現今議立セル各款中更ニ細目ヲ補添シテ以テ遵照ニ便ニスヘキ條件共自今六個月ヲ過キスシテ兩國別ニ委員ヲ命シ朝鮮國京城又ハ江華府ニ會シテ商議定立セシ

第十二款 右議定セル十一款ノ條約此日ヨリ兩國信守遵行ノ始トス兩國政府復之ヲ變革スルヲ得ス以テ永遠ニ及ホシ兩國ノ和親ヲ固フスヘシ之レカ爲ニ此約書二本ヲ作り兩國委任ノ大臣各鈐印シ相互ニ交付シ以テ憑信ヲ昭ニスルモノナリ

大日本國紀元二千五百三十六年 明治九年二月二十六日

大日本國特命全權辦理大臣 陸軍中將兼參議開拓長官 黑田清隆 印

大朝鮮國開國四百八十五年 丙子二月初二日

大朝鮮國副官都摠府副摠管 尹滋 承印

同條規附錄 九年十二月十七日 太吉第百二十七號

今般朝鮮國ト修好條規附錄並貿易規則別紙ノ通結約相成候條此旨布告候事 修好條規附錄

日本國政府鑒ニ特命全權辦理大臣陸軍中將兼參議開拓長官黑田清隆特命全權辦理大臣議官井上馨ヲシテ朝

鮮國江華府ニ詣ラシメ同國政府ハ大官判中樞府事申樞副官都摠府副摠管尹滋承ニ委任シ日本曆明治九年二月二十六日朝鮮曆丙子年二月初二日雙方互ニ調印シタル修好條規第十一款ノ旨趣ニ從ヒ日本國政府ハ理事官外務大丞宮本小一ニ委任シ朝鮮國京城ニ詣リ朝鮮國政府ハ講修官議政府堂上趙寅淵ニ委任シ相會同シテ議立スル條款左ニ開列ス

第一款 嗣後各港口駐留日本國人民管理官朝鮮國沿海地方ニ於テ日本國ノ諸船困難ニ遭ヒ緊急ナリト聞クトキハ地方官ニ告ケ該地ニ到ル道路ヲ經過スルヲ得ヘシ

第二款 嗣後使臣及管理官ヨリ各所ヘ通スル送文ハ自費ヲ以テ郵送スルモ或ハ該國人民ヲ雇ヒ專差スルモ各其便ニ從フヘシ

第三款 議定シタル朝鮮國通商各港ニ在リテ日本國人民地基ヲ租賃シ住居スルハ各其地主ト相議シテ價ヲ定ムヘシ朝鮮國政府ニ屬スル地ハ朝鮮國人民ヨリ官ニ納ルト同一ノ租額ヲ出シテ住居スヘシ釜山草梁項日本公館ニハ從前同國政府ヨリ守門設門ヲ設ケシカ今後之ヲ廢撤シ一ニ新定ノ程限ニ依リ標ヲ界上ニ立ツヘシ他ノ二港モ亦此例ヲ照ス

第四款 嗣後釜山港ニ於テ日本國人民行步ヲ得ヘキ道路ノ里程ハ波戶場ヨリ起算シテ東西南北各直徑十里朝鮮里法ニ依ルト定ム東萊府中ニ至テハ里程外ニ在リト雖モ特ニ往來ヲ爲ス此里程内ニ於テ日本國人民隨意行步シ其地ノ物産及日本國物産ヲ賣買スルヲ得ヘシ

第五款 議定シタル朝鮮國各港ニ於テ日本國人民ハ朝鮮國人民ヲ賃雇スルヲ得ヘシ朝鮮國人民其政府ノ許可ヲ得ハ日本國ニ來ルモ妨無シ

第六款 議定シタル朝鮮國各港ニ於テ日本國人民若シ死去シタル時ハ適宜ノ地處ヲ選ミ埋葬スルヲ得ヘシ但他ノ二港ノ埋葬地ハ釜山埋葬地ノ遠近ノ例ニ依ル

第七款 日本國人民日本國ノ諸貨幣ヲ以テ朝鮮國人民ノ所有物ト交換シ得ヘシ又朝鮮國人民ハ交換シ買得タル日本國ノ諸貨幣ヲ以テ日本國ノ諸貨物ヲ買入ルル爲メ朝鮮國指定ノ諸港ニテハ人民相互ニ通用スルヲ得

ヘシ

日本國人民ハ朝鮮國銅貨幣ヲ使用運輸スルヲ得ヘシ兩國人民私ニ錢貨ヲ鑄造スル者アレハ各其國ノ法律ニ照シテ處斷スヘシ

第八款 朝鮮國人民日本國人民ヨリ買得タル貨物或ハ贈與ヲ受ケタル諸物品ハ隨意使用シテ妨無シ

第九款 修好條規第七款ニ載スル旨趣ニ從ヒ日本國測量船小船ヲ放チ朝鮮國沿海ヲ測量スル時或ハ風雨ニ逢ヒ或ハ干潮ノ爲メ本船ニ歸ル能ハサル時ハ該處里正ヨリ其近傍ノ人家ニ安著セシムヘシ若シ需用ノ物品アラハ官ヨリ辨給シ後日其入費ヲ完済スヘシ

第十款 朝鮮國ハ未タ海外諸國ト通信セス日本國ハ年來諸國ト締盟友誼アルノ故ヲ以テ今後朝鮮國ノ沿海ヘ諸國ノ船舶風波ノ爲メ困難シ漂著スルアラハ朝鮮國人民理ニ於テ之ヲ愛恤セサル無シ該漂民本國ニ送還セラレンヲ望マハ朝鮮國政府ヨリ各港口駐留ノ日本國管理官ニ遞付シ本國ニ送還セシム該官員之ヲ領諾セサル無シ

第十一款 右十款ノ章程及之レニ添ヘタル通商規則共修好條規ト同一ノ權ヲ有ス兩國政府遵行シテ違フ莫ル可シ然レトモ此各款中若シ兩國人民實際貿易上實地ノ障礙ヲ生シ改革セサル可ラサル事柄ヲ認ムル時ハ兩國政府共議案ヲ作り一箇年前報知シテ協議決定スヘシ

大日本紀元二千五百三十六年明治九年八月二十四日

大朝鮮開國四百八十五年丙子七月初六日

理事官外務大丞 宮 本 小 一 印

講修官議政府堂上 趙 寅 淵 印

朝鮮國議定諸港ニ於テ日本國人民貿易規則

(十六年第三十四號布告ニ依リ失効ニ付略ス)

●同條規續約 十五年十一月
太昔第五十四號

今般朝鮮國ト別紙ノ通修好條規續約ヲ訂定交換ス
右奉 勅旨布告候事

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル
大日本國皇帝此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス大日本國辦理公使花房義實及大朝鮮國全權大使李裕元全權副官金宏集
ヲ以テ雙方全權委員ト爲シ明治十五年八月三十日朝鮮國濟物浦ニ於テ大日本國ト大朝鮮國トノ間ニ取結ヒシ
修好條規續約書ヲ朕親ラ閱覽セシニ能ク朕力意ニ適シ更ニ間然スヘキナシ故ニ凡テ其約書條款ニ掲クル本趣
ハ朕茲ニ之ヲ嘉納批准ス

神武天皇即位紀元二千五百四十二年
明治十五年十月三十日東京宮中ニ於テ親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名 國 璽

外務卿正四位勳一等 井 上 馨

大日本國辦理大臣花房義實ト大朝鮮國全權大臣李裕元副大臣金宏集ト明治十五年八月三十日 朝鮮國四百九十一年七月十七日
川府濟物浦ニ於テ商訂シタル追加條約ヲ今兩國ノ批准ヲ經テ大日本國外務卿井上馨ト大朝鮮國特命全權大臣
兼修信使朴泳孝副大臣金晚植ト東京ニ於テ互ニ相查照シ以テ之ヲ交換シ各名ヲ署シ印ヲ鈐シ以テ證トナス
大日本國明治十五年十月三十一日

大朝鮮國開國四百九十一年九月二十日
大日本國 外務卿 井 上 馨
大朝鮮國特命全權大臣兼修信使 朴 泳 孝
大朝鮮國 副大臣 金 晚 植

日本國ト朝鮮國ト嗣後益々親好ヲ表シ貿易ヲ便ニスル爲メ茲ニ續約ニ款ヲ訂定スルコト左ノ如シ

第一
元山釜山仁川各港ノ間行里程今後擴メテ四方各五十里ト爲シ 朝鮮法二年ノ後ヲ期シ 條約批准ノ日ヨリ周歲ヲ算シテ一年ト爲ス 更ニ各百里ト爲ス事
今ヨリ一年ノ後ヲ期シ楊花鎮ヲ以テ開市場ト爲ス事

第二
日本國公使領事及其隨員眷從ノ朝鮮內地各處ニ遊歷スルヲ任聽スル事
遊歷地方ヲ指定シ禮曹ヨリ證書ヲ給シ地方官證書ヲ驗シテ護送ス
右兩國全權大臣各々諭旨ニ據リ約ヲ立テ印ヲ蓋シ更ニ批准ヲ請ヒ二箇月ノ内 日本明治十五年十月朝鮮開國四百九十一年九月 日本東京ニ於テ交換スヘシ

大日本國明治十五年八月三十日
大朝鮮國開國四百九十一年七月十七日

日本國辦理公使	花 房 義 實 印
朝鮮國全權大臣	李 裕 元 印
朝鮮國全權副官	金 宏 集 印

●韓國ニ於テ日本人民貿易ノ規則並海關稅目 十六年十月
太昔第三十四號

今般朝鮮國ト別紙ノ通日本人民貿易規則並海關稅目ヲ協議決定ス
右奉勅旨布告候事

朝鮮國ニ於テ日本人民貿易ノ規則
第一款

第五輯 外事 第一章 條約及諸制

日本諸商船朝鮮國ノ通商港ニ入津スルトキハ即時ニ海關ヨリ官吏ヲ派遣シ船口ヲ封鎖シ且其外荷物アル場所ハ相當ノ取締ヲ爲スヘシ商船ニテハ其官吏ヲ丁簿ニ取扱ヒ且之ニ適宜ノ居室ヲ給スヘシ若シ之ニ給スヘキ居室ナキトキハ右官吏ハ關海ノ番船上若クハ陸上ニ在ルモ其便宜ニ任スヘシ尤其諸費ハ總テ海關ノ支拂タルヘシ船主若クハ代理人等ニ向テ私ニ毫釐ヲモ受クヘカラス但日本形風帆船荷物取締方ニ付テハ海關長日本領事官ト協議シ適宜ノ方法ヲ設施スヘシ

第二款

日本商船朝鮮國ノ通商港ニ入津シタルトキハ其船長或ハ代理人ヨリ其船書即船免狀荷物送狀ヲ日本領事官ニ指出シ其預リ證書ヲ受取り而シテ入港手數トシテ其投箱時點ヨリ四十八時以内但日曜日及其他ノ休日ヲ除ク以下ノ諸款内時間ニ係ル者ハ皆ナ同シ右預リ證書入港届書積荷目録其他船用品及自餘ノ免稅品商品ニアラサル者ナノ目録ヲ海關ヘ差出スヘシ若シ右時限内ニ入港手數ヲ爲ササレハ其船長ニ銅錢三萬文ノ罰金ヲ課シ尙ホ怠テ手數ヲ爲ササレハ其時限ヨリ二十四時ヲ經過スル毎ニ更ニ同額ノ罰金ヲ課スヘシ但其總額ハ十萬文ノ外ニ踰ルヲ得ス

本款入港届書ニハ船名噸數噸數ハ船長ノ姓名乗組水夫人員船客ノ姓名員數仕出港名發航ノ年月日及入港ノ年月日時ヲ詳記シ船長或ハ其代理人是ニ記名調印スヘシ又積荷目録ニハ積荷物ノ記號、番號、箇數、品名及荷主ノ姓名ヲ詳記シ其正確ナル旨ヲ保證シ船長或ハ其代理人是ニ記名調印スヘシ又船用品及自餘ノ免稅品目録ニモ船長或ハ其代理人記名調印スヘシ但諸届書及其他ノ書類共何レモ日本國文ヲ用ヒ譯文ヲ副ルコトナシ

第三款

積荷目録ノ遺漏若クハ錯誤ハ入港手數ヲ畢リテヨリ二十四時以内ナレハ之ヲ書入レ或ハ書改ムルコトヲ得若此時限ヲ過クルトキハ手數料七千文ヲ納ムルニアラサレハ之ヲ書入レ又書改ムルヲ得ス又右ノ時限ヲ過キ誤脱アルヲ知ラスシテ陸揚スル者ハ其物品ニ課スヘキ程ノ二倍ヲ徵ス

第四款

入港手數ヲ畢レハ即時ニ海關長ヨリ開船免狀ヲ付與スヘシ船長或ハ代理人ハ此ノ免狀ヲ本船ヲ監守スル海關官吏ニ示シテ船口其他ノ開封ヲ乞フヘシ若シ擅ニ其封鎖ヲ破開スルコトアレハ何人ノ所爲タルヲ問ハス其船長ニ三萬文ノ罰金ヲ課スヘシ

第五款

輸入荷物ヲ陸揚シ或ハ輸出荷物ヲ船積セント欲スル者ハ先ツ陸揚願書又ハ船積願書ニ仕入書ヲ添仕入書ナル者ハ荷物仕入ノ年月日及ヒ地名並ニ其價値及ヒ色裝口錢保險料運賃其他ノ諸雜費ヲ詳記シ其買主或ハ所有主又ハ船積セシ者或ハ代理人ノ記名調印セシモノナシ海關ニ指出スヘシ然ルトキハ海關官吏ハ速カニ陸揚免狀或ハ船積免狀ヲ交付スヘシ荷物ヲ船卸シ又ハ船積スルニハ先ツ此免狀ヲ本船ヲ監守スル所ノ海關官吏ニ示スヲ要ス又荷物ヲ船移スル者モ右ニ准シテ海關ノ免許ヲ受クヘシ

第六款

陸揚願書又ハ船積願書ニハ其輸入船又ハ輸出船ノ名及ヒ其荷物ノ記號、番號、品種等ヲ詳記シ且海關ノ收程ヲ害スヘキ物品ヲ隱匿スルコトナキ旨ヲモ保證シ願人或ハ其代理人記名調印スルヲ要ス

第七款

日没ヨリ日出マテハ海關ノ特許ヲ受クルニ非サレハ荷物ノ陸揚船積又ハ船移スルヲ得ス且海關官吏ハ日没ヨリ日出マテノ間船口ヲ封鎖シ其他荷物ノ在ル處ニハ相當ノ取締ヲ爲シ置クヘシ若シ該官吏ノ許可ナクシテ其封鎖ヲ開キ或ハ取締ヲ破ル者アレハ其船長ニ三萬文ノ罰金ヲ課スヘシ

第八款

若シ海關ノ免狀ヲ得シテ荷物ヲ陸揚船積若クハ船移スル者或ハ海關ノ免許ナクシテ兩國議定ノ埠頭外ヨリ荷物ヲ陸揚シ若クハ積出ス者アラハ並ニ本品ヲ沒收スヘシ

日本人民ハ通商各港ニ於テ荷物ヲ運搬シ或ハ船客ヲ送迎スル爲メ相對ノ約束ニテ朝鮮ノ舟車人夫等ヲ雇入ルルコトヲ得ヘシ朝鮮官吏ニ於テハ決シテ之ニ干渉セス又何舟何人ト制限ヲ立ツルカ如キコトアルヘカラス但日本商民若シ其雇方ニ差支ヘ海關ニ願出ルトキハ海關ニ於テ相當ノ周旋ヲナスヘシ

第九款

輸出入品トモ其通關ノ時本書附録ノ稅則ニ從ヒ海關稅ヲ納ムヘシ又船中自用品ト雖モ之ヲ陸揚シテ賣拂フトキハ稅則ニ照シテ納稅スヘシ但從價稅ヲ徵收スルトキハ荷物ノ產出地若クハ製造地ニ於テノ實價ニ該地ヨリ其荷物ヲ陸揚スル港マテノ運送費保險料及口錢等ノ諸費ヲ合算シ之ヲ原價トナシ其定則ノ稅ヲ賦課スヘシ

第十款

稅金ノ過納或ハ不足納ノコトアリトモ納稅ノ日ヨリ三十日ヲ過キサル間ハ海關ヨリハ其不足ヲ追收シ又納人ヨリハ其過納ノ返還ヲ請求スルコトヲ得ヘシ但荷物入量ノ不足又ハ損傷ヲ發見シタルカ爲メ過納稅ノ返還ヲ乞フ者アリトモ荷物通關後ハ之ヲ許サス

第十一款

海關官吏ハ輸出入荷物ノ全部又ハ一部ヲ荷物改所ニテ檢査スヘシ其搬運ノ費用ハ荷主ノ自辨タリ如シ荷物ヲ荷物改所ノ外ニ持往キ檢査スルトキハ其費用ハ海關ノ支辨タルヘシ又海關官吏ハ物品ノ損壞セサル様細心ニ之ヲ取扱ヒ檢査ヲ畢ラハ其荷物ヲ成ルヘキ丈ケ舊ノ如クニ包裝スヘシ且ツ檢査ノ爲メ徒ニ時間ヲ費スコト莫ルヘシ若シ檢査ノ時不注意ニ因リ損毀ヲ致スコトアラハ海關之ヲ賠償スヘシ

第十二款

海關長若シ輸出入ノ申立タル價格ヲ不充分ナリト思フトキハ海關鑑定役ノ鑑定價格ニ從テ納稅セシムヘシ若シ輸出入人其鑑定ニ服セサルトキハ二十四時以内ニ其次第ヲ海關長ニ申出ツヘシ然ルトキハ海關長ハ輸出入人ヲシテ自ラ評價人ヲ選定シ其評估ニ從テ再度申立ヲ爲サシムヘシ海關長ハ其再度申立タル 定價格ニ從テ稅ヲ課スルモ又ハ評定價格ニ其ノ百分ノ五ヲ加ヘ本品ヲ買上クルモ自由トス但之ヲ買上クルニ於テハ再度申立ノ日ヨリ五日以内ニ其代價ヲ拂濟スヘシ

第十三款

輸入貨物ノ途中ニテ損傷シタルモノアレハ輸入人ハ其趣ヲ海關ニ届出テ二人以上ノ正實ナル鑑定人ヲ擇ヒテ

其損高ヲ鑑定セシメ各包ノ記號番號ト其損高ヲ記載シタル證書ヲ認メ鑑定人ヲシテ之ニ調印セシメ之ヲ陸揚願書ニ添テ海關ニ差出シ減稅ヲ請フヘシ但此場合ト雖トモ第十二款ニ載スル如ク更ニ鑑定評價スルヲ妨ケス

第十四款

若シ陸揚願書或ハ船積願書ニ載セサル物品ヲ荷物ノ内ニ隠シ入レ關稅ヲ通脫セント謀ル者アラハ該品ヲ官ニ沒收スヘシ又若シ荷物ノ品種數量等ヲ偽リ或ハ可稅品ヲ免稅品目錄中ニ混記シテ關稅ヲ通脫シ又ハ減少セント謀ル者アラハ相當ノ關稅ヲ納メシメタル上罰金トシテ其通脫若クハ減少セント謀リタル稅金高ノ五倍ヲ課スヘシ

第十五款

船中乗組人及ヒ旅客ノ自用品ヲ陸揚或ハ船積スルニハ海關ノ免狀ヲ請フニ及ハス然レトモ海關官吏ニ於テ其品々ヲ檢査シ若シ自用ト認メ難キ過分ノ可稅品ヲ所持スルトキハ稅目ニ照シ之ニ相當ノ稅ヲ課スヘシ又旅客中ニ禁制品ヲ隠スモノハ本品ヲ沒收シ阿片ノ如キハ第三十六款ニ從テ處分スヘシ

第十六款

日本公使館所用ノ物品ニハ總テ關稅ヲ課スルコトナク且之ヲ檢査スルコト莫ルヘシ

第十七款

爆發質若クハ危險質ニ係ル荷物ノ揚卸場ハ豫メ之ヲ定メ置キ其場所ノ外之ヲ揚卸スルヲ許サス

第十八款

朝鮮國ノ通商港ニ輸入シタル關稅納濟ノ諸物品ハ之ヲ朝鮮國ノ諸部ニ輸送スルニ當テ運送稅或ハ内地通關稅其他一切ノ稅ヲ賦課スルコト莫ルヘシ又輸出ノ爲メニ朝鮮國ノ各部ヨリ通商港へ運送スル所ノ物品ニモ右同様運送稅内地通關稅其他一切ノ稅ヲ課セサルヘシ

第十九款

輸入物品關稅納濟ノ後更メテ之ヲ他ノ開港場へ轉送セントスル者アラハ其荷物ヲ解開ケ若クハ物品ヲ抽キ換
へ或ハ挿入レタルコトナク元形ノママタルコトヲ海關ニ於テ見届ケタル上ハ納稅濟手形ヲ渡スヘシ他港ノ海
關ニテハ其荷物ヲ右ノ手形ニ引合セテ相違ナケレハ重ネテ輸入稅ヲ課スルコトナシ若シ物品ヲ抽キ換へ或ハ
挿入レタル等ノ事アラハ其抽キ換へ若クハ挿入レタル物品ニ付相當ノ稅ヲ納メシメタル上罰金トシテ其
稅額五倍ノ金高ヲ課スヘシ

第二十款

輸入物品荷主引取タル後之ヲ積戻サンコトヲ請フ者アルトキハ海關ニテ之ヲ檢査シ果シテ輸入品ニ相違ナキ
ノ證左アレハ輸出稅ヲ課スルコトナク其積戻ヲ許スヘシ

第二十一款

日本商船朝鮮國ノ通商港へ積ミ回ル朝鮮國產物ハ最初朝鮮港ヨリ輸出セシ時ノ性質及ヒ有様ヲ變換セス又其
輸出ノ日ヨリ起算シテ三周年ヲ經過セス且其輸出ノ時受取タル船積免狀ヲ相添へ輸入人ニ於テ其朝鮮國產物
タルコトヲ證明スルニ於テハ無稅通關ヲ許スヘシ

第二十二款

朝鮮國沿海運輸ノ便相整フ迄ノ間日本國商船ハ其何國ノ物品タルヲ問ハス之ヲ搭載シ通商各港ノ間ヲ往來ス
ルヲ得ヘシ但各通商港ニテ買入タル朝鮮產物ヲ朝鮮國ノ他ノ通商港へ輸送セント欲スルトキハ其物品ノ輸出
稅ニ等シキ金額又ハ其金額ヲ擔保スヘキ相當ノ保證人^{稅額長ノ補フ選ミ}其證書ヲ其輸出港ノ海關ニ預ケ置キ而
シテ他ノ通商港ニ到リテ右物品ヲ陸揚スルトキ陸揚證書ヲ其港ノ海關ヨリ受取リ^{尤輸入稅ヲ拂}輸出ノ日ヨリ六
箇月以内ニ之ヲ輸出港ノ海關へ指出シ最初預ケ置キタル金額ヲ請戻シ又ハ證書ノ返却ヲ乞フヘシ然レトモ若
シ其輸送船ノ難破ニ遭フコトアレハ輸出ノ日ヨリ一箇年以内ニ右證書ノ代リトシテ日本領事館ノ確認シタル難
破證明書ヲ差出スヘシ但朝鮮國ノ船隻不足ナキ日ニ至レハ此口ノ貨ヲ彼口へ運載スルニ他國ノ船隻ヲ用ヒス

第二十三款

各通商港海關ノ荷物ヲ取扱フ處ニハ朝鮮政府ニテ上屋ヲ建設シ且又輸出入荷物等ヲ預置クヘキ借庫ヲ築造ス
ヘシ尤藏敷料及ヒ其他ノ事ハ別ニ其規則ヲ協議設定スヘシ

第二十四款

輸入荷物ノ稅ヲ納メスシテ之ヲ海關倉庫ニ預ケント欲スルモノハ倉庫規則ニ從ヒ海關長ノ免許ヲ受ケサルヘ
カラス然ルトキハ右荷物ヲ再ヒ日本國へ積戻サンコトスルトキハ其儘輸出スルヲ得ヘシ又既ニ納稅シタル荷物
ト雖モ右倉庫内ヨリ直チニ積戻スニ於テハ其既納ノ稅金ヲ返還スヘシ尤一旦荷主ノ許ニ引取リタル荷物ハ第
二十款ノ例ニ據ルヘシ但朝鮮政府ニテ借庫ヲ建築セサル間ハ荷物ヲ引取リタル後ト雖モ原包ノママナレハ海
關ニ於テ既納ノ輸入稅ヲ還付シ積戻スコトヲ許スヘシ尤一箇年ヲ過クル者ハ第二十款ノ例ニ同シ

第二十五款

日本商船修復ノ爲メ其積荷ヲ陸揚スヘキコトアラハ關稅ヲ納メスシテ之ヲ陸揚シ海關所轄ノ上屋或ハ倉庫ニ
入置キ^{但藏敷料及諸雜費ハ}修復濟ノ後之ヲ船積スルコトヲ得ヘシ然レトモ若シ其荷物ヲ賣拂フコトアラハ相當ノ
關稅ヲ納ムヘシ又朝鮮海邊ニテ破損シタル船舶ノ船材船具及ヒ船用品ヲ賣却スルトキハ其輸入稅ヲ免除スヘ
シ

第二十六款

日本商船出港セント欲セハ拔錨前ニ船長或ハ其代理人ヨリ先ツ出港届書及輸出積荷目錄ヲ海關ニ差出シ領事
ノ船書預リ證書ヲ請戻シ出港免狀ヲ得テ後出港スヘシ

第二十七款

出港ノ手數ヲ爲シ了リタル船舶都合ニ由リ再ヒ荷物ヲ船積シ若クハ船卸セント欲スルトキハ更ニ入港ノ手數
ヲナシ出港スルトキハ亦出港ノ手數ヲナスヘシ又出港手數ノ濟ミタル上出港時期ニ及フト雖モ拔錨シ能ハサ
ルトキハ船長或ハ其代理人ヨリ其旨ヲ海關ニ届出テ認可ヲ受クヘシ

第二十八款

船長出港免狀ヲ得ント欲スルモ海關諸規則ニ違犯スルノ事件アリテ未タ裁判ヲ經サル間ハ海關ニ於テ之ヲ與ヘサルヘシ尤領事官ニ於テ船長ニ至當ノ引受人ヲ立シムルカ又ハ相當ノ保證金ヲ出サシメタル上海關長ニ通牒スルトキハ海關長ハ出港免狀ヲ與フヘシ

第二十九款

郵船ハ同日若クハ同時ニ入港手數ト出港手數ヲ爲スコトヲ得ヘシ又輸入積荷目録ニハ其港ニ於テ陸揚シ若クハ船移シスル所ノ荷物ノ外之ヲ掲記スルコトヲ要セス又輸出積荷目録ハ船長ヨリ差出シ能ハサルトキハ其郵船會社ノ代理人ヨリ出港後三日内ニ之ヲ指出スモ妨ナシ

第三十款

船中ノ需用品ヲ求ムル爲メ若クハ災厄ヲ避ル爲メ朝鮮ノ通商港ニ立寄リタル日本商船或ハ漁船ハ入港手數及ヒ出港手數ヲ爲スニ及ハス但斯ノ如キ船舶ト雖モ二十四時以上碇泊スルトキハ其次第ヲ海關ヘ届出ツヘシ尤引續キ貿易ヲ爲ストキハ必ス第二款ノ規則ニ從フヲ要ス

第三十一款

朝鮮政府ニ於テ後來通商各港内ヲ修理シ及燈臺礁標ヲ設クヘシ尤之ヲ維持スル費用ニ充ツルカ爲メ日本商船ノ各通商港ニ來航スルモノハ噸税トシテ每噸百二十五文ツツヲ納ムヘシ但何石積ト稱スル船ハ日本ノ六石五斗五升ヲ以テ一噸ト算定スヘシ右噸税ヲ納ムレハ海關ヨリ四箇月限リノ手形ヲ渡シ右期限内ハ朝鮮國內何レノ通商港ニ到ルトモ復タ噸税ヲ納ムルニ及ハス又入港ノ商船荷物ヲ陸揚セスシテ他所ニ赴カントスル者二日內ニ出港スルトキハ噸税ヲ納ムルニ及ハス尤風雨或ハ大霧等ニテ出港シ難キモノハ其次第ヲ海關ニ届出ツヘシ但漁船ハ噸税ヲ納メス尤噸税ハ他國ノ商船若シ日本船ト同數ノ多キニ至レハ公同協議シテ改定スルコト有ルヘシ

第三十二款

軍艦其他日本政府ニ屬シ商品ヲ搭載セサル船舶ノ朝鮮國通商港ニ到ルモノハ入港手數及ヒ出港手數ヲ爲スコトナク又噸税ヲ拂フコトナク且海關官吏之ヲ監守スルコト莫ルヘシ然レトモ其船中所用品ノ内不用ノ分ヲ陸揚シテ之ヲ賣拂フトキハ其買主ヨリ之ヲ海關ニ届出テ相當ノ關稅ヲ納ムヘシ

第三十三款

日本商船若シ朝鮮國ノ不開港場ニ於テ密商シ或ハ密商セント謀ルモノアラハ該商品ハ勿論其搭載スル所ノ商品ヲ朝鮮政府ニ沒收シ船長ニ五十萬文ノ罰金ヲ課スヘシ但風波ノ難ヲ避ケ或ハ薪水食料ヲ求ムル爲メニ一時寄泊スルモノハ此ノ例ニ非ス

第三十四款

朝鮮國政府又ハ人民ニテ荷物人員等ヲ不開口岸ニ運送セント欲スルトキハ日本商船ヲ雇入ルルコトヲ得ヘシ雇主若シ人民ナレハ朝鮮國政府ノ免狀ヲ得テ之ヲ僱使スヘシ

第三十五款

此規則中ニ掲クル所ノ罰金沒收及其他ノ罰則ニ關スル事件ハ海關長ノ告訴ニ因リ日本領事官ニ於テ之ヲ裁斷スヘシ尤其取立タル罰金及沒收シタル物品ハ總テ朝鮮政府ノ收領スル所トス故ニ朝鮮官吏ノ差押ヘタル物品ハ該官吏ト日本領事官ト立會ノ上ニテ之ニ封印ヲ施シ裁斷ヲ了ル迄海關ニ留置クヘシ若シ領事官ニ於テ之ヲ無罰ニ決スルトキハ其物品ハ領事ヲ經テ荷主ヘ引渡スコト勿論タリト雖モ朝鮮官吏若シ其裁判ニ服セザルトキハ日本國相當ノ裁判所ヘ控訴スヘシ然ルトキハ荷主ハ其物品ノ代價ヲ裁判完結ニ至ル迄領事館ニ預ケ置クヘシ若シ其差押ユル所ノ物品腐敗質變態質或ハ危險質ニ係レハ其代價ヲ領事館ニ預リ置キ物品ハ荷主ニ渡スヘシ

第三十六款

鴉片ハ輸入ヲ嚴禁ス若シ鴉片ヲ密輸シ或ハ密輸セント謀ルモノアラハ其品沒收ノ上密輸高一斤ニ付七千文ツツノ罰金ヲ課スヘシ但朝鮮政府需用ノ爲メ輸入スルカ又ハ在留日本人民藥用ノ爲メニ日本領事官ノ證明ヲ經テ輸入スルモノハ此ノ限ニアラス

第三十七款

若シ朝鮮國水旱或ハ兵燹等ノ事故アリ境内飢食ヲ致スヲ恐レ朝鮮政府暫ク米糧ノ輸出ヲ禁セント欲セハ須ク其期ニ先タツ一箇月前ニ於テ地方官ヨリ日本領事官ニ照知スヘシ然ルトキハ豫メ其期ヲ在香港ノ日本商民ニ轉示シ一體遵守セシムヘシ米穀類ハ進出口トモニ五分稅ヲ課スト雖モ如シ朝鮮國ニ災荒アリテ進出口ヲ要シ或ハ日本國ニ災荒アリテ進出口ヲ要スルトキハ知照ヲ經テ進出稅ヲ免スヘシ

第三十八款

大小砲銃諸種彈丸火藥雷粉其他一切ノ軍器ハ朝鮮政府又ハ朝鮮政府ヨリ軍器買入ノ免許ヲ受ケタル朝鮮人ヲ除クノ外朝鮮人民ヘ賣渡スコトヲ許サス若シ之ヲ密賣スル者アラハ其品ヲ沒收スヘシ

第三十九款

此規則中間科ヲ揭ケサル條款ニ違背スル者アルトキハ一萬五千文以下ノ罰金ヲ課スヘシ

第四十款

此規則ニ定ムル所ノ稅銀及ヒ罰金ハ朝鮮銅錢ヲ以テ之ヲ納ムヘシ或ハ日本銀貨ヲ以テ時ノ相場ニ從ヒ換用スヘシ尤墨斯哥弗ハ日本銀貨ト同價ナルヲ以テ之ヲ換用スルモ亦妨ケナシ又第二、第三、第四、第六、第三十三ノ諸款ニ揭クル所ノ罰金及ヒ手数料ハ其商船五百噸以下ハ二分ノ一ヲ科シ五十噸以下ハ四分ノ一ヲ科スヘシ

第四十一款

日本國漁船ハ朝鮮國全羅、慶尙、江原、咸鏡ノ四道朝鮮國漁船ハ日本國肥前、筑前、長門朝鮮海ニ面スル所石見、出雲對島ノ海濱ニ往來捕魚スルヲ聽スト雖モ私ニ貨物ヲ以テ貿易スルヲ許サス違フ者ハ其品ヲ沒收スヘシ但其所獲ノ魚介ヲ賣買スルハ此例ニ非ス其彼此應納ノ魚稅及ヒ其他ノ細目ニ至テハ遵行兩年ノ後其景況ニ隨ヒ更ニ協議酌定スヘシ

第四十二款

此規則ハ調印ノ日ヨリ百日内ニ日本朝鮮兩政府ノ允准ヲ經ヘキモノニシテ右百日經過ノ後直チニ之ヲ實踐ス

ヘシ然ルトキハ從來ノ貿易規則及ヒ其他ノ諸約書中此規則ノ諸條款ニ抵觸スルモノハ總テ其效ヲ失フモノトス尤現時若クハ後來朝鮮政府何等ノ權利特典及ヒ惠政恩遇ニ論ナク他國官民ニ施及スルモノアラハ日本國官民モ亦猶豫ナク一體均霑スルヲ得又此ノ規則ハ實踐ノ日ヨリ五箇年ヲ以テ期トス故ニ其滿期前ニ於テ兩國政府更ニ協議ヲ遂ケ新規則ヲ設立スルヲ要ス但シ若シ協議中其期ヲ過クルコトアルモ新規則設立マテハ此ノ規則ニ據テ辦理スルモノトス且又兩國ノ官吏此ノ規則内ニ掲載セサル條款ヲ增加スルヲ以テ彼此共ニ必要ト考フ時ハ隨時商議ヲ開クヲ得ヘシ

右證據トシテ兩國ノ全權大臣此ノ條約ニ名ヲ記シ印ヲ調スル者也

大日本國明治十六年七月二十五日

大朝鮮國開國四百九十二年六月二十二日
全權大臣辨理公使 竹添進一郎 印
全權大臣督辦交涉通商事務 閔泳穆 印

朝鮮國海關稅目

輸入之部

第一 藥材製藥及香料

○五分稅 (從價)

一 諸藥材 他項ニ掲ル者ヲ除ク

一 明礬

一 諸製藥類

○壹割稅 (從價)

一 樟腦

一 膠 (各種ノ)

一 龍腦

一 丁香

一 麝香

○貳割稅 (從價)

一安 息 香
 一沈 香 香
 一甘 香 香
 一其 外 香 料

一乳 香
 一白 檀 香
 一線 檀 香

第二 染料及顔料

○八分税 (從價)
 一乾 藍 水 藍
 一蘇 木 及 蘇 木 越 幾 斯
 一紅 花
 一其 他 別 項ニ 掲 載 セ サ ル 一 切 ノ 染 料
 一各 色 鉛 粉 及 亞 鉛 粉
 一紺 青
 一群 青
 一朱 青

一漆 子
 一五 倍 子
 一染 粉
 一色 油
 一洋 漆
 一雌 黃
 一綠 青
 一其 他 別 項ニ 掲 載 セ サ ル 一 切 ノ 顔 料

第三 金屬及金屬製品類

○五分税 (從價)
 一白 銅
 一鐵、鋼、鉛、錫、汞、夾、金、其他別項ニ掲ケサル諸金屬類(塊錠條桿板葉等ノ別ナク)
 一鐵線及銅線
 一水 銀

一銅 鐵 釘 類
 一ソ ル ダ ー

一白 銅

一ア ン チ モ ニ

一鍋釜及物及鐵製ブリキ製其他總テ金屬製品類

○壹割税 (從價)

一金銀銅錫ノ箔類
 ○貳割税 (從價)
 一金銀器及渡金銀器

第四 油蠟脂類

○五分税 (從價)

一石 炭 油

○八分税 (從價)

一諸種ノ油別項ニ掲ケサルモノ
 一瀝青及タール
 一其他別項ニ掲載セサル一切ノ油蠟脂類

一蜜 蠟 木 蠟
 一獸 ノ 油
 一椿 ノ 油
 一セ サ ナ ン
 一蠟 付 油

第五 布帛類

○八分税 (從價)

一蠟 燭
 一蠟 油
 一氣 油
 一平
 一綉
 一綉
 一綉

一海 黃
 一綉 子
 一綉 緞

- 一 綿純子、綿縞子、綿紋縞子、綿繪子
- 一 白 金 巾
- 一 雲齋、小倉織、紋羽類
- 一 寒 冷 紗
- 一 左 良 紗
- 一 綿 天 鵝 絨
- 一 純 毛 吳 呂
- 一 畔 吳 呂
- 一 モヘイル (同)
- 一 縮 緬 吳 呂 (純駁ノ別ナク)
- 一 綿 毛 羅 紗
- 一 アルバカ
- 一 麻布、麻綿布、及麻毛布類 (生色白色ノ別ナク)
- 一 帆 布 (綿麻共)
- 一 油 布 蠟 布
- 壹割税 (從價)
- 一 紗
- 一 號 珀
- 一 緞子、縞子綾類
- 貳割税 (從價)
- 一 天 鵝 絨
- 一 生 金 巾
- 一 唐 棧 巾
- 一 天 竺 布
- 一 緋 金 巾、色 金 巾、紋 金 巾、綾 金 巾
- 一 綿 絹
- 一 蚊 蠅 巾、褥 巾
- 一 綾 吳 呂
- 一 フラネル (純駁ノ別ナク)
- 一 毛 縞 子
- 一 純 毛 羅 紗
- 一 毛 純子、羅世板セルヂス、スバニストライプス (純駁ノ別ナク)
- 一 臥 氈
- 一 其他別項ニ掲載セサル一切ノ絹綿毛及麻布ノ類
- 一 縮 緬
- 一 羽 二 重 緬
- 一 諸 種 地 氈 類

第六 文具紙類

- 五分税 (從價)
- 一 日本人自用雜紙
- 八分税 (從價)
- 一 印刷用洋紙 (何國製ニ係ラス)
- 一 諸 日 本 紙
- 一 各 種 墨
- 壹割税 (從價)
- 一 色 紙
- 一 印 材
- 一 其他別項ニ掲載セサル一切ノ文具紙類
- 第七 飲食物及煙草類
- 五分税 (從價)
- 一 穀 物 穀 粉
- 一 日 本 人 所 食 ノ 物
- 八分税 (從價)
- 一 鹽
- 一 醃 肉、醃 魚 及 罐 詰 食 料
- 一 葛 粉
- 一 落 花 生 豆
- 一 其他別項ニ掲載セサル一切ノ飲食物類
- 一 包 裝 用 洋 紙
- 一 墨 地、封 筒、鉛 筆、洋 筆、毛 筆、石 盤 等
- 一 紋 紙
- 一 印 肉 紙
- 一 生 水 菓
- 一 味 噌 醬 油 及 酢
- 一 茶
- 一 素 麵
- 一 寒 天
- 一 檸 檬 水、生 姜 水、曹 達 水 及 諸 飲 料 類
- 一 白 黑 砂 糖

一糖 密糖水
一清 國 酒

○壹割稅 (從價)

一麥 酒 (諸種ノ)

○壹割五分稅 (從價)

一冰糖精製糖

一日本 酒
一林 檜 酒
一赤白葡萄酒
一果 子 類

○貳割稅 (從價)

一卷煙草紙卷煙草其他一切ノ煙葉

○貳割五分稅 (從價)

一ウエルムート

一ポ ル ト

○三割稅 (從價)

一ブランデー

一シヤンペイン

一杜 松 子 酒

一糖 酒

一其他別項ニ掲載セサル一切ノ酒類

一ウ イ ス キ ー

一櫻 酒

一リ キ ウ ル

一燒酎及泡盛

第八 雜 貨

○五分稅 (從價)

一石炭及コークス

一家 根 板

一日本 常用器具
一襖、障 子

一疊

一砥 石

一摺 附 木

一靴其他履物及傘

一膳、椀、重箱、鏡臺、箆筒、盆及總テ木製器具

一石 灰

一砂 紙

一諸 石 鹼 類

一提 灯

一日本人建造房屋用竹木材

○八分稅 (從價)

一木材、竹材、石材

一皮、角、骨、牙、蹄、羽、毛類(エヲ經サルモノ)

一綿 英

一生絲、熨斗絲、屑絲

一羊毛其他獸毛

一運 貨 車 船

一綿子、菓子、麻子、亞麻子、胡麻子

一弗 箱

一食器用、磁器陶器類

一臥床、椅子、其他家具

一目 鏡

一扇及團扇類

一窓玻璃及玻璃片

○壹割稅 (從價)

一熟 皮 類

一煉化石及瓦

一藤 絲

一天 蠶 絲

一苧 麻

一金 剛 砂

一燈 心 械

一別項ニ掲載セサル一切ノ雜貨

一衣服、帽靴其他服飾品

一象牙及一角牙

一齒 磨

一洋燈及其部分

一馬具及馬車

- 一 諸玻璃器類 (別項ニ載セサルモノ)
- 一 紫檀、黑檀、テイクス木、黃楊木、鐵刀木及總テ堅硬木
- 一 旅櫃、提囊及佩袋類
- 一 樂器
- 一 鑛山使用ノ爆發物
- 壹割五分稅 (從價)
- 一 煙管及煙囊
- 一 毛、皮、狐、獾、獾、海狸、兔等ノ類
- 貳割稅 (從價)
- 一 蒔繪シタル漆器類
- 一 首飾品
- 貳割五分稅 (從價)
- 一 寫眞
- 一 籠甲細工類
- 一 彫刻物
- 三割稅 (從價)
- 一 煙花類
- 一 獵銃及其使用品
- 一 眞珠及寶石類
- 一 其他一切ノ遊戯品
- 第九 船舶
- 一 鏡類 (廓ノ有無ニ係ラス)
- 一 蝙蝠傘(絹製鐵幹)
- 一 寫眞器
- 一 鈕釦扣子類
- 一 袋物類
- 一 玩具
- 一 時辰鐘、及時辰表並其部分品類
- 一 花筒、置物其他室内裝飾品ニ屬スルモノ
- 一 繪畫(裱裝ノ有無ニ拘ラス)
- 一 玻璃珠
- 一 珊瑚珠
- 一 衝球象棋骨牌

一 蒸汽船 每噸 銅錢貳百五十文

一 風帆船 每噸 銅錢百貳拾五文

第十 免稅品

- 一 貨幣
- 一 旅客行李ノ具
- 一 新聞紙
- 一 書籍地圖海圖
- 一 修葺勸業ノ雛形類
- 一 醫術用器具
- 一 活字 (新古ノ別ナク)
- 一 船用具 (若シ不用ノ者ヲ陸上シテ競賣スル者ハ仍ホ定稅ヲ徵ス)
- 第十一 禁制品
- 一 鴉片 (藥用鴉片ヲ除ク)
- 一 淫猥私褻ノ畫圖肖像
- 一 軍器類 (凡ソ軍械ノ式樣及ヒ防身ノ物件ハ須ラケ領事官ニテ朝鮮官ノ准單ヲ收到シタル上方ニ進口ヲ准ス但出賣スルヲ准サス)
- 朝鮮國海關稅目
- 輸出ノ部
- 免稅
- 一 貨幣
- 一 旅客行李ノ具
- 一金銀地金及砂金
- 一金銀地金
- 一 貨物見本 (相當ノ額數)
- 一 廣告紙類
- 一 招牌
- 一 農具
- 一 尺度、衡量、寒暖計、晴雨儀、驗液器、針盤、其他學術用器具並其使用品
- 一 消防器具
- 一 偽藥

○五分 稅 (從價)

一別項ニ掲載セサル一切ノ輸出品

○壹割五分稅 (從價)

一紅

蔘

朝鮮ノ商民日本ニ輸入スルトキハ應ニ一割五分ノ稅ヲ納ムヘシ如シ日本ノ商民朝鮮政府ノ特許ヲ經テ私カニ輸出スル者アレハ查出沒收スヘシ

右證據トシテ兩國ノ全權大臣此ノ稅目ニ名ヲ記シ印ヲ蓋スルモノナリ

大日本國明治十六年七月二十五日

大朝鮮國開國四百九十二年六月二十二日

全權大臣辨理公使 竹添進一郎 印
全權大臣督辦交涉通商事務 閔 泳 穆 印

●韓國ノ開港開市地

九年十月
太告第百二十八號

從前朝鮮國貿易ノ儀ハ對馬國人民ニ限リ取引イタサセ候處本年三月第三十四號布告修好條規及今般第百二十七號布告修好條規附錄並貿易規則ノ趣旨ニ遵ヒ一般ノ人民同國釜山港へ渡航セント欲スル者ハ差許サレ候條「海外旅行免狀」又ハ「航海公證」ヲ使府縣廳又ハ其支廳ヨリ申受渡航可致候尤旅行先ヨリ急ニ渡航セント欲スル者ハ本人ヨリ其貫籍ヲ明白ニ書記シ旅行先地方ノ廳ニ願出許可ヲ受ヘク候」此旨布告候事
但釜山港ノ外開港ノ場所ハ追テ確定ノ上尙可布告事

十三年一月
太告第百二號

明治九年二月我國ト朝鮮國トノ間ニ取結ヒタル修好條規第五款ノ趣旨ニ遵ヒ兩國人民通商ノ爲メ朝鮮國ニ於テ開クヘキニテ開クヘキニ港ノ内威鏡道元山津ヲ明治十三年五月一日ヨリ開港相成候條此旨布告候事

但右期日ヨリ渡航ノ者ハ明治九年十月第百二十八號「第百二十九號」布告ノ通可相心得事

十五年十二月
太告第百三十號

明治九年二月朝鮮國ト取結ヒタル修好條規第五款ノ旨趣ニ從ヒ兩國人民通商ノ爲メ朝鮮國ニ於テ開クヘキニ港ノ内京畿道仁川開港相成候條明治十六年一月以後該港へ渡航通商スルヲ得ヘシ

但該地渡航ノ者ハ明治九年十月第百二十八號「第百二十九號」布告ニ從フヘシ
右布達候事

十八年五月
外告第百四號

今般朝鮮國政府ニ於テ同國漢城ヲ開市場ト相定候條本年三月十二日以後該場へ渡航通商スルヲ得ヘシ
右告示候事

三十一年六月
外告第百十一號

今般韓國政府ハ慶尙道馬山浦、全羅道群山浦、咸鏡道城津浦ヲ開港場ニ平安道平壤ヲ開市場ニ撰定シ其實施ノ期日ハ時宜ヲ見計ヒ相定ムルノ件裁可ヲ經タル旨外務大臣ヨリ通牒ニ接シタル旨在同國加藤辨理公使ヨリ申報アリタリ因テ右實施期日確定ノ上ハ前掲三港一市ニ於テ帝國臣民ハ他開港市場ニ於ケルト均シク通商貿易ニ從事スルコトヲ得ヘシ

三十二年三月
外告第百二號

韓國慶尙道馬山浦、全羅道群山浦、咸鏡道城津浦ノ開港及平安道平壤ノ開市ハ來ル五月一日ヨリ實施スヘキ旨同國政府ヨリ通知アリタリ

昨日韓國官報ヲ以テ本年四月一日ヨリ清津港ヲ外國通商港トシテ開放スル旨ノ勅令ヲ公布セラレタリ
右告示ス

●釜山港居留地借入約書 十年一月調印

相考ヲ爲ス事朝鮮國慶尙道東萊府ノ所管草梁項ノ一區ハ古來日本國官民ノ居留地トス其ノ幅員ハ圖ノ如シ圖
中舊稱東館區内ノ家屋赤色ヲ著スル者三宇ハ朝鮮國政府ノ構造ニ係ルナリ日本曆明治九年十二月十二日朝鮮
曆丙子年十月二十七日日本國管理官近藤眞鋤朝鮮國東萊府伯洪祐昌ト會同シ兩國委員議ニ議立スル所ノ修好
條規附錄第三款ノ旨趣ニ照遵シ自今地基租ヲ納ル歲ニ金五拾圓毎歲抄翌年租額ヲ完済スルヲ約ス家屋ハ則日
本曆明治十年一月三十日朝鮮曆丙子年十二月十七日再ヒ協議ヲ經テ舊稱裁判家ナル者ヲ除クノ外朝鮮國政府
所構ノ貳宇ヲ以テ日本國政府所構舊稱改船所及倉庫等六宇ト交換シ以テ兩國官民ノ用ニ充ツ嗣後當ニ朝鮮國
政府ニ屬スヘキ家屋七宇ハ黃色ニテ輪廓ヲナシ以テ其別ヲ昭ニス地基モ亦焉ニ屬ス但地基ハ米ヲ以テ之ヲ測ス其ノ他ノ地基
道路溝渠ハ悉皆日本國政府ノ保護修理ニ歸シ船艙ハ則朝鮮國政府之ヲ修補ス因テ併錄シ副ルニ地圖ヲ以テシ
互ニ鈐印シテ以テ他日ノ紛爭ヲ防クト是ノ如シ

大日本國明治十年一月三十日

大朝鮮國丙子年十二月十七日

管理官 近藤 眞鋤印
東萊府 伯洪 祐昌印

●元山津居留地地租取極書 十四年八月調印

相考ヲ爲ス事朝鮮國咸鏡道德源府管下元山港日本國人民ノ居留地基幅員ハ總テ日本曆明治十二年十月十日日
本國代理公使花房義實ヨリ朝鮮政府ニ所致ノ圖式ノ如シ元山津開港豫約第二款ニ居留地租仍其地從前之租額
更加除計算第三款所載兩政府經費以議定スト云フ然レトモ居留地ノ經營タル漸ヲ以テ之ヲ作スヘク而シテ豫
メ年月ヲ期シ難ケレハ加除計算ノ事ハ甚タ行ヒ易カラス故ニ今日本國總領事前田獻吉ハ朝鮮國德源府使金綺
秀ニ商議シテ互ニ其ノ便ヲ謀リ居留地租姑ク釜山港ノ例ニ依リ毎歲金五拾圓ヲ納ルヲ約シ但翌年ノ租額ハ前
年ノ末ニ完済ス若數年ノ後之ヲ改正セムト欲スルトキハ須ラク兩國協議ニ付スヘシ又居留地内道路橋梁ノ修
築等ハ德源府使ニ照會シテ未タ落成ニ至ラサル者ヲ除ク外其ノ漸ヲ以テ作スヘキモノハ則復タ朝鮮政府ノ經
費ヲ煩ハサス又居留地外長德山ノ北烽燈臺ノ下日本人墓地一區烽燈臺ノ下公道ヨリ南トス此ノ租額毎歲金壹圓ヲ納ルヲ約シ
但納租ノ期ハ前ニ同シ爲此立約鈐印シテ互ニ相交付シ以テ憑信ヲ昭カニス

日本曆明治十四年八月四日

朝鮮曆辛巳七月初十日

總領事 前田 獻吉印
德源府使 金 綺 秀印

●仁川港居留地借入約書 十六年九月調印

第一條

朝鮮國仁川港外國人居留地ニ於テ別紙圖面朱畫ノ部分ヲ特別ニ日本商民ノ住處ニ充テ以テ日本商民先著ノ報
酬ト爲ス若後來右居留地充塞スルニ至レハ朝鮮政府ハ更ニ居留地ヲ擴開スヘシ總テ外國人居留地内ハ何レノ
場處ヲ論セス日本商民隨意ニ居住スルヲ得

第二條

日本商民居留ノ地所ハ道路溝渠ヲ除キ朝鮮政府ハ圖面ニ定メタル所ノ宅地ノ區域ニ隨ヒ競貸法ヲ以テ日本人

ニ貸與ス可シ

第三條

總テノ居留地内ノ通路溝渠橋梁及ヒ海岸埋立石垣等ハ朝鮮政府ニテ設置スヘシ其ノ設置ノ方法ハ朝鮮監理官ヨリ日本領事官ト商議スヘシ埠頭ハ必ス圖面朱畫ノ所ニ築クヘシ居留地内巡捕等ノ費用ハ朝鮮監理官ト日本領事官ト共ニ商定ノ上ニテ借地主ヨリ納メシムヘシ

第四條

宅地稅ハ一箇年ニ「メートル」四方ニ付上等地即海沿ニ近キ第一條街道ノ地ヲ朝鮮銅錢四十文中等地即第二條街道ノ地ヲ三十文下等地即第三條街道ノ地ヲ二十文ト定メ毎年十二月十五日前金ニテ納ムヘシ但其ノ地稅全額ノ三分一ヲ朝鮮政府ニ納メ三分二ハ居留地積金ト爲シ朝鮮ノ監理役所ニ確實ノ方法ヲ以テ之ヲ預リ道路溝渠橋梁街燈等ノ修繕其ノ外居留地ニ關スル事業ノ費用ニ充ツ但右ノ積金ヲ使用スル時ハ監理官日本領事官ト商議ノ上取計フヘシ

第五條

宅地ノ競貸原價ハ「メートル」四方ニ付朝鮮錢二百五十文ト定ム其ノ競貸日期ハ日本領事官ニ知照シ五日前ヨリ廣告シ領事官立會ノ上ニテ之ヲ舉行スヘシ尤競貸ノ法ハ必ス高價ノ方ニ貸與スヘシ二人以上競争シテ出錢シ互ニ異論ヲ生スル時ハ更ニ改テ之ヲ競貸スヘシ但宅地競貸ノ原價四分一ハ朝鮮政府ヨリ居留地積金ノ内ニ相渡シ居留地修繕ノ費用ヲ補足スヘシ又競貸原價ヨリ競上ケタル代價モ其ノ半額ハ朝鮮政府ヨリ右積金ノ内ニ加付スヘシ

第六條

上條ノ通り積金ヲ取設クルニ因リ非常天災ノ爲メ破損スルヲ除クノ外道路溝渠橋梁街燈其ノ他居留地ニ係ル費用ハ朝鮮政府ニテ關係ナカルヘシ尤天災ノ爲メ朝鮮政府ノ出金ヲ要スヘキ場合ニ於テハ彼此協議ノ上其ノ金額ヲ定ムヘシ

第七條

競貸ノ節宅地ノ借主タル者ノ姓名ハ速ニ帳簿ニ記シ其ノ地價五分一ヲ内金トシテ即座ニ相納メ殘金ハ十日以内ニ皆納セシメ地券ヲ交付スヘシ但十日以内ニ皆納セサル者ハ破談ト爲スヘシ

第八條

宅地借主交付スル地券ハ左ノ雛形通りタルヘシ

地券

第幾號

四址東ハ某處ニ止リ界ト爲シ西南北モ一例ニ開明ス

住址

幾方「メートル」

右ノ地代トシテ銅錢幾百千文ヲ領取セリ因テ本監理朝鮮政府ニ代リ下文ノ方法ヲ以テ日本國商人姓名或ハ其承當人或ハ嗣續人ニ永代貸渡セリ

一 地稅ハ某年某月某日朝鮮政府ト日本國公使ト訂約シタル居留地約書第四條ニ遵ヒ「メートル」四方幾十文ノ例ヲ照シ毎年十二月十五日幾百千文ヲ前金ニテ完納シ遲延スルヲ得ス

一 若シ火災或ハ盜難ニ罹リ此ノ地券ヲ失フトキハ其ノ番號「メートル」ノ數ヲ詳記シ竝ニ右失フ所ノ地券再出スルトモ廢紙タル旨ヲ證明セシ願書ヲ日本領事官ノ手ヲ經テ監理官ニ差出スヘシ然ル時ハ其ノ越ヲ一箇月間廣告ノ上常例ノ手数料ヲ徵シ更ニ新地券ヲ下付スヘシ但廣告ニ係ル費用ハ願人ヨリ支辨スルモノトス

一 若納稅ノ期ヲ過キ完納セサル者アレハ監理官ヨリ日本領事官ニ移知シテ領事官之ヲ辨理ス
一 此ノ地券ハ二通ヲ製シ割印ヲ付シ一通ハ借地主ニ渡シ一通ハ朝鮮政府ノ控ト爲スヘシ
年 月 日 朝鮮國監理官 姓 名 印

第九條

地券ヲ交付スル時ハ手数料トシテ朝鮮政府ヨリ銅錢一千文ヲ徵スヘシ

朝鮮文ニ據ルニヨ
リ「」ニ字數ナリ

嗣後若此ノ約書中ノ條款ヲ更改シ又ハ増加シ或ハ特ニ居留地取締ノ方法ヲ設ケムト欲スルコトアラハ日本政府ト朝鮮政府ト同意ノ上互ニ委員ヲ命シ協議酌定セシムヘシ右彼此ノ委任大臣記名調印シテ確實ナルヲ證明スルモノナリ

大日本國明治十六年九月三十日

大朝鮮國開國四百九十二年八月三十日

全權大臣 辦理公使 竹添進一郎 印
全權大臣 督辦交涉通商事務 閔 泳 穆 印

仁川濟物浦各國居留地約書

十七年十一月調印
本書ハ英文ナリ

第一條

仁川濟物浦各國居留地ノ位置境界市街道路及地區ハ別紙圖面ニ表スル所ノ如シ但シ該圖面中各國居留地ハ紅色ヲ以テ之ヲ示ス朝鮮政府ハ此約書訂定ノ日ヨリ二個月内ニ於テ該居留地境界内ニ現存スル朝鮮家屋ヲ悉皆取拂ハシメ後來該境界内ニ朝鮮人民ノ家屋ヲ建築スルヲ許サ、ルヘシ

第二條

居留地ノ地區ヲ分ツテ四等ト爲ス
第一ハ清國居留地南方ノ地ニシテ朝鮮政府ヨリ埋立地均ヲ爲スヘキモノトスルソ此地ニ建築スル家屋ハ煉瓦又ハ石或ハ鐵ヲ以テ堅固ニ之ヲ造ルヘシ而シテ屋上ニハ必ラス瓦又ハ鐵ヲ用ユヘシ木造ノ建物又ハ草葺ノ家屋ヲ建築スルヲ許サス
第二ハ清國居留地北方ノ地ニシテ凡ソ此地ニ建築スル家屋ハ瓦葺ニテ其壁ニハ煉瓦又ハ石或ハ厚キ漆喰ヲ用

ユヘシ

第三ハ日本居留地ノ東ニ在ル地所トス

第四ハ山手ニ在ル地所トス

以上第二、第三、第四ノ地區ハ買主ニテ自費ヲ以テ地均ヲ爲スヘシ

第三條

海邊ノ堤岸及埠頭ハ朝鮮政府ノ費用ヲ以テ建造修理シ居留地ノ市街道路モ亦同政府ノ費用ヲ以テ開設スヘシ居留地内ノ地所ハ競賣ノ前ニ於テ朝鮮政府ヨリ界石ヲ建立スルカ又ハ其他ノ方法ニテ境界ヲ畫明スヘシ

第四條

道路溝渠ヲ修理シ街燈ヲ點燃シ街路ヲ洒掃シ巡查ヲ備設スル等ノ費用ハ居留地積立金ヲ以テ支辨スヘシ若シ積立金ニテ不足ナレハ更ニ居留地會ヨリ居留地内ノ地所及家屋ニ割付ケ其價格ニ應シテ該金額ヲ徵收スヘシ

第五條

凡ソ居留地内ノ地所ヲ賣渡スニハ當該官吏ニテ七日ヨリ少ナカラサル廣告ヲ爲シタル上施行スヘシ該地所ノ競賣元價ハ第一地區ハ百平方「メートル」ニ付洋銀九十六弗第二地區及第三地區ハ百平方「メートル」ニ付六弗第四地區ハ百平方「メートル」ニ付三弗トス該地所ノ年稅ハ百平方「メートル」ニ付第一地區ハ洋銀二十弗第二地區及第三地區ハ六弗第四地區ハ二弗トス而シテ該年稅ノ内百平方「メートル」ニ付三十仙ハ朝鮮政府ニテ受領シ其殘額及競上代ハ居留地積立金ニ組入ルヘシ此約書ヲ認諾シタル條約國ノ人民ノ外ハ居留地ニ於テ地所ヲ買取り又ハ所有シ又ハ地券ヲ受取ルコトヲ許サス朝鮮政府ハ其官吏ノ公務所並ニ官宅ヲ建築スル爲メ其政府ノ名義ヲ以テ該居留地内ノ地所ヲ所有スルヲ得ヘシ但シ該地所ハ各國人民ノ買取りタル地所同様該居留地規則ニ從フヘシ而シテ其同等ノ地所同様ノ割合ヲ以テ居留地ノ費用ヲ支辨スヘシ

各國人民ニシテ地所ヲ買受ル者アレハ朝鮮政府ヨリ地券ヲ發行シ記簿ニ登錄シ其本國官吏ヲ經由シテ之ヲ買主ニ轉付スヘシ而シテ朝鮮官吏ハ該地券ノ副本ヲ留メ置クヘシ
地所ノ轉賣ハ轉賣主ノ本國官吏ノ前ニ於テ執行シ轉賣主ヨリ其本國官吏ニ届出テ該官吏ヨリ其賣買ノ趣ヲ朝鮮官吏ニ通知スヘシ
凡ソ買主及轉賣主ハ別紙地券ニ附載スル宣言文ニ記名スヘシ

第六條

居留地會ハ適當ノ官位ヲ有スル朝鮮地方官吏及該居留地内ニテ地所ヲ所有スル人民アル條約國ノ領事並ニ今後右ノ外國官吏ニテ議定スル方法ニ依リ各地主ヨリ選舉セラレタル地主三名ヨリ成立ツモノトス
居留地會ハ其職務及其役員役夫ノ職掌ヲ整理シ並左記ノ目的ヲ達スル爲メ規則ヲ制定スルノ權アルモノトス
酒店及客店等取締ノ方法ヲ制定シ免許鑑札ヲ發行シ其免許料ヲ課收スルコト
賭博店、鴉片店及妓店ヲ禁止スルコト
往來取締ノコト

居留地内雇用ノ舟、車、馬、人夫取締ノ方法ヲ制定シ免許鑑札ヲ下付スルコト

居留地内ニ於テ妨害物ヲ防止シ不安全又ハ易燃物ノ建築不正ノ營業並公眾ノ健康ヲ妨害スル營業ヲ防止スルコト

公路ノ障礙ヲ防止スルコト

公眾ノ健康及風儀ヲ維持スルコト

居留地會ニテ制定スル規則ニハ其違犯ニ對シ洋銀二十五弗ニ超ヘサル罰金ヲ設クルコトヲ得ヘシ而シテ其罰金ヲ科スルニハ都テ違犯者所屬國ノ官吏ニテ施行シ其罰金ハ一切居留地積立金ニ組入ルヘシ

第七條

居留地ノ全圖中第一地區トシテ畫明スル所ノ外ニ在ル地區ニシテ現在滿潮ノ時海水ヲ被ル處並ニ今後沙尾島

ヲ地均シテ生出スヘキ地區ハ俱ニ理地ト稱スヘシ此地區ハ第三地區ト同一ノ競賣元價ニシテ其埋立地均ハ將來議定スヘキ圖面ニ從ヒ買主ノ自費ヲ以テ施行スヘシ

第八條

地券ハ此約書ニ添附スル雛形ニ據リ地所ノ買主ニ交附スヘシ

第九條

此約書ハ朝鮮官吏及各國當該官吏ノ同意ヲ以テ實驗上必要トスル所ノ改正修補ヲ加フルコトヲ得ヘシ

地券雛形

下文記名ノ本官ハ茲ニ洋銀若干弗ヲ領收セリ依テ朝鮮政府ノ代トシテ某處ノ地所即チ各國居留地ノ公用圖面中第何號地ト稱スル地所若干平方メートルヲ左ノ條款ニ準據シ何某及其相續人或ハ引受人ニ永代所有セシム

第一條

右何某及其相續人或ハ引受人ハ毎年某月某日洋銀若干弗ヲ地稅トシテ濟物浦ニ在ル朝鮮地方官ニ前納スヘシ

第二條

右何某及其相續人或ハ引受人ハ濟物浦各國居留地會ニテ該居留地ノ公費ノ爲メ賦課スル所ノ金額ヲ同會ニ納付スヘシ

第三條

右地所ノ轉賣ハ條約國ノ人民ニ限り之ヲ受ルヲ得而シテ轉賣主ノ本國當該官吏ノ前ニ於テ執行シ轉賣主ヨリ其本國當該官吏ニ届出ヘシ

第四條

右何某ハ拾八箇月内ニ於テ此地所ニ家屋ヲ建テ又ハ手入ヲ加フヘシ其代價ハ洋銀若干弗(第一地區ハ千弗第二地區ハ五百弗第三地區ハ二百五十弗トス)ヨリ少ナカラサルヘシ而シテ此地所ニ建テタル家屋ハ濟物浦各

國居留地約書第二項中載明スル所ニ從フヘシ

第五條

此地券ノ所有主若シ此各條ノ趣旨ヲ履行スルノ準備ヲ爲サスシテ朝鮮ヨリ立去リタル場合ニハ朝鮮官吏ハ年
稅及賦課金等一箇年以上怠納ノ後此地面ヲ收回シテ廣告ノ上競賣ニ付シ其代價ヲ以テ年稅及諸賦課金並競賣
ノ費用ヲ償還シ殘金ハ怠納者ノ本國官吏ニ交付スヘシ

第六條

(本條ハ埋地ニ關スル場合ニ限リ挿入スヘキモノナリ)
朝鮮政府ハ居留地ヲ擴張スル爲メ此地所ノ前面ヲ埋立ルノ權ヲ有ス此地券ハ二通ヲ制シ一通ハ買主ニ渡シ一
通ハ朝鮮地方官ニテ留メ置クヘシ

年 月 日

朝鮮國官名姓名

右地所ノ所有ヲ得タルニ付テハ右何某ハ此地券ノ各條ヲ履行スヘシ且又濟物浦各國居留地諸規則ヲ遵行シ若
シ違犯スル時キハ其都度洋銀二十五弗ニ超ヘサル罰金ヲ拂フヘシ此旨承諾スル者也

買主記名

右地所ノ轉買主何某ハ此地券ノ各條ヲ履行スヘシ且又濟物浦各國居留地諸規則ヲ遵行シ若シ違犯スル時ハ其
都度洋銀二十五弗ニ超ヘサル罰金ヲ拂フヘシ此旨承諾スル者也

轉買主記名

署理督辦交涉通商事務

金 宏 集 (手署)

亞米利加合衆國特命全權公使

ニル、ニツチ、フート (手署)

大不列顛國特命全權公使

エツチ、エス、パークス (手署)

清國欽命駐朝鮮總理交涉通商事宜

袁 世 凱 (手署)

日本帝國欽差辦理公使

竹 添 進 一 郎 (手署)

●絕影島地所借入約書

明治十九年一月調印

今般日本政府ニ於テ海軍用石炭ヲ儲藏スルノ倉庫ヲ建設スル爲メ朝鮮慶尙道絕影島中黑石炭ト稱スル所ノ地
所四千九百坪^{ニメ}ハ^{ニメ}毎方^{ニメ}ヲ借受タリ其ノ地租ハ毎年銀貨貳拾圓ト定メ以テ朝鮮政府ヘ拂入ルヘシ即換約ノ
日ヨリ起算シ毎年陽曆十二月十五日限リ明年ノ地租ヲ日本公使館ヨリ統理衙門ヘ前納スヘシ因テ茲ニ約書ヲ
訂立シ地圖ヲ添付シ以テ憑信ヲ昭ニスルモノナリ

大日本明治十九年一月三十一日

臨時代理公使 高平小五郎印

大朝鮮乙酉十二月二十七日

督辦交涉通商事務 金 允 植 印

●月尾島地所借入約書

明治二十四年一月調印

今般日本政府ハ海軍用石炭ヲ儲藏スルノ倉庫ヲ建設スル爲メ朝鮮國京畿道月尾島ニ於テ地所四千九百坪^{ニメ}ハ^{ニメ}毎
方^{ニメ}ヲ借受タリ其ノ地租ハ毎年銀貨八拾圓ト定メ朝鮮政府ヘ拂入ル者トス即換約ノ日ヨリ起算シ毎年陽曆
十二月十五日ヲ以テ明年ノ地租ヲ日本公使館ヨリ統理衙門ヘ前納スヘシ因テ茲ニ約書ヲ訂立シ地圖ヲ添付シ
以テ憑信ヲ昭ニスルモノナリ

大日本明治三十四年一月二十一日

代理公使 近藤 眞 鋤 印

大朝鮮開國四百九十九年十二月十二日

督辦交涉通商事務 閔 種 默 印

●鎮南浦及木浦居留地規則

三十年十一月
外告第十四號

明治三十年十月十六日韓國外部大臣ト同國駐劄各國使臣トノ間ニ鎮南浦及木浦居留地規則左ノ通協定セリ

鎮南浦及木浦居留地規則

居留地區域

第一條 鎮南浦(又ハ木浦)ニ於テ各國居留地トシテ區劃シタル地所ノ位置、區域及測度ハ別紙圖面ニ示ス

(別紙ハ略ス)

地所境界線ハ鎮南浦(又ハ木浦)各國租界ナル文字ヲ彫刻シタル境界石標ヲ以テ之ヲ示スヘシ右石標ハ境界線ノ兩端ニ於ケル滿潮點ニ各一箇ヲ置キ他ハ境界線ノ角度ヲ爲ス地點ニ置クヘシ

海壁及埠頭

海壁及埠頭ハ該港ノ爲メ必要アル時ニ方リ必要ナル場所ニ於テ韓國政府之ヲ建設シ且其費用ヲ以テ之ヲ維持修繕スヘシ右海壁及埠頭並ニ貨物ノ陸揚及取扱ノ爲メ埠頭ニ屬スル開放地ノ部分ハ稅關事項ニ限リ韓國政府ノ管轄ニ屬シ一切ノ課稅ヲ免ス但シ點燈及警察事務ハ居留地會之ヲ行フ

地區ノ種別

第二條 居留地ノ地區ハ分テテ左ノ三種トス

甲 村落、稻田若クハ滿潮點以上ニ埋立ヲ要セサル低地區

乙 山手地區

丙 埋立ヲ要スル海濱地區

地區ノ境界及面積

第三條 韓國政府ハ居留地會ト協議シ甲乙兩地區間ノ境界線ヲ設定シ石標又ハ其ノ他ノ方法ヲ以テ各地區ノ境界ヲ區劃シ猶又購買希望者ニ之ヲ賣却スル以前ニ於テ再ヒ該地區ノ面積ヲ測量スヘシ

地區ノ最大及最小制限左ノ如クナルヘシ

甲及丙地區

一千平方米突(凡ソ三百八坪)以下

五百平方米突(凡ソ百五十四坪)以上

乙地區

五千平方米突(凡ソ千五百四十坪)以下

一千平方米突(凡ソ三百八坪)以上

地區ノ賣却

第四條 別ニ後條ニ規定アルモノノ外各國居留地内ノ地區ハ競賣ヲ以テ最高入札者ヘ賣却スヘシ右競賣ハ韓國政府ニ於テ之カ爲メ任命シタル官吏之ヲ司掌ス該官吏(以下韓國官吏ト稱ス)ハ購買希望者ヨリ請求ヲ受ケタル後各國使臣及駐在領事並ニ居留地會ニ對シ賣買ノ日ヨリ少クトモ三十日以前ニ書面ヲ以テ其ノ豫告ヲ爲シ且居留地内公然注目シ易キ場所ニ於テ其旨ヲ揭示スヘシ

購買金ノ支拂

一地區ノ競賣終結シタルトキハ直チニ其ノ買受人ニ於テ賣價五分ノ一ヲ手附金トシテ競賣監督ノ韓國官吏ニ支拂ヒ同日ヨリ十日以内ニ其ノ殘額ヲ同官吏ニ支拂フヘシ該官吏ハ右金額領收ノ上韓國政府ニ代リ無料ニテ別記書式ノ通り賣却地區ニ對スル地券三通ヲ調製交付スヘキモノトス

若シ賣却ノ當日ヨリ十日以内ニ右ノ殘額ヲ前記官吏ニ支拂ハサルトキハ手附金ハ韓國政府之ヲ沒收シ賣買

ハ無効ニ歸スヘシ

二六四

原價及賣却代價ノ分配

第五條 甲地區ノ原價ハ一百平方米突ニ付銀貨六弗トシ乙地區ハ一百平方米突ニ付銀貨三弗トシ丙地區ハ一百平方米突ニ付銀貨五弗トス

居留地會ハ毎年第一回ノ會議ニ於テ如何ナル銀貨ヲ以テ其年度中ノ本位ト爲スヘキカヲ決定スルコトヲ得ル
右原價ノ全部ハ韓國政府ニ屬ス尤競賣ノ費用ハ其負擔タルヘシ而シテ競賣ニ由リ收得シタル剩餘額ハ居留地會ノ爲メ一時之ヲ保管シ該會成立ノ上ハ直チニ引渡スヘシ

地租ノ割合

第六條 甲及丙地區地租ハ一百平方米突ニ付一箇年六弗ノ割合ヲ以テ乙地區ノ地租ハ一百平方米突ニ付一箇年二弗ノ割合ヲ以テ其地主ヨリ居留地會ヘ納付スヘシ居留地會ハ右地租徵集受領ノ爲ニハ韓國政府ノ代理者タルノ權ヲ有シ而シテ地租ニ對スル同會ノ領收書ハ有效ナル解除證タルヘシ
地租ハ買受ノ當日ヨリ起算シテ納付スヘキモノトシ其第一回ニ於テハ買受ノ日ヨリ同年ノ末迄ノ分ヲ地券交付以前ニ納付シ總テ其以後ノ地租ハ毎年一月十日迄ニ其年度分ヲ前納スヘシ

地租息納ニ對スル處分

第七條 地租ヲ納付セサル地主ハ其ノ年度中居留地會議員選舉權及被選舉權其ノ他一切本規則ヲ以テ付與セラレタル權利ヲ行使スルコトヲ得ス

前條ノ規定ニ從ヒ毎年二月一日迄ニ地租ヲ納付セサルトキハ同年一月一日ヨリ起算シ一箇年一割二歩ノ割合ヲ以テ利息ヲ賦課スヘシ若シ同年十二月三十一日ニ至リ尙ホ地租及利子共ニ納付セサルトキハ居留地會ハ怠務者ニ對シ當該官廳ニ出訴スルノ職權及職務ヲ有ス而シテ裁判所ノ指定シタル期限内ニ納金セサルトキハ居留地會ハ當該官廳ニ對シ該地區沒收ノ請求ヲ爲シ若シ右請求ノ通り判決ノ宣告アリタルトキハ韓國官吏ハ右判決ノ日ヨリ二箇月以内ニ於テ本規則第四條ニ規定シタル手續ニ依リ三十日間ノ豫告ヲ以テ該地區ヲ競賣ニ付スヘシ而シテ當日迄ノ地租利子及競賣ノ費用並ニ舊地主ヨリ居留地會ニ納付スヘキ一切ノ罰金又ハ其他ノ金額ヲ引去リ尙ホ剩餘金アルトハ韓國官吏ハ右舊地主又ハ正當ノ代人若クハ繼承人ニ交付スヘシ

地租ノ分配

第八條 居留地會ハ何レノ地區ニテモ其地租ヲ領收シタル後一週間以内ニ同地區面積一百平方米突ニ付三十仙ノ割ニ當ル金額ヲ當該韓國官廳ニ拂渡シ其ノ殘額ハ之ヲ居留地會ノ收入トシ居留地經費中ニ繰込ムヘシ
地租息納ノ場合ニ於テハ其ノ取立利子ハ同上ノ割合ヲ以テ地租ト共ニ韓國官廳ニ拂渡スヘシ

韓國家屋ノ取拂

第九條 韓國政府ハ今後各國居留地ニ於テ韓國家屋ノ建設及韓國墓地ノ設置ハ之ヲ許可セサルヘシ何レノ地區タリトモ其ノ賣却ノ後若クハ居留地會ヨリ道路布設ノ企圖ヲ告示シタル後一箇月以内ニ於テ韓國政府ハ總テノ韓國家屋及墓地ヲ該地區若クハ該道路線ヨリ取拂ハシムヘシ但シ總テノ韓國家屋及墓地ハ本規則ノ日附後二箇年以内ニ各國居留地ノ區域ヨリ取拂ハシムヘシ

樹木

本規則ノ日附ヨリ以後ハ居留地會ノ同意ナクシテ未賣地區若クハ道路敷地ニ於ケル樹木ヲ伐採スルコトヲ得ス

官有地區

第十條 韓國政府ハ稅關ノ廳舍及倉庫並ニ稅關雇外國人ノ居宅ヲ建設スル爲メ居留地内ニ地所ヲ保留スルコトヲ得但シ右ノ地所ハ地租及諸稅ノ納付ニ關シテハ同種ナル他ノ地所ト同一ノ義務ヲ負擔スヘキモノトス
韓國官有汽船會社ハ本規則ニ從ヒ其ノ事務所及倉庫ヲ設立スル爲メ居留地内ニ地所ヲ收得及所有スルコトヲ得

條約國ノ政府ハ原價ノミヲ納付シ其ノ領事館敷地トシテ適當ナル地區ヲ收得スルコトヲ得但シ該地區ハ地

租及租稅ノ納付ニ關シテハ他ノ同種ナル地區ト同一ノ義務ヲ負擔スルモノトス
地主タルコトヲ得ヘキ者

第十一條 本規則ヲ承認シタル使臣所屬國ノ政府、臣民若クハ人民ノ外何人タリトモ各國居留地ニ於テ土地ヲ買受ケ若クハ所有シ又ハ其區域内ニ於ケル地區ニ對シ地券ノ交付ヲ受クルコトヲ得ス
地券交付手續

第十二條 地券ハ韓國政府ヲ代表スル韓國官吏ヨリ後段ニ表示シタル書式ニ從ヒ交付スヘキモノトス而シテ買受人ハ右三通ノ地券並ニ後段ニ記載シタル「誓約」ニ記名調印スヘシ右地券三通ノ内一通ハ韓國政府ニ保置シ一通ハ所轄領事館ヲ經テ買受人ニ交付シ一通ハ居留地會事務所ニ保存登記ス
買受人ノ地區買却

若シ地主ニシテ其ノ地區ヲ賣却シ若クハ讓渡ストキハ舊地券取消ノ爲メ之ヲ韓國官吏ニ返納スヘシ然ルトキハ制規ノ書式ヲ以テ更ニ三通ノ新地券ヲ調製交付スヘシ而シテ買受人若クハ讓受人ハ原地券ニ適用セラレタルト同一ノ條件ヲ以テ新地券ニ記名調印スヘシ但シ當時地租未納ノ地區若クハ其ノ一部ニ對シテハ新地券ヲ交付セス三通ノ新地券ハ原地券ノ場合ト同シク配付保存セララルヘシ讓受人ハ新地券ニ對シ五弗ノ手数料ヲ韓國官吏ニ納付スヘシ

地區分割

各地主ハ賣却又ハ其ノ他ノ目的ノ爲メ其ノ地區ヲ二箇若クハ其ノ以上ニ分割スルコトヲ得然ルトキハ其ノ全地區ニ對スル地券ヲ返納シ更ニ其ノ希望ニ隨ヒ分割シタル各部分ニ對スル各別ノ新地券ヲ受クヘシ但シ右部分ハ第三條ニ指定シタル最小制限ヲ下ルコトヲ得ス尤モ地主ニ於テ其ノ隣接ノ地主ニ賣却スルトキハ何程小部分タリトモ差支ナシ但シ此ノ場合ニ於テ若シ其ノ殘留シタル部分ニシテ五百平方米突ヲ下ルトキハ其ノ所有者ハ居留地會議員選舉權ナキモノトス總テ部分ノ地區ニ對スル地券ハ之ヲ調製交付スヘキモ舊全地區ニ對スル地券ニ適用スルト同一ノ條件ニ從ヒ之ニ記名調印スヘキモノトス地區ノ部分ニ對シ交付セ

ラレタル新地券ハ各三通毎ニ手数料五弗ヲ韓國官吏ニ納付スヘシ
分割シタル地區ノ部分ハ總テ公定地圖ニ記入シタル舊地區ノ番號ヲ保存スヘキモノトス但シ其ノ各部ハ文字ヲ附加シテ區別スヘシ例ヘハイ地區ノ部分ハイノ一、イノ二、イノ三、ト記スルカ如シ
分割シタル地區ニ對スル地券ノ所有者ハ地主トシテ登錄ヲ爲シ又分割セサル地區ノ登錄ヲ爲シタル者ト同一ノ權利及特典ヲ享有ス

強制改良

第十三條 買受人ハ全地區又ハ分割シタル地區ニ對スル地券ノ日附ヨリ二箇年以内ニ該地區ニ於テ二百五十弗以上ノ價格ヲ以テ家屋ヲ建設スルカ若クハ其ノ他ノ改良ヲ施スヘシ右家屋ハ總テ瓦、鐵製、「硬皮」其ノ他不燃質ノ屋根ヲ以テ掩フヘシ茅、板、其ノ他可燃質ノ屋根ヲ用ユルコトヲ許サス
若シ前記指定ノ期限内ニ規定ノ價格ヲ以テ家屋ヲ建設セス若クハ改良ヲ施ササルトキハ居留地會ハ怠務者ニ對シ第七條規定ノ通り處分ヲ爲スコトヲ得
但シ韓國政府ノ保留スル地區若クハ條約國政府ノ收得シタル地區ハ本條ノ規定ニ據ラサルモノトス

居留地會組織

第十四條 居留地會ハ左ノ議員ヲ以テ組織ス

- (第一) 監理使又ハ相當ノ位階ヲ有スル韓國官吏
 - (第二) 同地方駐在ノ領事
 - (第三) 登錄地主ノ選舉ニ係ル三名以下ノ議員
- 選舉ニ由ル議員ハ二名共ニ同國人タルヘカラス登錄地主ニ限リ被選權ヲ有スヘキ者トス但シ地主タリトモ地租賦課金及諸稅ヲ完納セサルトキハ被選人タルヲ得ス選舉ハ各國使臣ノ協定シタル規則ニ從ヒ毎年十二月ニ之ヲ執行スヘシ各地主ハ其ノ所有地區ノ多寡ニ拘ラス一箇ノ投票權ヲ有スルモノトス又代人ヲ以テ投票スルコトヲ許サス尤モ政府、法人若クハ商會ノ名義ヲ以テ地區ヲ所有スル場合ニハ其ノ政府、法人若ク

ハ商會ノ代理人タル權限ヲ有スル者ヲ以テ該地區ノ登録所有者ト見做シ本條ヲ適用ス

居留地會 (法人)

第十五條 第十四條ノ規定ニ依リ組織セラレタル居留地會ハ法人ニシテ一定ノ印鑑ヲ用ヒ鎮南浦(又ハ木浦)各國居留地會ナル團體ノ名義ヲ以テ契約ヲ爲シ及出訴シ又ハ應訴スルノ權ヲ有スルモノトス同會ニ對スル一切ノ訴訟ハ韓國外部大臣及京城駐在各國使臣ヲ以テ組織セラレタル法廷ニ於テ之ヲ開始執行スヘキモノトス而シテ該法廷ニ於テ各事件ニ對シ多數決ヲ以テ與ヘタル判決ハ終審トス
該法廷ハ裁判ニ必要ナル召喚狀及其ノ他ノ命令書ヲ發シ及之ヲ執行スヘキ官吏ヲ任命スルノ職權ヲ有ス且ツ居留地會ノ財産及基金ハ同法廷ノ判決ニ對シ其ノ責ニ任ス

居留地會ノ職權及職務

第十六條 居留地會ハ左ノ職權ヲ有ス

- 第一 役員ヲ選任シ及其ノ事務章程ヲ規定スル事
- 第二 使用人ヲ選任シ及其ノ職務ヲ定メ又ハ之ヲ解僱スル事
- 第三 居留地區域内ニ於テ道路ヲ敷設シ及特ニ禁止ナキ限リハ溝渠、橋梁、堤防及其ノ他公共ノ工事ヲ經營シ及之ヲ修繕スル事但シ地主ノ請求ニ依リ居留地會ニ於テ道路ノ既定勾配ヲ變更シタルトキハ牆壁ノ建設費及修繕費ハ關係地主ノ負擔タルヘシ
- 第四 第一條ニ指定シタル公定地圖ニ記標アルト否トヲ問ハス總テ居留地内ニ於ケル道路ニ就テハ韓國官吏ト協議ノ上且二箇月間ノ公示ヲ爲シタル後右道路ノ方向ヲ變更シ若クハ其ノ箇數、幅員若クハ勾配ヲ増減スル事但シ道路ノ幅員ハ八米突ヲ下ルコトヲ得ス而シテ關係地主ハ右二箇月ノ期限内ニ於テ第十五條ニ依リ構成セラレタル法廷ニ訴願スルノ權ヲ有ス
- 第五 相當ノ警察ヲ設置シ及之ヲ維持スル事
- 第六 居留地區域内ニ於テ總テ不法行爲ヲ爲ス者ヲ逮捕拘留シ及其ノ職權ヲ以テ之ヲ處罪スルノ手續ヲ爲ス

ス事

- 第七 公道ノ點燈、掃除及障害物除去ニ付方法ヲ設クル事
 - 第八 公共ノ井戸及水道工事ヲ經營スル事
 - 第九 居留地内ニ於ケル諸種ノ遊樂場及貸車所有者並ニ居留地内ニ開業シ若クハ定期ニ來往スル行商者及橋夫ニ對シ取締規則ヲ設定シ及必要ト認ムルトキハ手数料ヲ徵收シ若クハ之ヲ徵收セスシテ營業免狀ヲ交付スル事
 - 第十 居留地區域内ニ於テ公共ノ衛生及風紀ヲ維持シ賭博場及醜業ヲ禁止シ並ニ不正營業ヨリ起ルヘキ總テノ害惡ヲ豫防禁止シ且阿片吸煙場ノ設置ヲ嚴禁スル事
 - 第十一 危險可燃質若クハ衛生ニ適セサル家屋ヲ建設シ及之ニ住居スルコトヲ禁止シ且消防部ヲ設備維持スル事
 - 第十二 居留地會ニ必要ナル應舎ヲ建設シ及之ヲ修繕スル事
 - 第十三 必要ノ場合ニ於テハ韓國外部大臣ト協議シ各國使臣ノ同意ヲ得テ各國居留地ノ負擔タルヘキ公債ヲ起ス事
 - 第十四 特別事務處辨ノ爲メ登録地主ノ特別會ヲ召集スル事但シ此場合ニハ十四日間ノ豫告ヲ與ヘ且其ノ特別事務ノ要點ヲ召集告知書ニ記載スルヲ要ス
 - 第十五 居留地ノ地租ヲ徵收シ及之ニ對シ有效ナル領收書ヲ與フル爲メ韓國政府ノ代理者タルヘキ事
- 居留地會ハ茲ニ許與セラレタル職權ヲ執行スル爲メ通則及細則ヲ制定シ其ノ違反者ニ對シ二十五弗以下ノ罰金ヲ課スルコトヲ得右罰金ハ韓人タルト外國人タルトヲ問ハス犯罪者ノ所轄官廳之ヲ徵收シ居留地會財產中ニ拂込ムヘシ
- 居留地會ノ經營ニ係ル總テノ事業費及其ノ負擔トナルヘキ經費ハ居留地基金ヨリ支出スヘシ若シ右基金ニシテ不足ナルトキハ居留地會ハ各國居留地内ニ於ケル地區及家屋ニ對シ其ノ當時ノ時價ニ比例シ時々稅ヲ

賦課シ及之ヲ徵收スルコトヲ得但シ各曆年ニ於テ一種目以上ノ稅ヲ賦課セサルモノトス

地券ノ書式 (別記)

第十七條 地券及之ニ附屬スル「誓約」ノ書式ハ左ノ如シ

地券ノ書式

茲ニ領收シタル銀貨何弗ノ報償トシテ下名ハ韓國政府ヲ代表シ左記ノ條件ヲ以テ鎮南浦(又ハ木浦)各國居留地内ニ於テ其ノ公定地圖ニ何種第何號ト記載シ何平方米突ノ面積ヲ有スル地區ヲ何某、其ノ相續人又ハ讓受人ニ永代付與スルモノ也

第一 右何某、其ノ相續人及讓受人ハ毎年一月十日迄ニ同年度ノ地租トシテ銀貨何弗ノ金額ヲ韓國政府ヨリ之ヲ徵收スルノ權限ヲ委任セラレタル居留地會へ前納スヘキ事

第二 右何某、其ノ相續人及讓受人ハ居留地ノ公費ニ充ツル爲メ課稅ノ必要アリト認メラレタル金額ヲ其ノ都度鎮南浦(又ハ木浦)外國居留地會ニ納付スヘキ事

第三 前記地區ハ鎮南浦(又ハ木浦)外國居留地規則ヲ承認シタル使臣所屬國ノ臣民、人民若クハ被保護者ノ外人ニモ讓渡ササル事

第四 右何某、其ノ相續人及讓受人ハ本地區地券ノ日附ヨリ二箇年以内ニ銀貨二百五十弗以上ノ價格ヲ以テ該地區ニ家屋ヲ建設シ又ハ其他ノ改良ヲ爲スヘシ若シ此義務ヲ果ササルトキハ前記居留地規則第七條及第十三條ノ規定ニ據リ該地區ヲ韓國政府ニ明渡スヘキ事

第五 右規定ノ地租ニシテ前記ノ通り當年ノ最終日ヲ過クルモ尙ホ納付セラレサルトキハ韓國政府ハ本件ニ適用サルヘキ前記居留地規則第七條ノ規定ニ據リ該地所ノ所有權ヲ回收スルヲ得ヘキ事
何年何月何日鎮南浦(又ハ木浦)ニ於テ本書三通ヲ作ル一通ハ本書ヲ交付シタル韓國地方官之ヲ保留シ一通ハ買受人ニ交付シ尙ホ一通ハ居留地會事務所ニ保存登記ス

韓國官吏 姓 名 印

被付與者又ハ讓受人ノ誓約

前掲ノ地所ヲ付與セラレタル報償トシテ何某ハ茲ニ本地券記入ノ條件ヲ遵守スヘク且現在制定セラレ若クハ將來制定セララルヘキ鎮南浦(又ハ木浦)外國居留地規則及其ノ罰則ヲ遵守スルノ義務アルコトヲ承認ス

年 月 日 被付與者又ハ讓受人 姓 名 印
右木官ノ面前ニ於テ誓約セリ 被付與者又ハ讓受人 姓 名 印

規則修正

第十八條 本規則實施ノ上改正又ハ修補ノ必要生スルトキハ韓國官廳及相當外國使臣ノ協議ヲ以テ改正若クハ修補スルコトヲ得

● 群山、馬山浦、城津居留地規則 三十年十月

居留地區域

第一條 群山(又ハ馬山浦城津)ニ於テ各國居留地トシテ區劃シタル地所ノ位置、區域及測度ハ別紙圖面ニ示ス(別紙ハ略ス)

地所境界線ハ群山(又ハ馬山浦城津)各國租界ナル文字ヲ彫刻シタル境界石標ヲ以テ之ヲ示スヘシ右石標ハ境界線ノ兩端ニ於ケル滿潮點ニ各一箇ヲ置キ他ハ境界線ノ角度ヲ爲ス地點ニ置クヘシ

海壁及埠頭

海壁及埠頭ハ該港ノ爲メ必要アル時ニ方リ必要ナル場所ニ於テ韓國政府之ヲ建設シ且其ノ費用ヲ以テ之ヲ維持修繕スヘシ右海壁及埠頭並ニ貨物ノ陸揚及取扱ノ爲メ埠頭ニ屬スル開放地ノ部分ハ稅關事項ニ限リ韓國政府ノ管轄ニ屬シ一切ノ課稅ヲ免ス但シ點燈及警察事務ハ居留地會之ヲ行フ

地區ノ種別

第二條 居留地ノ地區ハ分チテ左ノ三種トス

甲 村落、稻田若クハ滿潮點以上ニ埋立ヲ要セサル低地區

乙 山手地區

丙 埋立ヲ要スル海濱地區

地區ノ境界及面積

第三條 韓國政府ハ居留地會ト協議シ甲乙兩地區間ノ境界線ヲ設定シ石標又ハ其ノ他ノ方法ヲ以テ各地區ノ境界ヲ區劃シ猶又購買希望者ニ之ヲ賣却スル以前ニ於テ再ヒ該地區ノ面積ヲ測量スヘシ
地區ノ最大及最小制限左ノ如クナルヘシ

甲及丙地區

一千平方米突(凡ソ三百八坪)以下

五百平方米突(凡ソ百五十四坪)以上

乙地區

五千平方米突(凡ソ千五百四十坪)以下

一千平方米突(凡ソ三百八坪)以上

地區ノ賣却

第四條 別ニ後條ニ規定アルモノノ外各國居留地内ノ地區ハ競賣ヲ以テ最高入札者へ賣却スヘシ

右競賣ハ韓國政府ニ於テ之カ爲メ任命シタル官吏之ヲ司掌ス該官吏(以下韓國官吏ト稱ス)ハ購買希望者ヨリ請求ヲ受ケタル後各國使臣及駐在領事並ニ居留地會ニ對シ賣買ノ日ヨリ少クトモ三十日以前ニ書面ヲ以テ其ノ豫告ヲ爲シ且居留地内公然注目シ易キ場所ニ於テ其旨ヲ揭示スヘシ

購買金ノ支拂

一 地區ノ競賣終結シタルトキハ直チニ其ノ買受人ニ於テ賣價五分ノ一ヲ手附金トシテ競賣監督ノ韓國官吏ニ支拂ヒ同日ヨリ十日以内ニ其殘額ヲ同官吏ニ支拂フヘシ該官吏ハ右金額領收ノ上韓國政府ニ代リ無料ニテ別記書式ノ通り賣却地區ニ對スル地券三通ヲ調製交付スヘキモノトス

若シ賣却ノ當日ヨリ十日以内ニ右ノ殘額ヲ前記官吏ニ支拂ハサルトキハ手附金ハ韓國政府之ヲ沒收シ賣買ハ無効ニ歸スヘシ

原價及賣却代價ノ分配

第五條 甲地區ノ原價ハ一百平方米突ニ付銀貨六弗トシ乙地區ハ一百平方米突ニ付銀貨三弗トシ丙地區ハ一百平方米突ニ付銀貨五弗トス

居留地會ハ毎年第一回ノ會議ニ於テ如何ナル銀貨ヲ以テ其ノ年度中ノ本位ト爲スヘキカヲ決定スルコトヲ得

右原價ノ全部ハ韓國政府ニ屬ス尤競賣ノ費用ハ其ノ負擔タルヘシ而シテ競賣ニ由リ收得シタル剩餘額ハ居留地會ノ爲メ一時之ヲ保管シ該會成立ノ上ハ直チニ引渡スヘシ

地租ノ割合

第六條 甲及丙地區地租ハ一百平方米突ニ付一箇年六弗ノ割合ヲ以テ乙地區ノ地租ハ一百平方米突ニ付一箇年二弗ノ割合ヲ以テ其ノ地主ヨリ居留地會へ納付スヘシ居留地會ハ右地租徵集受領ノ爲メニハ韓國政府ノ代理者タルノ權ヲ有シ而シテ地租ニ對スル同會ノ領收書ハ有效ナル解除證タルヘシ

地租ハ買受ノ當日ヨリ起算シテ納付スヘキモノトシ其ノ第一回ニ於テハ買受ノ日ヨリ同年ノ末迄ノ分ヲ地券交付以前ニ納付シ總テ其ノ以後ノ地租ハ毎年一月十日迄ニ其ノ年度分ヲ前納スヘシ

地租息納ニ對スル處分

第七條 地租ヲ納付セサル地主ハ其ノ年度中居留地會議員選舉權及被選舉權其ノ他一切本規則ヲ以テ付與セラシタル權利ヲ行使スルコトヲ得ス

前條ノ規定ニ從ヒ毎年二月一日迄ニ地租ヲ納付セサルトキハ同年一月一日ヨリ起算シ一箇年一割二分ノ割合ヲ以テ利息ヲ賦課スヘシ若シ同年十二月三十一日ニ至リ尙ホ地租及利子共ニ納付セサルトキハ居留地會ハ怠務者ニ對シ當該官廳ニ出訴スルノ職權及職務ヲ有ス而シテ裁判所ノ指定シタル期限内ニ納金セサルトキハ居留地會ハ當該官廳ニ對シ該地區沒收ノ請求ヲ爲シ若シ右請求ノ通り判決ノ宣告アリタルトキハ韓國官吏ハ右判決ノ自ヨリ二箇月以内ニ於テ本規則第四條ニ規定シタル手續ニ依リ三十日間ノ豫告ヲ以テ該地區ヲ競賣ニ付スヘシ而シテ當日迄ノ地租利子及競賣ノ費用並ニ舊地主ヨリ居留地會ニ納付スヘキ一切ノ罰金又ハ其他ノ金額ヲ引去リ尙ホ剩餘金アルトキハ韓國官吏ヲ右舊地主又ハ正當ノ代人若クハ繼承人ニ交付スヘシ

地租ノ分配

第八條 居留地會ハ何レノ地區ニテモ其ノ地租ヲ領收シタル後一週間以内ニ同地區面積一百平方米突ニ付三十仙ノ割ニ當ル金額ヲ當該韓國官廳ニ拂渡シ其ノ殘額ハ之ヲ居留地會ノ收入トシ居留地經費中ニ繰込ムヘシ地租息納ノ場合ニ於テハ其ノ取立利子ハ同上ノ割合ヲ以テ地租ト共ニ韓國官廳ニ拂渡スヘシ

韓國家屋ノ取拂

第九條 韓國政府ハ今後各國居留地ニ於テ韓國家屋ノ建設及韓國墓地ノ設置ハ之ヲ許可セサルヘシ何レノ地區タリトモ其ノ賣却ノ後若クハ居留地會ヨリ道路布設ノ企圖ヲ告示シタル後一箇月以内ニ於テ韓國政府ハ總テノ韓國家屋及墓地ヲ該地區若クハ該道路線ヨリ取拂ハシムヘシ但シ總テノ韓國家屋及墓地ハ本規則ノ日附後二箇年以内ニ各國居留地ノ區域ヨリ取拂ハシムヘシ

樹木

本規則ノ日附ヨリ以後ハ居留地會ノ同意ナクシテ未賣地區若クハ道路敷地ニ於ケル樹木ヲ伐採スルコトヲ得ス

官有地區

第十條 韓國政府ハ稅關ノ廳舍及倉庫並ニ稅關雇外國人ノ住宅ヲ建設スル爲メ居留地内ニ地所ヲ保留スルコトヲ得但シ右ノ地所ハ地租及諸稅ノ納付ニ關シテハ同種ナル他ノ地所ト同一ノ義務ヲ負擔スヘキモノトス韓國官有汽船會社ハ本規則ニ從ヒ其ノ事務所及倉庫ヲ設立スル爲メ居留地内ニ地所ヲ收得及所有スルコトヲ得

條約國ノ政府ハ原價ノミヲ納付シ其ノ領事館敷地トシテ適當ナル地區ヲ收得スルコトヲ得其最大限ハ一萬五千方米突ニ過クルヲ得ス但シ該地區ハ地租及租稅ノ納付ニ關シテハ他ノ同種ナル地區ト同一ノ義務ヲ負擔スルモノトス

地主タルコトヲ得ヘキ者

第十一條 本規則ヲ承認シタル使臣所屬國ノ政府、臣民、人民若ハ被保護者ノ外何人タリトモ各國居留地ニ於テ土地ヲ買受ケ若クハ所有シ又ハ其區域内ニ於ケル地區ニ對シ地券ノ交付ヲ受クルコトヲ得ス

地券交付手續

第十二條 地券ハ韓國政府ヲ代表スル韓國官吏ヨリ後段ニ表示シタル書式ニ從ヒ交付スヘキモノトス而シテ買受人ハ右三通ノ地券並ニ後段ニ記載シタル「誓約」ニ記名調印スヘシ右地券三通ノ内一通ハ韓國政府ニ保留シ一通ハ所轄領事官ヲ經テ買受人ニ交付シ一通ハ居留地會事務所ニ保存登記ス

買受人ノ地區賣却

若シ地主ニシテ其ノ地區ヲ賣却シ若クハ讓渡ストキハ舊地券取消ノ爲メ之ヲ韓國官吏ニ返納スヘシ然ルトキハ制規ノ書式ヲ以テ更ニ三通ノ新地券ヲ調製交付スヘシ而シテ買受人若クハ讓受人ハ原地券ニ適用セラレタルト同一ノ條件ヲ以テ新地券ニ記名調印スヘシ但シ當時地租未納ノ地區若クハ其ノ一部ニ對シテハ新地券ヲ交付セズ三通ノ新地券ハ原地券ノ場合ト同シク配付保存ヒラルヘシ讓受人ハ新地券ニ對シ五弗ノ手数料ヲ韓國官吏ニ納付スヘシ

地區分割

各地主ハ賣却又ハ其ノ他ノ目的ノ爲メ其ノ地區ヲ二箇若クハ其ノ以上ニ分割スルコトヲ得然ルトキハ其ノ全地區ニ對スル地券ヲ返納シ更ニ其ノ希望ニ隨ヒ分割シタル各部分ニ對スル各別ノ新地券ヲ受クヘシ但シ右部分ハ第三條ニ指定シタル最小制限ヲ下ルコトヲ得ス尤モ地主ニ於テ其ノ鄰接ノ地主ニ賣却スルトキハ何程小部分タリトモ差支ナシ但シ此ノ場合ニ於テ若シ其ノ殘留シタル部分ニシテ五百平方米突ヲ下ルトキハ其ノ所有者ハ居留地會議員選舉權ナキモノトス總テ部分ノ地區ニ對スル地券ハ之ヲ調製交付スヘキモ舊全地區ニ對スル地券ニ適用スルト同一ノ條件ニ從ヒ之ニ記名調印スヘキモノトス地區ノ部分ニ對シ交付セラレタル新地券ハ各三通毎ニ手数料五弗ヲ韓國官吏ニ納付スヘシ

分割シタル地區ノ部分ハ總テ公定地圖ニ記入シタル舊地區ノ番號ヲ保存スヘキモノトス但シ其ノ各部ハ文字ヲ附加シテ區別スヘシ例ヘハイ地區ノ部分ハイノ一、イノ二、イノ三ト記スルカ如シ分割シタル地區ニ對スル地券ノ所有者ハ地主トシテ登錄ヲ爲シ又分割セサル地區ノ登錄ヲ爲シタル者ト同一ノ權利及特典ヲ享有ス

強制改良

第十三條 買受人ハ全地區又ハ分割シタル地區ニ對スル地券ノ日附ヨリ二箇年以内ニ該地區ニ於テ二百五十弗以上ノ價格ヲ以テ家屋ヲ建設スルカ若クハ其ノ他ノ改良ヲ施スヘシ右家屋ハ總テ瓦、鐵製、硬皮其ノ他不燃質ノ屋根ヲ以テ掩フヘシ茅、板其ノ他可燃質ノ屋根ヲ用ユルコトヲ許サス

若シ前記指定ノ期限内ニ規定ノ價格ヲ以テ家屋ヲ建設セス若クハ改良ヲ施ササルトキハ居留地會ハ怠務者ニ對シ第七條規定ノ通り處分ヲ爲スコトヲ得

但シ韓國政府ノ保留スル地區若クハ條約國政府ノ收得シタル地區ハ本條ノ規定ニ據ラサルモノトス

居留地會組織

第十四條 居留地會ハ左ノ議員ヲ以テ組織ス

(第一) 監理使又ハ相當ノ位階ヲ有スル韓國官吏

(第二) 同地方駐在ノ領事

(第三) 登錄地主ノ選舉ニ係ル三名以下ノ議員

選舉ニ由ル議員ハ二名共ニ同國人タルヘカラス登錄地主ニ限り被選舉權ヲ有スヘキ者トス但シ地主タリトモ地租賦課金及諸稅ヲ完納セサルトキハ被選人タルヲ得ス選舉ハ各國使臣ノ協定シタル規則ニ從ヒ毎年十二月ニ之ヲ執行スヘシ各地主ハ其ノ所有地區ノ多寡ニ拘ラス一箇ノ投票權ヲ有スルモノトス又代人ヲ以テ投票スルコトヲ許サス尤モ政府、法人若クハ商會ノ名義ヲ以テ地區ヲ所有スル場合ニハ其政府、法人若クハ商會ノ代理人タル權限ヲ有スルヲ以テ該地區ノ登錄所有者ト見做シ本條ヲ適用ス

居留地會(法人)

第十五條 第十四條ノ規定ニ依リ組織セラレタル居留地會ハ法人ニシテ一定ノ印鑑ヲ用ヒ群山(又ハ馬山浦城津)各國居留地會ナル團體ノ名義ヲ以テ契約ヲ爲シ及出訴シ又ハ應訴スルノ權ヲ有スルモノトス同會ニ對スル一切ノ訴訟ハ韓國外部大臣及京城駐在各國使臣ヲ以テ組織セラレタル法廷ニ於テ之ヲ開始執行スヘキモノトス而シテ該法廷ニ於テ各事件ニ對シ多數決ヲ以テ與ヘタル判決ハ終審トス

該法廷ハ裁判ニ必要ナル召喚狀及其ノ他ノ命令書ヲ發シ及之ヲ執行スヘキ官吏ヲ任命スルノ職權ヲ有ス且ツ居留地會ノ財產及基金ハ同法廷ノ判決ニ對シ其ノ責ニ任ス

居留地會ノ職權及職務

第十六條 居留地會ハ左ノ職權ヲ有ス

- 第一 役員ヲ選任シ及其ノ事務章程ヲ規定スル事
- 第二 使用人ヲ選任シ及其ノ職務ヲ定メ又ハ之ヲ解僱スル事
- 第三 居留地區域内ニ於テ道路ヲ敷設シ及特ニ禁止ナキ限リハ溝渠、橋梁、堤防及其ノ他公共ノ工事ヲ經營シ及之ヲ修繕スル事但シ地主ノ請求ニ依リ居留地會ニ於テ道路ノ既定勾配ヲ變更シタルトキハ牆壁ノ建設費及修繕費ハ關係地主ノ負擔タルヘシ

第四 第一條ニ指定シタル公定地圖ニ記標アルト否トヲ問ハス總テ居留地内ニ於ケル道路ニ就テハ韓國官吏ト協議ノ上且二箇月間ノ公示ヲ爲シタル後右道路ノ方向ヲ變更シ若クハ其ノ箇數、幅員若クハ勾配ヲ増減スル事但シ道路ノ幅員ハ八米突ヲ下ルコトヲ得ス而シテ關係地主ハ右二箇月ノ期限内ニ於テ第十五條ニ依リ構成セラレタル法廷ニ訴願スルノ權ヲ有ス

第五 相當ノ警察ヲ設置シ及之ヲ維持スル事

第六 居留地區域内ニ於テ總テ不法行爲ヲ爲ス者ヲ逮捕拘留シ及其ノ職權ヲ以テ之ヲ處罰スルノ手續ヲ爲ス事

第七 公道ノ點燈、掃除及障害物除去ニ付方法ヲ設クル事

第八 公共ノ井戸及水道工事ヲ經營スル事

第九 居留地内ニ於ケル諸種ノ遊樂場及貨車所有者並ニ居留地内ニ開業シ若クハ定期ニ來往スル行商者及轎夫ニ對シ取締規則ヲ設定シ及必要ト認ムルトキハ手数料ヲ徵收シ若クハ之ヲ徵收セスシテ營業免狀ヲ交付スル事

第十 居留地區域内ニ於テ公共ノ衛生及風紀ヲ維持シ賭博場及醜業ヲ禁止シ並ニ不正營業ヨリ起ルヘキ總テノ害惡ヲ豫防禁止シ且阿片吸煙場ノ設置ヲ嚴禁スル事

第十一 危險可燃質若クハ衛生ニ適セサル家屋ヲ建設シ及之ニ往居スルコトヲ禁止シ且消防部ヲ設備維持スル事

第十二 居留地會ニ必要ナル廳舎ヲ建設シ及之ヲ修繕スル事

第十三 必要ノ場合ニ於テハ韓國外部大臣ト協議シ各國使臣ノ同意ヲ得テ各國居留地ノ負擔タルヘキ公債ヲ起ス事

第十四 特別事務處辦ノ爲メ登録地主ノ特別會ヲ召集スル事但シ此場合ニハ十四日間ノ豫告ヲ與ヘ且其ノ特別事務ノ要點ヲ召集告知書ニ記載スルヲ要ス

第十五 居留地ノ地租ヲ徵收シ及之ニ對シ有效ナル領收書ヲ與フル爲メ韓國政府ノ代理者タルヘキ事

居留地會ハ茲ニ許與セラレタル職權ヲ執行スル爲メ通則及細則ヲ制定シ其ノ違反者ニ對シ二十五弗以下ノ罰金ヲ課スルコトヲ得右罰金ハ韓人タルト外國人タルトヲ問ハス犯則者ノ所轄官廳之ヲ徵收シ居留地會財產中ニ拂込ムヘシ

居留地會ノ經營ニ係ル總テノ事業費及其ノ負擔トナルヘキ經費ハ居留地基金ヨリ支出スヘシ若シ右基金ニシテ不足ナルトキハ居留地會ハ各國居留地内ニ於ケル地區及家屋ニ對シ其ノ當時ノ時價ニ比例シ時時稅ヲ賦課シ及之ヲ徵收スルコトヲ得但シ各曆年ニ於テ一種目以上ノ稅ヲ賦課セサルモノトス

地券ノ書式(別記)

第十七條 地券及之ニ附屬スル「誓約」ノ書式ハ左ノ如シ

地券ノ書式

茲ニ領收シタル銀貨何弗ノ報償トシテ下名ハ韓國政府ヲ代表シ左記ノ條件ヲ以テ群山(又ハ馬山浦城津)各國居留地内ニ於テ其ノ公定地圖ニ何種第何號ト記載シ何平方米突ノ面積ヲ有スル地區ヲ何某、其ノ相續人又ハ讓受人ニ永代付與スルモノ也

第一 右何某、其ノ相續人及讓受人ハ毎年一月十日迄ニ同年度ノ地租トシテ銀貨何弗ノ金額ヲ韓國政府ヨリ之ヲ徵收スルノ權限ヲ委任セラレタル居留地會ヘ前納スヘキ事

第二 右何某、其ノ相續人及讓受人ハ居留地ノ公費ニ充ツル爲メ課稅ノ必要アリト認メラレタル金額ヲ其ノ都度群山(又ハ馬山浦城津)外國居留地會ニ納付スヘキ事

第三 前記地區ハ群山(又ハ馬山浦城津)外國居留地規則ヲ承認シタル使臣所屬國ノ臣民、人民若クハ被保護者ノ外何人ニモ讓渡ササル事

第四 右何某、其ノ相續人及讓受人ハ本地區地券ノ日附ヨリ二箇年以内ニ銀貨二百五十弗以上ノ價格ヲ以テ該地區ニ家屋ヲ建設シ又ハ其他ノ改良ヲ爲スヘシ苦シ此義務ヲ果ササルトキハ前記居留地規則第七條

及第十三條ノ規定ニ據リ該地區ヲ韓國政府ニ明渡スヘキ事

第五 右規定ノ地租ニシテ前記ノ通り當年ノ最終日ヲ過クルモ尙ホ納付セラレサルトキハ韓國政府ハ本件ニ適用サルヘキ前記居留地規則第七條ノ規定ニ據リ該地所ノ所有權ヲ回收スルヲ得ヘキ事
何年何月何日群山(又ハ馬山浦城津)ニ於テ本書三通ヲ作ル一通ハ本書ヲ交付シタル韓國地方官之ヲ保留シ一通ハ買受人ニ交付シ尙ホ一通ハ居留地會事務所ニ保存登記ス

被付與者又ハ讓受人ノ誓約

韓國官吏 姓 名 印

前掲ノ地所ヲ付與セラレタル報償トシテ何某ハ茲ニ本地券記入ノ條件ヲ遵守スヘク且現在制定セラレ若クハ將來制定セラレヘキ群山(又ハ馬山浦城津)外國居留地規則及其ノ罰則ヲ遵守スルノ義務アルコトヲ承認ス

年 月 日

被付與者又ハ讓受人 姓 名 印

右本官ノ面前ニ於テ誓約セリ

規則修正

被付與者又ハ讓受人所轄領事 姓 名 印

第十八條 本規則實施ノ上改正又ハ修補ノ必要生スルトキハ韓國官廳及相當外國使臣ノ協議ヲ以テ改正若クハ修補スルコトヲ得

大韓光武三年六月二日

西曆千八百九十九年六月二日

韓國京城外部ニ於テ

大韓外部大臣 朴 齊 純
佛國代理公使 プ ラ ン シ ー

大不列顛國總領事 在韓清國人保護員

米國臨時代理公使 ジ ヨ ル ダ ン

露國代理公使 サ ン ズ

日本國臨時代理公使 ド ミ ト レ ス キ ー

獨逸帝國領事代理 日 置 益

●韓國漂難船處分方

十年十一月 太達第七十九號

改正 一一年 太達三六號

〔開拓使〕沿海府縣

明治九年十一月第十號ヲ以テ朝鮮國人民漂著ノ節處分方相達置候處漂難船處分ノ儀ハ左ノ通可相心得此旨相達候事

- 一 朝鮮國民本邦へ漂到ノ節其船桴ヲ修繕セントラ望ム者ハ地方官之ヲ聽スヘシ其費用ハ彼國政府ヨリ完済スヘキ定約相成候ニ付駐釜山日本管理官へ申送り之ヲ彼國東萊府ニ報告シ該府ヨリ之ヲ受取ルヘシ
- 一 若シ其船桴破損甚クシテ修繕スヘカラサル者ハ地方官其主ニ諭シテ之ヲ沽却セシメ其價錢ヲ給與スヘシ若シ其船桴價值ナキノミナラス人之ヲ買フコトヲ欲セサレハ船桴主ノ面前ニ於テ焚毀シ餘念ナカラシムヘシ
- 一 若シ我カ孤島ニ漂到シ其船桴ヲ修繕セント欲シテ工材ヲ得ス之ヲ他所ニ移サント欲スルモ風濤ノ爲メニ防礙セラル、時ハ地方官其主ニ諭シテ之ヲ沽却シ之ヲ拋棄セシムル等其時宜ニ因リ處分スヘシ
- 一 破損シテ修補シ難キ船桴ハ沽却或ハ焚毀ニ付シ漂民ヨリ苦情申立候トモ斷シテ送還ニ及ハサルヘシ
- 一 其破損未タ甚シカラサルノ船桴ハ漂民ノ願ニ應シ修補スヘシト雖モ先其費用概算ヲ示シ口供中ニ右修補ノ爲メ費ス所ハ歸國ノ後東萊府ニ辨納シ以テ日本官廳ニ報償スルノ意ヲ登記セシメ而テ後修補ヲ加ヘ送還スヘシ

但漂民字ヲ知ラサルトキハ口供ヲ和文ニ認メ捺印セシムヘシ

- 一 五島平戸壹岐對馬ヲ除クノ外朝鮮遠キ地方ヘ漂到シタルモノ其船桴完全ナルモ送還ヲ願フ時ハ先其運送費用ヲ示シ歸國ノ後東萊府ニ辨納シ日本官廳ニ報償スルノ意ヲ口供中ニ登記セシメ而ル後チ便宜之ヲ送還スヘシ

- 一 漂難ニ非ス一時風模様ニ依リ我地方ヘ寄來ル朝鮮船ハ其儘歸ルヲ許スヘシ若シ其修繕送還ヲ願フ者アレハ前條ニ照シ取計フヘシ

●韓國漂民經費償還法

二十年六月 勅令第二十一號

朕帝國ト朝鮮國トノ間ニ於ケル漂民經費償還法ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

- 一 帝國ト朝鮮國トノ間ニ於テ此國政府ニテ彼國漂民ヲ救護解送シ衣食ヲ給與シ傷病ヲ醫治シ屍身ヲ埋葬スルカ爲メニ出ス所ノ諸費用ハ彼國政府ヨリ實費ヲ計算シテ償還ス可シ
- 一 船隻ヲ救護シ貨物ヲ打撈スルノ費用ハ原主ヨリ償還シ相互ニ其政府ニ向テ請求スルヲ得ス

三十二年四月 內閣第六號

廳 府 縣

韓國人本邦ニ漂著シタル場合ニ於テ漂著地ヨリ便船アラサル時ハ長崎縣廳又ハ對馬島廳ニ送致スヘキ規定ノ處自今便宜ニ從ヒ大阪府廳兵庫縣廳山口縣赤間關警察署福岡縣門司警察署長崎縣廳及對馬島廳ノ内ヘ送致シ其地ヨリハ釜山港ニ發スル船舶ニ託シ送還スヘシ

●韓國漂民經費償還法中原主ニ屬スル償還手續

二十年八月 外令第二號

本年六月勅令第二十一號帝國ト朝鮮國トノ間ニ於ケル漂民經費償還法ノ內原主ニ屬スル償還手續ヲ定ムルコ

ト左ノ如シ

船隻ヲ救護シ貨物ヲ打撈スルノ費用ハ該船貨ヲ以テ原主ニ還附スル時原主ヨリ數ニ照シテ償還ス可シ若シ其時原主通貨ヲ所持セサレハ該船貨ヲ賣却シ其代價ヲ以テ之ヲ償還スルカ又ハ直ニ該船貨ヲ交付シテ償還ニ充ツヘシ但シ船貨交付ノ場合ニ於テ不足アルモ船貨悉皆ヲ交附スルニ止メ其餘ヲ追徵スルヲ得ス

●韓國海岸ニ於テ犯罪ノ日本國漁民取扱規則

十六年十月 大令第三十三號

朝鮮國海岸ニ於テ犯罪ノ日本國漁民取扱規則別紙ノ通協議決定ス 右布達候事

約定シタル朝鮮國海岸ニ於テ犯罪ノ日本國漁民取扱規則

第一條

朝鮮國ノ約定海岸ニ於テ日本國人朝鮮國ノ法禁ヲ犯シタルトキハ水陸共左ノ箇條ニ照ラシ取扱フヘシ

第二條

朝鮮國官吏ハ法禁ヲ犯セル日本國人ヲ取押ヘタルトキハ其罪證ヲ具録シ之ヲ添テ其日本人ヲ最寄開港場ノ日本領事官ヘ引渡シ相當ノ處分ヲ要求スヘシ日本領事官ハ速ニ其要求ニ應シ之ヲ審査シ照律處斷スヘシ但シ朝鮮國官吏取押ヘ又ハ護送ノ際苛虐ノ取扱ヲナスコト無ルヘシ

第三條

犯罪ト認ムヘキ日本人ヲ海陸孰レヨリ護送スルモ朝鮮官吏ノ勝手タルヘシ但シ成丈ケ速カニ護送シ事故ナクシテ徒ニ罪犯ヲ其地ニ淹留スヘカラス

第四條

朝鮮國ノ約定海岸ニ於テ罪ヲ犯セシト認ムル日本人ヲ海路ヨリ護送スルトキハ朝鮮官吏日本人ノ船舶ニ乘込或ハ別船ニ在リテ之ヲ引來ル俱ニ其便宜ニ任ス如シ陸路ヨリ護送スルトキハ其日本船ハ速テ引渡ス迄ノ間ハ

地方官ニテ之ヲ監守シ毀失セシムルコト無ルヘシ且其船具漁具其外運搬シ難キ物品ハ目錄ニ作リ罪犯ニ添テ之ヲ送付スヘシ

第五條

如シ薪水食糧ヲ得ルカ爲メ又ハ獲タル所ノ漁類ヲ賣買スル爲メ上陸シ陸上ニ於テ其犯罪同行中若干名ノミニ係ルトキハ其若干名ノミヲ此手續ニ依テ護送シ其他ハ之ヲ拘引スルコト無ルヘシ又海上ナレハ其罪犯ヲ除クノ外殘員猶航海ニ堪ルトキハ朝鮮官吏ハ其罪犯ノミヲ護送シ其他ハ之ヲ放還スヘシ

第六條

此規則ハ實行ノ上更ニ増損スヘキモノ有レハ雙方協議改正スルヲ得ヘシ
右確實ナルヲ證シ兩國ノ各委任大臣茲ニ記名調印スルモノ也

大日本國明治十六年七月二十五日

大朝鮮國開國四百九十二年六月二十二日

全權大臣 辨理公使 竹添進一郎 印
全權大臣 督辦交涉通商事務 閔 泳 穆 印

●韓國沿海及內河ノ航行ニ關スル約定書

三十八年八月

約定書

日韓兩國政府ハ韓國ノ産業ヲ發達シ貿易ヲ増進セシムル爲韓國ノ沿海及內河ニ日本國船舶ヲ航行セシムル必要ヲ認メ大日本帝國特命全權公使林權助及大韓帝國外部大臣李夏榮ハ各相當ノ委任ヲ受ケ左ノ約定ヲナス

第一條 日本國船舶ハ本約定ノ規定ニ從ヒ貿易ノ目的ヲ以テ韓國沿海及內河ヲ航行スルコトヲ得但シ開港場間ノ航行ハ本約定ニ依ルノ限ニ在ラス

第二條 沿海及內河ノ航行ニ從事セントスル日本國船舶ハ日本國領事官ヲ經由シ船舶所有者ノ氏名及住所船

船ノ名稱種類及載量並其航行區域ヲ韓國海關ニ届出テ鑑札ヲ受クヘシ
鑑札ハ之ヲ受ケタル日ヨリ壹箇年間ニ限リ效力ヲ有スルモノトス

第三條 日本國船舶ハ鑑札ヲ受クル都度左ノ金額ヲ韓國海關ニ納付スヘシ

- 百噸以下ノ西洋形船舶 拾 五 圓
- 日本形船舶 拾 五 圓
- 百噸以上五百噸以下ノ西洋形船舶 五 拾 圓
- 五百噸以上千噸以下ノ西洋形船舶 壹 百 圓
- 千噸以上ノ西洋形船舶 壹 百 五 拾 圓

第四條 日本國船舶ハ自由ニ其航行區域内ヲ航行スルコトヲ得但天災及事變ニ依ル場合及韓國海關ノ特許ヲ受ケタル場合ヲ除クノ外韓國領土外ノ地ニ赴クコトヲ得ス

第五條 日本國船舶ハ航行中必ス鑑札ヲ携帶シ韓國海關地方官又ハ地方官ノ委任シタル洞長或ハ村長ノ請求アルトキハ何時ニテモ之ヲ揭示スヘシ

第六條 日本國船舶所有者ハ船著場ニ於テ倉庫ヲ建築スル爲土地ヲ借用スルコトヲ得
又右所有者ハ韓國海關ノ認可ヲ受ケ沿岸ニ於テ埠頭ヲ築造スルコトヲ得

第七條 日本國船舶ニシテ本約定ニ違反シタルトキハ韓國海關ハ事實ヲ取調ヘ其情重キ者ニ對シ鑑札ヲ還付セシメ又ハ其下付ヲ拒ムコトヲ得

第八條 日本國船舶若ハ其乘組員ニシテ本約定其他ノ條約ノ規定ニ違反シ又ハ罪ヲ犯シタルトキハ日本國領事官ハ條約及日本國法ニ依リ之ヲ處分スルモノトス

第九條 本約定ノ有効期限ハ調印ノ日ヨリ起算シテ滿拾五箇年ト定メ期限滿了後ニハ商議協定スルコトヲ得
但シ將來韓國ノ航海業發達セハ兩國政府ハ右期限内ト雖モ協議ノ上更ニ約定スル處アルヘシ

明治三十八年八月十三日

光武九年八月十三日

特命全權公使 林 權 助 印

外部大臣 李 夏 榮 印

日韓議定書 三十七年 二月

議定書

大日本帝國皇帝陛下ノ特命全權公使林權助及大韓帝國皇帝陛下ノ外部大臣臨時署理陸軍參將李址銘ハ各相當ノ委任ヲ受ケ左ノ條款ヲ協定ス

第一條 日韓兩國間ニ恒久不易ノ親交ヲ保持シ東洋ノ平和ヲ確立スル爲大韓帝國政府ハ大日本帝國政府ヲ確信シ施政ノ改善ニ關シ其忠告ヲ容ルル事

第二條 大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ皇室ヲ確實ナル親誼ヲ以テ安全康寧ナラシムル事

第三條 大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ獨立及領土保全ヲ確實ニ保證スル事

第四條 第三國ノ侵害ニ依リ若ハ内亂ノ爲大韓帝國ノ皇室ノ安寧或ハ領土ノ保全ニ危險アル場合ハ大日本帝國政府ハ速ニ臨機必要ノ措置ヲ取ルヘシ而シテ大韓帝國政府ハ右大日本帝國政府ノ行動ヲ容易ナラシムル爲十分便宜ヲ與フル事

第五條 大日本帝國政府ハ前項ノ目的ヲ達スル爲軍路上必要ノ地點ヲ臨機收用スルコトヲ得ル事

第六條 兩國政府ハ相互ノ承認ヲ經スシテ後來本協約ノ趣意ニ違反スヘキ協約ヲ第三國トノ間ニ訂立スルコトヲ得サル事

第六條 本協約ニ關聯スル未悉ノ細條ハ大日本帝國代表者ト大韓帝國外部大臣トノ間ニ臨機協定スル事

特命全權公使 林 權 助 印

光武八年二月二十三日

外部大臣臨時署理陸軍參將 李 址 銘 印

韓國通信機關委託ニ關スル取極書 三十八年 四月

取極書

日韓兩國政府ハ韓國ノ通信機關ヲ整備シ日本國ノ通信機關ト合同聯絡シテ兩國共通ノ一組織ヲナスヲ以テ韓國ノ行政上並經濟上得策ナリトシ且之カ爲韓國ノ郵便電信電話事業ヲ日本國政府ノ管理ニ委託スル必要ヲ認メ大日本帝國特命全權公使林權助及大韓帝國外部大臣李夏榮ハ各相當ノ委任ヲ受ケ左ノ取極ヲナス

第一條 韓國政府ハ其國內ニ於ケル郵便電信及電話事業(宮内府專屬ノ電話ヲ除ク)ノ管理ヲ日本國政府ニ委託スヘシ

第二條 韓國政府ノ既設通信事業ニ關聯スル土地建物器具機械其他一切ノ設備ハ本協約ニ依リ日本國政府ノ保管ニ移ルモノトス

第三條 前項土地建物其他ノ設備ニ關シテハ兩國ノ官憲會同ノ上財産目錄ヲ調製シ以テ他日ノ證トスヘシ

第四條 韓國ノ通信機關擴張ノ爲日本國政府ニ於テ必要トスル場合ニハ國有ノ土地及建物ハ無償ニテ之ヲ使用シ及一私人ノ土地建物ハ之ヲ有償ニテ收用スルコトヲ得

第五條 通信機關ノ管理及財産ノ保管ニ關シテハ日本國政府ハ自己ノ計算ヲ以テ善良ナル管理人ノ責ニ任スヘシ

第六條 通信機關ノ擴張ニ要スル費用モ亦日本國政府ノ負擔タルヘシ

第七條 日本國政府ハ通信機關ノ管理ニ關スル財政狀況ヲ韓國政府ニ公示スヘシ

第八條 日本國政府カ通信機關ノ管理若ハ擴張上必要トスル設備並物件ハ一切ノ課稅ヲ免除セラルヘシ

第九條 日本國政府ノ管理權及業務擴張ニ抵觸セサル範圍ニ於テ現在ノ通信院ヲ存置スルハ韓國政府ノ任意

タルヘシ

二八八

日本國政府ハ管理及擴張ノ業務ニ關シ可成多クノ韓國官吏又ハ用人ヲ用ユヘシ

第七條 郵便電信及電話ニ關シ從前韓國政府カ外國政府ト協定シタル事項ニ付テハ日本國政府代テ其權利ヲ行使シ其義務ヲ履行スヘシ

通信機關ニ關シ將來新ニ韓國政府ト外國政府トノ間ニ協定ノ必要アル場合ニ於テハ日本國政府ハ韓國政府ニ代テ其協定ノ責ニ任スヘシ

第八條 日本國政府ト韓國政府トノ間ニ從來成立セル通信機關ニ關スル各種ノ協定ハ本協約ニ依リ當然改廢變更セラレタルモノトス

第九條 後來韓國通信事業發達ノ爲日本國政府カ既成設備ノ管理保管及新事業擴張ニ費シタル出費ニ對シテ分ノ收益ヲ生スルニ至ルトキハ日本國政府ハ收利ノ内相當ノ部分ヲ韓國政府ニ交付スヘシ

第十條 將來韓國政府ノ財政ニ十分ノ餘裕ヲ生シタル場合ハ兩國政府協議ノ上通信機關ノ管理ヲ韓國政府ニ還付スヘシ

明治三十八年四月一日

特命全權公使 林 權 助 印

光武九年四月一日

外部大臣 李 夏 榮 印

●日韓協約

三十七年 改正四〇年七月 八月 日韓協約

一 韓國政府ハ日本政府ノ推薦スル外國人一名ヲ外交顧問トシテ外部ニ備聘シ外交ニ關スル要務ハ總テ其意見ヲ詢ヒ施行スヘシ

一 韓國政府ハ外國トノ條約締結其他重要ナル外交案件即外國人ニ對スル特權讓與若ハ契約等ノ處理ニ關シテハ豫メ日本政府ト協議スヘシ

明治三十七年八月二十二日

特命全權公使 林 權 助 印

光武八年八月二十二日

外部大臣署理 尹 致 昊 印

●日韓協約

三十八年 十一月

日本國政府及韓國政府ハ兩帝國ヲ結合スル利害共通ノ主義ヲ鞏固ナラシメンコトヲ欲シ韓國ノ富強ノ實ヲ認ムル時ニ至ル迄此目的ヲ以テ左ノ條款ヲ約定セリ

第一條 日本國政府ハ在東京外務省ニ由リ今後韓國ノ外國ニ對スル關係及事務ヲ監理指揮スヘク日本國ノ外交代表者及領事ハ外國ニ於ケル韓國ノ臣民及利益ヲ保護スヘシ

第二條 日本國政府ハ韓國ト他國トノ間ニ現存スル條約ノ實行ヲ全フスルノ任ニ當リ韓國政府ハ今後日本國政府ノ仲介ニ由ラスシテ國際的性質ヲ有スル何等ノ條約若ハ約束ヲナササルコトヲ約ス

第三條 日本國政府ハ其代表者トシテ韓國皇帝陛下ノ閣下ニ一名ノ統監(レジデント、ゼネラル)ヲ置ク統監ハ專ラ外交ニ關スル事項ヲ管理スル爲京城ニ駐在シ親シク韓國皇帝陛下ニ内謁スルノ權利ヲ有ス日本國政府ハ又韓國ノ各開港場及其他日本國政府ノ必要ト認ムル地ニ理事官(レジデント)ヲ置クノ權利ヲ有ス理事官ハ統監ノ指揮ノ下ニ從來在韓國日本領事ニ屬シタル一切ノ職權ヲ執行シ並本協約ノ條款ヲ完全ニ實行スル爲必要トスヘキ一切ノ事務ヲ掌理スヘシ

第四條 日本國ト韓國トノ間ニ現存スル條約及約束ハ本協約ノ條款ニ牴觸セサル限總テ其效力ヲ繼續スルモノトス

第五條 日本國政府ハ韓國皇室ノ安寧ト尊嚴ヲ維持スルコトヲ保證ス

右證據トシテ下名ハ各本國政府ヨリ相當ノ委任ヲ受ケ本協約ニ記名調印スルモノナリ

明治三十八年十一月十七日

特命全權公使 林 權 助 印

光武九年十一月十七日

外部大臣 朴 齊 純 印

●日韓協約 七十四年

日本國政府及韓國政府ハ速ニ韓國ノ富強ヲ圖リ韓國民ノ幸福ヲ増進セムトスルノ目的ヲ以テ左ノ條款ヲ約定セリ

第一條

韓國政府ハ施政改善ニ關シ統監ノ指導ヲ受クルコト

第二條

韓國政府ノ法令ノ制定及重要ナル行政上ノ處分ハ豫メ統監ノ承認ヲ經ルコト

第三條

韓國ノ司法事務ハ普通行政事務ト之ヲ區別スルコト

第四條

韓國高等官吏ノ任免ハ統監ノ同意ヲ以テ之ヲ行フコト

第五條

韓國政府ハ統監ノ推薦スル日本人ヲ韓國官吏ニ任命スルコト

第六條

韓國政府ハ統監ノ同意ナクシテ外國人ヲ僱聘セサルコト

第七條

明治三十七年八月二十二日調印日韓協約第一項ハ之ヲ廢止スルコト

右證據トシテ下名ハ各本國政府ヨリ相當ノ委任ヲ受ケ本協約ニ記名調印スルモノナリ

明治四十年七月二十四日

統 監 侯爵 伊 藤 博文

光武十一年七月二十四日

內閣總理大臣勳二等 李 完 用

●森林經營ニ關スル協同約款 三十九年十月調印

鴨綠江及豆滿江森林ハ韓國々境ニ於ケル最豐沃ナル利源ト認メ日韓兩國政府ハ其ノ經營ニ付左ノ條款ヲ締結ス

第一條 鴨綠江及豆滿江森林ハ日本及韓國兩政府ノ協同經營ニ由ル可シ

第二條 兩國政府ハ經營資本ヲ壹百貳拾萬圓トシテ各自六拾萬圓ヲ出資ス

第三條 森林經營事業及收支計算ニ就テハ特別ナル會計ヲ立テ明瞭ニ爲スコト

該會計ハ毎年一回兩國政府ニ必ス報告スルコト

第四條 事業ノ損益ハ其ノ出資額ニ應シテ日韓兩政府間ニ分配ス

第五條 第二條ノ出資ヲ他日増加スルノ必要アルトキハ兩國政府ハ相互ノ承認ヲ經ルヲ要スルモノトス

第六條 本條約ノ施行ニ付尙細則ヲ設クルノ要アルトキハ兩國政府ノ命シタル委員之ヲ決定ス可シ

第七條 本事業ノ進行ニ從ヒ兩國人民ヲ加入スルコトヲ得セシムルカ爲會社組織トナス必要アル場合ニ

於テハ兩國政府ハ協定シテ其ノ方法ヲ定ムヘシ

明治三十九年十月十九日

二九二

光武十年十月十九日

大日本統監 侯爵 伊藤 博文 印

大韓議政府 參政大臣 朴 齊 純 印

同 度支部 大臣 閔 泳 綺 印

同 農商工部 大臣 權 重 顯 印

●在韓國帝國臣民ニ對スル警察事務ノ執行ニ關スル取極書

四十一年十一月 統告第百四十號

在韓國帝國臣民ニ對スル警察事務ノ執行ニ關シ統監府及韓國政府ハ左ノ取極ヲ爲シタリ

取極書

統監府及韓國政府ハ日本政府カ明治四十年七月二十四日締結日韓協約第五條ニ依リ任命セラレタル韓國警察官ヲシテ當該日本官憲ノ指揮監督ヲ受ケ在韓國日本臣民ニ對スル警察事務ヲ執行セシムルコトヲ約ス

明治四十年十月二十九日

統監 公爵 伊藤 博文

隆熙元年十月二十九日

內閣總理大臣 李 完 用

●在韓國外國人民ニ對スル警察事務ニ關スル日韓協定

四十二年四月 統告第三十號

在韓國外國人民ニ對スル警察事務ニ關シ明治四十二年三月十五日ヲ以テ統監府及韓國政府ニ於テ左ノ協定ヲ爲シタリ

在韓國外國人民ニ對スル警察事務ニ關シテハ韓國警察官ハ當該日本國官憲ノ指揮監督ヲ受クヘシ

●一時貸付金ニ關スル契約

四十一年三月 統印

大日本國政府及大韓國政府ハ兩國間ノ協約ニ基キ韓國施政改善ノ經費ニ充ツル爲左ノ年割及條件ニ依リ大日本國政府ヨリ大韓國政府ニ貸付金ヲ爲スノ件ニ關シ大日本國政府ハ統監公爵伊藤博文ヲ大韓國政府ハ度支部大臣高永喜ヲ各其ノ代表者ト爲シ左ノ契約ヲ締結ス

第一條 日本國政府ハ金壹千九百六拾八萬貳千六百貳拾參圓ヲ限リ左ノ年割ニ依リ韓國政府ニ貸付金ヲ爲スモノトス

一金壹百七拾六萬九千五百參圓 自明治四十年十月 至明治四十一年三月

一金五百貳拾五萬九千五百八拾圓 自明治四十二年四月 至明治四十二年三月

一金四百六拾五萬參千五百四拾圓 自明治四十三年四月 至明治四十三年三月

一金 四 百 萬 圓 自明治四十四年四月 至明治四十四年三月

一金 四 百 萬 圓 自明治四十五年四月 至明治四十五年三月

計金壹千九百六拾八萬貳千六百貳拾參圓

第二條 前條ノ貸付金ニハ利子ヲ附セサルモノトス

第三條 右貸付金ノ償還期限ハ特ニ之ヲ協定セサルモ韓國政府ハ可成速ニ財政ノ整理ヲ遂行シ該貸付金ヲ償還スルモノトス

右證據トシテ日韓兩國文ヲ以テ本契約書各二通ヲ作成シ兩國政府ノ代表者之ニ記名調印スルモノナリ

明治四十一年三月二十日

統監公爵 伊藤 博文 印

隆熙二年三月二十日

度支部大臣 高 永 喜 印

二九四

●韓國ニ於ケル發明、意匠、商標及著作權ノ保護ニ關スル日米條約

四十二年八月 條約第四號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ亞米利加合衆國華盛頓ニ於テ日米兩國全權委員ノ記名調印シタル韓國ニ於ケル發明
意匠、商標及著作權ノ保護ニ關スル日米條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

日本國皇帝陛下及亞米利加合衆國大統領ハ韓國ニ於テ其ノ臣民又ハ人民ノ發明、意匠、商標及著作權ノ保護ヲ
確保セムコトヲ欲シ之カ爲條約ヲ締結スルコトニ決シ日本國皇帝陛下ハ亞米利加合衆國駐劄特命全權大使正
三位勳一等男爵高平小五郎ヲ亞米利加合衆國大統領ハ其ノ國務大臣代理ロバート、ペーコンヲ各其ノ全權委
員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ左ノ諸條ヲ協議決定セリ

第一條

日本國政府ハ發明、意匠、商標及著作權ニ關シ現ニ日本國ニ行ハルルト同様ノ法令カ本條約ノ實施ト同時ニ韓
國ニ於テ施行セララルコトト爲スヘシ

右法令ハ韓國ニ於ケル米國人民ニ對シテモ日本國臣民及韓國臣民ニ對スルト同シク適用セララルヘキモノトス
前項ニ指示シタル日本國ノ現行法令カ今後改正セララルトキハ韓國ニ於テ施行セララル法令モ亦改正法令
ノ趣旨ニ依リ修正セララルヘシ

第二條

亞米利加合衆國政府ハ米國人民ニシテ韓國内ニ於テ保護ヲ受クヘキ特許發明、登錄意匠、登錄商標又ハ著作權
ヲ侵害シタルモノアリタル場合ニ右米國人民カ本件ニ關シ韓國ニ於ケル日本國裁判所ノ裁判管轄權ニ專屬ス
ヘキコトヲ約シ合衆國ノ治外法權ハ此ノ事ニ關シ之ヲ拋棄スルモノトス

第三條

亞米利加合衆國ノ所屬地ノ人民ハ本條約ノ適用上米國人民ト同一ノ取扱ヲ受クヘキモノトス

第四條

韓國臣民ニシテ合衆國ノ法令ニ定メタル手續ヲ履行スルトキハ同國內ニ於テ發明、意匠、商標及著作權ニ關
シ米國人民ト同一ノ保護ヲ享受スヘシ

第五條

第一條ニ依ル法令ノ施行以前米國人民カ日本國ニ於テ特許ヲ受ケタル發明又ハ登錄ヲ受ケタル意匠、商標若
ハ著作權ハ別段ノ手續ヲ要セス日本國臣民又ハ韓國臣民同様ニ特許又ハ登錄ヲ受ケタル工業所有權又ハ著作
權カ韓國内ニ於テ保護セララルト同一ノ保護ヲ本條約ニ依リ同國內ニ於テ享受スヘシ

締約國ノ一方ノ臣民若ハ人民又ハ韓國臣民カ本條約實施以前合衆國ニ於テ特許ヲ受ケタル發明又ハ登錄ヲ受
ケタル意匠、商標若ハ著作權ハ其ノ前記法令ノ規定ニ依リ特許又ハ登錄スヘカラサル性質ヲ有スルモノニ非
サル限り且本條約實施後一年内ニ特許又ハ登錄ヲ受クル場合ニ限り何等料金を要スルコトナク韓國ニ於テ特
許又ハ登錄セララルヘシ

第六條

日本國政府ハ商號ノ保護ニ付千八百八十三年三月二十日巴里ニ於テ調印セララル萬國工業所有權保護同盟
條約ニ依リ米國人民カ日本國ノ版圖内ニ於テ受クルト同一ノ取扱ヲ韓國内ニ於テ米國人民ニ付與スヘキコト
ヲ約ス

第七條

本條約ハ之ヲ批准シ其ノ批准書ハ成ルヘク速ニ東京ニ於テ交換セララルヘシ
本條約ハ批准書交換ノ日ヨリ十日ヲ經タル後實施セララルヘシ
右證據トシテ各全權委員ハ之ニ記名調印スルモノナリ

明治四十一年五月十九日即西曆千九百八年五月十九日華盛頓ニ於テ本書ニ通ラ作ル

二九六

高平 小五郎 印
ロバート、ベーン 印

●日韓兩國漁業協定

四十一年十一月
統告第百八十六號

日韓兩國臣民ノ漁業ニ關シ統監府及韓國政府ハ本年十月三十一日付ヲ以テ左ノ協定ヲ爲シ韓國漁業法施行ノ日ヨリ之ヲ實施ス

一 日本國臣民ハ韓國ノ沿海、江灣、河川及湖池ニ於テ韓國臣民ハ日本國ノ沿海、江灣、河川及湖池ニ於テ漁業ヲ營ムコトヲ得

二 兩國ノ一方ノ臣民ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ漁業ヲ營ム者ハ其ノ漁業ヲ營ム地ニ行ハルル漁業ニ關スル法規ヲ遵守スヘシ

三 韓國ニ於ケル漁業ニ關スル法規中司法裁判所ノ職權ニ屬スヘキ事項ハ日本國臣民ニ對シテハ當該日本官廳之ヲ執行ス

四 明治二十二年十一月十二日開國四百九十八年十月二十日調印日韓兩國通漁規則其ノ他兩國通漁ニ關スル協定ハ總テ之ヲ廢止ス

●韓國ノ司法及監獄事務ヲ日本政府ニ委託ノ件ニ關スル覺書

四十二年七月
統告第百六十六號

覺書

日本國政府及韓國政府ハ韓國司法及監獄事務ヲ改善シテ韓國臣民並ニ在韓國外國臣民及人民ノ生命財產ノ保護ヲ確實ニスルノ目的ト韓國財政ノ基礎ヲ鞏固ニスルノ目的ヲ以テ左ノ條款ヲ約定セリ

第一條 韓國ノ司法及監獄事務ノ完備シタルコトヲ認ムルトキ迄韓國政府ハ司法及監獄事務ヲ日本國政府ニ委託スルコト

第二條 日本國政府ハ一定ノ資格ヲ有スル日本人及韓國人ヲ在韓國日本裁判所及監獄ノ官吏ニ任用スルコト

第三條 在韓國日本裁判所ハ協約又ハ法令ニ特別ノ規定アルモノノ外韓國臣民ニ對シテハ韓國法規ヲ適用スルコト

第四條 韓國地方官廳及公吏ハ各其ノ職務ニ應シ司法及監獄ノ事務ニ付在韓國日本當該官廳ノ指揮命令ヲ受ケ又ハ其ノ補助ヲ爲スコト

第五條 日本國政府ハ韓國ノ司法及監獄ニ關スル一切ノ經費ヲ負擔スルコト
右各其ノ本國政府ノ委任ヲ承ケ覺書日韓文各二通ヲ作リ之ヲ交換シ後日ノ證トスル爲記名調印スルモノナリ

明治四十二年七月十二日

統 監子爵 曾 禰 荒 助

隆熙三年七月十二日

內閣總理大臣 李 完 用

●韓國中央銀行ニ關スル日韓兩國政府ノ覺書

四十二年八月
統告第百七十六號

韓國中央銀行ニ關スル覺書

日韓兩國政府ハ韓國銀行ノ設立ニ關シ左ノ條款ヲ協定ス

第一條 韓國政府ハ韓國銀行ヲ設立シ之ニ兌換銀行券ヲ發行スルノ權ヲ與ヘ韓國中央金融機關タルノ業務ニ從事セシムルノ外日本銀行ノ委託アルトキハ日本國庫金ノ取扱ヲ爲サシムヘシ

第二條 株式會社第一銀行ノ發行シタル銀行券ハ韓國銀行ノ發行シタルモノト看做シ韓國銀行ハ其ノ銷却ノ義務ヲ承繼スルモノトス

第三條 韓國銀行ノ株式ハ日韓兩國人ニ限リ之ヲ所有スルコトヲ得

第四條 韓國銀行ノ重役ハ當分ノ日本人ヲ以テ之ニ充ツヘシ

第五條 韓國銀行ハ韓國政府持株以外ノ株式ニ對シテ爲スヘキ利益配當カ年百分ノ六ノ割合ニ達スル迄ハ韓國政府持株ニ對シ利益配當ヲ爲スコトヲ要セス

第六條 韓國政府ハ韓國銀行ノ創立後五箇年間ハ同國政府持株以外ノ株式ニ對シ年百分ノ六ノ割合ノ利益配當ヲ保證スルモノトス

右覺書日韓文各二通ヲ作り之ヲ交換シ後日ノ證トスル爲記名調印ス

明治四十二年七月二十六日

統 監 子 爵 曾 福 荒 助

隆熙三年七月二十六日

内閣總理大臣 李 完 用

第二章 外國旅券

●外國旅券規則

四十年四月
統令第十六號

外國旅券規則左ノ通定ム

外國旅券規則

第一條 韓國ニ在ル帝國臣民及韓國臣民ニシテ外國ニ旅行スル者ニ下付スル旅券ハ統監之ヲ發給ス

第二條 旅券ノ下付ヲ請フ者ハ書面ニ左ノ事項ヲ記載シ之ニ戶籍謄本又ハ其ノ氏名、本籍地及身分ヲ證明ス

ヘキ文書ヲ添付シ理事廳又ハ(「理事廳支廳」)ニ出願スヘシ但シ理事官又ハ副理事官ノ認定ニ依リ戶籍謄本又ハ其ノ他ノ文書ノ添付ヲ省略セシムルコトヲ得

一 氏 名 (帝國臣民ニ在リテハ片假名ヲ以テ、韓國臣民ニ在リテハ片假名又ハ諺文ヲ以テ傍訓ヲ附スヘシ)

二 本 籍 地 (韓國臣民ニ在リテハ住所在地)

三 所 在 地

四 身 分 (戶主、家族ノ別、家族ナルトキハ戶主ノ氏名及戶主トシテ續柄ヲ記載スヘシ)

五 年 齡 (滿何年若ハ何年何月何日生)

六 職 業

七 旅行地名

八 旅行ノ目的

第三條 官命ニ依リ外國ニ旅行スル者ハ其ノ所管官廳ヲ經由シテ統監府ニ旅券ノ下付ヲ出願スルコトヲ得但

シ第二條第一號、第七號及第八號ノ事項ヲ開申スヘシ家族又ハ從者ヲ同行スルトキハ同行者ニ係ル第二條

第一號乃至第五號ノ事項ヲ併セテ開申スヘシ

第四條 移民保護法ノ規定ニ依リ移民取扱人ニ依ル移民又ハ保證人ヲ要スル移民ニシテ第二條ノ出願ヲナス

トキハ移民取扱人又ハ保證人ノ連署ヲ要ス

第五條 第二條ノ規定ニ依リ旅券ノ下付ヲ受ケタル者ハ一枚ニ付金一圓ニ相當スル收入印紙ヲ旅券領收證ニ貼付スヘシ

第六條 旅券ノ下付ヲ受ケタル者ハ其ノ券面ニ署名スヘシ若シ署名スルコト能ハサルトキハ代署セシメ本人之ニ實印ヲ押捺スヘシ但シ韓國臣民ニ在リテハ實印ノ押捺ヲ省略セシムルコトヲ得

旅券面ニ查證アルコトヲ必要トスル國ニ旅行スル者ハ其ノ定ムル所ニ依リ查證ヲ受クヘシ

第七條 清國在留禁止命令中ノ者ハ該國ニ旅行スル場合ニ限リ旅券ノ下付ヲ受ケタルコトヲ得ス

第八條 第二條ノ規定ニ依リ旅券ノ下付ヲ受ケタル後六箇月以内ニ出發セサル者ハ旅券ヲ返納スヘシ

第九條 旅行者歸國若ハ歸著シタルトキハ旅券ヲ返納スヘシ

旅券ノ下付ヲ受ケタル者死亡シタルトキハ其ノ遺族ヨリ之ヲ返納スヘシ

第十條 商業、漁業其ノ他ノ職業ノ爲特定ノ地ニ數次往復スル者ハ歸國又ハ歸著毎ニ其ノ旅券ヲ返納スルコトヲ要セス但シ旅券領收ノ日ヨリ三箇年ヲ過キテ歸國若ハ歸著シタルトキハ之ヲ返納スヘシ

前項特定ノ地ハ統監之ヲ告示ス

第十一條 旅券ノ下付ヲ受ケタル者第二條第一號乃至第四號、第七號及第八號ノ事項ニ變更ヲ生シタルトキハ直ニ旅券ヲ返納スヘシ

第十二條 旅券ヲ紛失シタルトキハ直ニ届出ツヘシ之ヲ發見シタルトキ亦同シ

第十三條 韓國ニ於テ旅券ノ返納又ハ其ノ紛失若ハ發見ノ届出ヲ受クヘキ官廳ハ統監府、理事廳及「理事廳支應」トス

第十四條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ其ノ旅券ヲ沒收シ二十五圓以下ノ罰金又ハ二十五日以下ノ重禁錮ニ處ス

一 第二條各號ノ事項ヲ詐稱シ又ハ第七條ノ事實ヲ申告セス其ノ他詐欺ノ所爲ヲ以テ旅券ノ下付ヲ受ケタル者及之ヲ幫助シタル者

二 他人ノ氏名ヲ記載シタル旅券ヲ使用シ又ハ之ヲ使用セシメ其ノ他不正ノ目的ヲ以テ旅券ヲ授受シタル者及之ヲ幫助シタル者

三 本令ニ依リ返納スヘキ旅券ヲ返納セスシテ使用シタル者

附 則
第十五條 舊規則ニ依リ旅券ノ下付ヲ受ケタル者ニ對スル第八條ノ期間ハ該旅券面ニ記載シタル下付ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第十六條 本令ハ明治四十年五月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十九年九月統監府令第三十四號韓國人外國旅券規則ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

●同一旅券ヲ以テ數次往復シ得ヘキ地 四十年五月 統監第六十五號

明治四十年四月統監府令第十六號外國旅券規則第十條ニ依リ同一旅券ヲ以テ數次往復シ得ヘキ地ヲ左ノ通定ム

一 清國盛京省、吉林省及黑龍江省

二 露領薩哈噠島、沿海州及黑龍州

●外國旅券規則取扱手續 四十年四月 改正 四二年 統監第六號

外國旅券規則ノ取扱手續左ノ通定ム

外國旅券規則取扱手續

第一條 外國旅券規則ニ依リ理事廳及「理事廳支應」ニ於テ下付スル旅券用紙ハ統監府ヨリ之ヲ配付ス

第二條 理事廳及「理事廳支應」ニ於テ外國旅券規則第二條ニ依リ旅券下付ノ願出ヲ受ケタルトキハ願書記

第五輯 外規 第二章 外國旅券

三〇一

(第二號書式)

白明治何年何月 至明治何年何月		外國旅券返納表 (何廳)	
旅券番號	氏名	身分	本籍地
			所在地
			年齡
			旅行地
			下付月日
			返納月日
合計何人			

(第三號書式)

外國旅券用紙受拂數 (自明治何年何月 至明治何年何月) 及現在數表 (何廳)				
旅券種類	券受番入號	券使番用號	券現番在號	現在數
普通	至自第第何何號號	至自第第何何號號	至自第第何何號號	何枚
	何枚	何枚	何枚	何枚
		使・用 下付不用數		

(雛形ハ之ヲ略ス)

●護照下付及查證心得

三十九年四月
統訓第六號

統監府理事廳

護照下付及查證心得左ノ通定ム

護照下付及查證心得

- 第一條 統監ハ帝國並外國ノ官吏ノ願出ニ依リ甲號雛形ノ護照ヲ下付ス
- 第二條 理事官ハ帝國臣民並外國人ノ願出ニ依リ乙號雛形ノ護照ヲ下付シ又外國領事ノ下付シタル護照ヲ查證ス
- 第三條 統監ノ下付スル護照ニ對シテハ手数料ヲ徵收セス
理事官ノ下付スル護照ニ對シテハ手数料トシテ金一圓ヲ徵收ス但シ外國人ニ下付スル場合ハ此限ニ在ラス

表 (甲)

第何號
統監府印
何國人氏名
右前往(旅行地名)等處遊歷爲此發給護照以便驗照放行無阻途中如遇緩急即請沿路各官加意照料善爲保佑
明治何年何月何日
統監府氏名

裏

(和譯)
(英譯)
(佛譯)

表 (乙)

第何號
何理事廳印
何國人氏名
右前往(旅行地名)等處(通商)爲此發給護照以便驗照放行無阻途中如遇緩急即請沿路各官加意照料善爲保佑
明治何年何月何日
何理事廳理事官氏名

裏

(和譯)
(英譯)
(佛譯)

甲 第何號

(和譯)

氏名

表

護照
右列に於て姓名、性別、生年月日、出生地、現居地、職業、教育程度、婚姻状況、家族構成、その他必要事項を記載する。

(英譯) (佛譯)

氏名

乙 第何號

(和譯)

氏名

表

護照
右列に於て姓名、性別、生年月日、出生地、現居地、職業、教育程度、婚姻状況、家族構成、その他必要事項を記載する。

(英譯) (佛譯)

氏名

第六輯會計

第六輯 會計

第一章 會計法

●會計法

二十二年二月
法律第四號

改正

三十五年法律四七號
四八號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ會計法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

會計法

第一章 總則

第一條 政府ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

一 會計年度所屬ノ歳入歳出ノ出納ニ關ル事務ハ翌年度十一月三十日マテニ悉皆完結スヘシ

第二條 租税及其他一切ノ收納ヲ歳入トシ一切ノ經費ヲ歳出トシ歳入歳出ハ總豫算ニ編入スヘシ

第三條 各年度ニ於テ決定シタル經費ノ定額ヲ以テ他ノ年度ニ屬スヘキ經費ニ充ツルコトヲ得ス

第四條 各官廳ニ於テハ法律勅令ヲ以テ規定シタルモノ、外特別ノ資金ヲ有スルコトヲ得ス

第二章 豫算

第五條 歳入歳出ノ總豫算ハ前年ノ帝國議會集會ノ始ニ於テ之ヲ提出スヘシ

必要避クヘカラサル經費及法律又ハ契約ニ基ク經費ニ不足ヲ生シタル場合ノ外追加豫算ヲ提出スルコトヲ得ス

第六條 歳入歳出ノ總豫算ハ之ヲ經常臨時ノ二部ニ大別シ各部中ニ於テ之ヲ款項ニ區分スヘシ

總豫算ニハ帝國議會參考ノ爲ニ左ノ文書ヲ添付スヘシ

第一 各省ノ豫定經費要求書但シ各項目ノ明細ヲ記入スヘシ

第二 其ノ年三月三十一日ニ終リタル會計年度ノ歳入歳出現計書

第七條 豫算中ニ設クヘキ豫備費ハ左ノ二項ニ分ツ

第一豫備金

第二豫備金

第一豫備金ハ避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フモノトス

第二豫備金ハ豫算外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツルモノトス

第八條 豫備金ヲ以テ支辨シタルモノハ年度經過後帝國議會ニ提出シ其ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

第九條 毎年度大藏省證券發行ノ最高額ハ帝國議會ノ協賛ヲ經テ之ヲ定ム

第三章 收入

第十條 租税及其ノ他ノ歳入ハ法律命令ノ規程ニ從ヒ之ヲ徵收スヘシ

法律命令ニ依リ當該官吏ノ資格アル者ニ非サレハ租税ヲ徵收シ又ハ其ノ他ノ歳入ヲ收納スルコトヲ得ス

第四章 支出

第十一條 毎會計年度ニ於テ政府ノ經費ニ充ツル所ノ定額ハ其ノ年度ノ歳入ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

第十二條 國務大臣ハ豫算ニ定メタル目的ノ外ニ定額ヲ使用シ又ハ各項ノ金額ヲ彼此流用スルコトヲ得ス

國務大臣ハ其ノ所管ニ屬スル收入ヲ國庫ニ納ムヘシ直ニ之ヲ使用スルコトヲ得ス

第十三條 國務大臣ハ其所管定額ヲ使用スル爲ニ國庫ニ向ヒテ仕拂命令ヲ發スヘシ但シ別ニ定ムル所ノ規程

ニ從ヒ他ノ官吏ニ委任シテ仕拂命令ヲ發セシムルコトヲ得

第十四條 國庫ハ法律命令ニ反スル仕拂命令ニ對シテ仕拂ヲ爲スコトヲ得ス

第十五條 國務大臣ハ政府ニ對シテ正當ナル債主若ハ其ノ代理人ノ爲ニスルニ非サレハ仕拂命令ヲ發スルコト

ヲ得ス

左ノ諸項ノ經費ニ限リ國務大臣ハ主任ノ官吏ニ委任シ又ハ政府ノ命シタル銀行ニ委任シテ現金支拂ヲ爲サ

シムル爲ニ現金前渡ノ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得

第一 國債ノ元利拂

第二 軍隊軍艦及官船ニ屬スル經費

第三 在外各廳ノ經費

第四 前項ノ外總テ外國ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費

第五 運輸通信ノ不便ナル内國ノ地方ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費

第六 廳中常用雜費ニシテ一箇年ノ總費額千圓ニ滿タサルモノ

第七 場所ノ一定セサル事務所ノ經費

第八 各廳ニ於テ直接ニ從事スル工事ノ經費但シ一主任官ニ付六千圓マテヲ限ル

第五章 決算

第十六條 會計検査院ノ検査ヲ經テ政府ヨリ帝國議會ニ提出スル總決算ハ總豫算ト同一ノ様式ヲ用キ左ノ事
項ノ計算ヲ明記スヘシ

歳入ノ部

歳入 豫算額

調定 歳入額

收入 濟歳入額

收入 未濟歳入額

歳出ノ部

歳出 豫算額

豫算決定後増加歳出額

仕拂命令濟歳出額

翌年度繰越額

第十七條 前條ノ總決算ニハ會計検査院ノ検査報告ト俱ニ左ノ文書ヲ添附スヘシ

第一 各省決算報告書

第二 國債計算書

第三 特別會計計算書

第六章 期滿免除

第十八條 政府ノ負債ニシテ其ノ仕拂フヘキ年度經過後滿五箇年内ニ債主ヨリ支出ノ請求若ハ仕拂ノ請求ヲ爲サ、ルモノハ期滿免除トシテ政府ハ其ノ義務ヲ免ル、モノトス但シ特別ノ法律ヲ以テ期滿免除ノ期限ヲ定メタルモノハ各々其ノ定ムル所ニ依ル

第十九條 政府ニ納ムヘキ金額ニシテ其ノ納ムヘキ年度經過後滿五箇年内ニ上納ノ告知ヲ受ケサルモノハ其ノ義務ヲ免ル、モノトス但シ特別ノ法律ヲ以テ期滿免除ノ期限ヲ定メタルモノハ各々其ノ定ムル所ニ依ル

第七章 歲計剩餘定額繰越豫算外收入及定額戻入

第二十條 各年度ニ於テ歲計ニ剩餘アルトキハ其ノ翌年度ノ歳入ニ繰入ルヘシ

第二十一條 豫算ニ於テ特ニ明許シタルモノ及一年度内ニ終ルヘキ工事又ハ製造ニシテ避クヘカラサル事故ノ爲ニ事業ヲ遅延シ年度内ニ其ノ經費ノ支出ヲ終ラサリシモノハ之ヲ翌年度ニ繰越シ使用スルコトヲ得

第二十二條 數年ヲ期シテ竣工スヘキ工事製造及其ノ他ノ事業ニシテ繼續費トシテ總額ヲ定メタルモノハ毎年度ノ仕拂殘額ヲ竣工年度マテ遞次繰越使用スルコトヲ得

第二十三條 誤拂過渡トナリタル金額ノ返納出納ノ完結シタル年度ニ屬スル收入及其ノ他一切豫算外ノ收入ハ總テ現年度ノ歳入ニ組入ルヘシ但シ法律勅令ニ依リ前金渡概算渡繰替拂ヲ爲シタル場合ニ於ケル返納金ハ各々之ヲ仕拂ヒタル經費ノ定額ニ戻入ルルコトヲ得

第八章 政府ノ工事及物件ノ賣買貸借

第二十四條 法律勅令ヲ以テ定メタル場合ノ外政府ノ工事又ハ物件ノ賣買貸借ハ總テ公告シテ競争ニ付スヘシ

但シ左ノ場合ニ於テハ競争ニ付セス隨意ノ約定ニ依ルコトヲ得ヘシ

第一 一人又ハ一會社ニテ専有スル物品ヲ買入レ又ハ借入ル、トキ

第二 政府ノ所爲ヲ秘密ニスヘキ場合ニ於テ命スル工事又ハ物品ノ賣買貸借ヲ爲ストキ

第三 非常急遽ノ際工事又ハ物品ノ買入借入ヲ爲スニ競争ニ付スル暇ナキトキ

第四 特種ノ物質又ハ特別使用ノ目的アルニ由リ生産製造ノ場所又ハ生産者製造者ヨリ直接ニ物品ノ買入ヲ要スルトキ

第五 特別ノ技術家ニ命スルニ非サレハ製造シ得ヘカラサル製造品及機械ヲ買入ル、トキ

第六 土地家屋ノ買入又ハ借入ヲ爲スニ當リ其ノ位置又ハ構造等ニ限アル場合

第七 千圓ヲ超エサル工事又ハ物品ノ買入借入ノ契約ヲ爲ストキ

第八 見積價格四百圓ヲ超エサル動産ヲ賣拂フトキ

第九 軍艦ヲ買入ル、トキ

第十 軍馬ヲ買入ル、トキ

第十一 試験ノ爲ニ工作製造ヲ命シ又ハ物品ヲ買入ル、トキ

第十二 慈善ノ爲ニ設立セル教育所ノ貧民ヲ備役シ及其ノ生産又ハ製造物品ヲ直接ニ買入ル、トキ

第十三 囚徒ヲ備役シ又ハ囚徒ノ製造物品ヲ直接ニ買入ル、トキ及政府ノ設立ニ係ル農工業場ヨリ直接ニ其ノ生産又ハ製造物品ヲ買入ル、トキ

第十四 政府ノ設立シタル農工業場又ハ慈善教育ニ係ル各所ノ生産製造物品及囚徒ノ製造物品ヲ賣拂フトキ

第十五 軍艦兵器彈藥ヲ除ク外工事製造又ハ物件買入ノ爲ニ前金拂ヲ爲スコトヲ得ス

第十六 軍艦兵器彈藥ヲ除ク外工事製造又ハ物件買入ノ爲ニ前金拂ヲ爲スコトヲ得ス

第九章 出納官吏

第二十六條 政府ニ屬スル現金若ハ物品ノ出納ヲ掌ル所ノ官吏ハ其ノ現金若ハ物品ニ付一切ノ責任ヲ負ヒ會

同 第六輯 會計 第一章 會計法

三二一

計検査院ノ検査判決ヲ受クヘシ

第二十七條 前條ノ官吏水火盜難又ハ其ノ他ノ事故ニ由リ其ノ保管スル所ノ現金若ハ物品ヲ紛失毀損シタル場合ニ於テハ其ノ保管上避ケ得ヘカラサリシ事實ヲ會計検査院ニ證明シ責任解除ノ判決ヲ受クルニ非サルハ其ノ負擔ノ責ヲ免ルルコトヲ得ス

第二十八條 現金又ハ物品ノ出納ヲ掌ルニ付身元保證金ヲ納メシムルコトヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第二十九條 仕拂命令ノ職務ハ現金出納ノ職務ト相兼スルコトヲ得ス

第十章 雜則

第三十條 特別ノ須要ニ因リ本法ニ準據シ難キモノアルトキハ特別會計ヲ設置スルコトヲ得 特別會計ヲ設置スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第三十一條 政府ハ國庫金ノ取扱ヲ日本銀行ニ命スルコトヲ得

第十一章 附則

第三十二條 本法ノ條項帝國議會ニ關涉セサルモノハ明治二十三年四月一日ヨリ施行シ其關涉スルモノハ帝國議會開會ノ時ヨリ施行ス

決算ニ係ル條項ハ帝國議會ノ議定ヲ經タル年度ノ歲計ヨリ施行ス

第三十三條 本法ノ條項ト抵觸スル法令ハ各々其ノ條項施行ノ日ヨリ廢止ス

●會計規則

二十二年五月 勅令第六十號

改正

二六年勅令一二二號、三三年一二七號、三四年一五六號、三五年二〇〇號

朕會計規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

會計規則

第一章 會計年度所屬區分、歲入歲出金出納

第一條 歲入ノ年度所屬ハ左ノ區分ニ據ル

第一 納期ノ一定シタル收入ハ其納期末日ノ屬スル年度

第二 隨時ノ收入ニシテ納額告知書ヲ發スルモノハ納額告知書ヲ發シタル日ノ屬スル年度

第三 隨時ノ收入ニシテ納額告知書ヲ發セサルモノハ領收ヲ爲シタル日ノ屬スル年度

第二條 歲出ノ所屬年度ハ左ノ區分ニ據ル

第一 公債ノ元利賞勳年金恩給諸祿ノ類ハ仕拂期日ノ屬スル年度

第二 諸拂戻缺損補填ハ其拂戻又ハ補填ノ決定ヲ達シタル日ノ屬スル年度

第三 俸給手數料旅費ノ類ハ其支給スヘキ事實ノ生シタル時ノ屬スル年度

第四 廳中雜費土木建築費其他物件ノ購入代價ノ類ハ契約ヲ爲シタル日ノ屬スル年度但土木建築費ノ如キ契約ノ數年ニ涉ルコトヲ得ヘキモノハ契約ニ據リ定メタル仕拂期日ヲ以テ區分スヘシ

第五 前各項ニ掲ケル類別ニ入ラサル費用ハ總テ仕拂命令ヲ發シタル日ヲ以テ年度ノ所屬ヲ定ムヘシ

第三條 毎年度所屬歲入歲出金ヲ金庫ニ於テ出納スルハ翌年度六月三十日限トス

第二章 豫算

第一款 總豫算

第四條 大藏大臣ハ歲入ノ景況ヲ調査シ各省ノ豫定經費要求書ニ基キ歲入歲出總豫算ヲ調製スヘシ 總豫算ノ首ニハ歲計全體ニ關スル説明ヲ付スヘシ

第五條 歲入豫算ハ經常臨時共ニ款項ニ區分シテ調製シ成ルヘク歲入ノ性質ヲ明示スヘシ

第六條 歲出豫算ハ經常臨時共ニ款項ニ區分シテ調製シ成ルヘク經費ノ目的ヲ明ニスヘシ

第七條 歲入歲出總豫算款項ノ區分ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ

第二款 豫定經費要求書

第八條 各省大臣ハ毎年度其所管經費ノ需用高ヲ算定シ前年度ノ定額ト比較ヲ立テ豫定經費要求書ヲ調製シ

前年度八月三十一日マテニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第九條 各省ノ豫定經費要求書ハ經常臨時共ニ款項ニ區分シ更ニ各項中所要ノ金額ヲ各目ニ區分シ尙ホ必要ノ場合ニ於テハ番號ヲ以テ之ヲ細分シ又經費所要ノ理由計算ノ基ク所ヲ示スヘシ
目ノ區分ハ各省大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ムヘシ

第十條 各省ノ豫定經費要求書ニハ各省所管經費全體ニ關スル説明及各款各項ノ説明ヲ付スヘシ

第三款 仕拂豫算

第十一條 各省大臣ハ毎年度決定ノ豫算定額ニ基キ仕拂命令官毎ニ所要ノ費額ヲ定メ仕拂豫算ヲ調製シ大藏大臣及會計検査院ニ送付スヘシ

仕拂豫算ハ各項ノ金額ヲ示スヘシ

第十二條 仕拂豫算ヲ更定シタルトキハ其計算書ヲ大藏大臣及會計検査院ニ送付スヘシ

第十三條 大藏大臣仕拂豫算若クハ其更定計算書ノ送付ヲ受ケタルトキハ之ヲ金庫ニ令達スヘシ

第四款 歳入歳出現計書

第十四條 會計法第六條ニ掲クル歳入歳出現計書ハ大藏省ニ備ヘタル主計簿ニ據リ大藏大臣之ヲ調製スヘシ

第十五條 歳入歳出現計書ニハ總豫算ニ定メタル區分ニ從ヒ其年三月三十一日ヲ以テ終リタル年度ニ屬スル歳入歳出ノ八月三十一日ニ於ケル左ノ事項ノ現計ヲ示スヘシ

歳入ノ部	歳入ノ部
歳入豫算額	歳入豫算額
調定済歳入額	調定済歳入額
收入済歳入額	收入済歳入額
不納缺損額	不納缺損額
收入未済歳入額	收入未済歳入額

歳出ノ部

歳出豫算額

豫算決定後増加歳出額

仕拂命令済歳出額

翌年度繰越額

歳出殘額

第五款 豫備金支出

第十六條 豫備金ハ大藏大臣之ヲ管理ス

第十七條 豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途及豫備金ヲ以テ支辨スル費途ノ金額ハ他ノ費途ニ流用スルコトヲ得ス

第十八條 第一豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途ハ毎年度豫メ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十九條 各省大臣第一豫備金ノ支出ヲ要スルトキハ金額理由ヲ示ス所ノ計算書ヲ作り大藏大臣ノ承認ヲ經

ヘシ

第二十條 大藏大臣第一豫備金ノ支出ヲ承認シタルトキハ之ヲ會計検査院ニ通知スヘシ

第二十一條 各省大臣第二豫備金ノ支出ヲ要スルトキハ金額理由ヲ示ス所ノ計算書ヲ作り之ヲ大藏大臣ニ送

付スヘシ

第二十二條 大藏大臣ハ前條ノ計算書ヲ調査シ其意見ヲ付シテ勅裁ヲ請フヘシ

第二十三條 第二豫備金支出ノ勅裁アリタルトキハ大藏大臣其事故金額ヲ會計検査院ニ通知シ及官報ニ掲載

スヘシ

第二十四條 豫備金ヲ以テ補充支辨シタル金額ハ各省大臣其計算書ヲ作り各費途毎ニ説明ヲ付シ年度經過後

五箇月以内ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

大藏大臣ハ豫備金支出ヲ第一豫備金支出ト第二豫備金支出トニ大別シ其總計算書ヲ作り之ニ説明ヲ付シ各省大臣ヨリ送付シタル豫備金支出ノ計算書ト共ニ帝國議會ニ提出スルノ手續ヲ爲スヘシ

第三章 收入

第二十五條 收入官吏租稅其他ノ收入金ヲ領收スルトキハ其領收證ヲ納人ニ交付シ領收濟ノ旨ヲ歲入ヲ徵收スル官吏ニ報告スヘシ

第二十六條 收入官吏ハ大藏大臣定ムル所ノ規則ニ從ヒ毎月一回若クハ數回其領收シタル金額ヲ金庫ニ拂込ムヘシ但金庫ノ設ナキ運輸通信ノ不便ナル地方ニ在ル收入官吏ノ領收シタル金額ハ該官吏之ヲ保管シ大藏大臣ノ指定ニ從ヒ金庫ニ拂込ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十七條 金庫ハ收入官吏又ハ納人ヨリ租稅其ノ他ノ收入金ヲ領收スルトキハ其領收證ヲ拂込人又ハ納人ニ交付シ領收濟ノ旨ヲ歲入ヲ徵收スル官吏ニ通知スヘシ

第二十八條 (削除)

第二十九條 (削除)

第三十條 歲入ヲ徵收スル官吏ハ其徵收簿ノ結果ニ據リ毎月徵收報告書ヲ調製シ参照書類ヲ添へ各省大臣ノ定メタル期限ニ之ヲ其事務管理廳ニ送付スヘシ

第三十一條 歲入ノ事務管理廳ハ前條ノ徵收報告書ニ據リ毎月徵收總報告書ヲ作り之ニ必要ナル参照書類ヲ添へ其翌月中ニ大藏大臣ニ送付スヘシ

第三十二條 納期ノ一定シタル收入ニシテ納期所屬ノ年度ニ於テ納額告知書ヲ發セサルモノハ總テ納額告知書ヲ發シタル年度ノ歲入ニ編入スヘシ

第四章 支出

第三十三條 仕拂命令官ハ總テ仕拂命令ヲ發スル前其經費ハ正當ニシテ必要ナルヤヲ調査シ該經費ノ金額ヲ算定シ又該經費ハ仕拂豫算額ニ超過スルコトナキヤ支出科目及所屬年度ヲ誤ルコトナキヤ該經費ハ豫算ヲ以テ定メラレタル目的ニ違フコトナキヤヲ調査スヘシ

第三十四條 仕拂命令ニハ債主若クハ其代理人ノ氏名、仕拂フヘキ金額、支出科目、年度、番號ヲ記載スヘシ但支出科目ノ同ナルモノハ數人ノ債主ニ對シ集合仕拂命令ヲ發シ別ニ各債主ノ金額氏名表ヲ添ユルコトヲ得

現金前渡ノ仕拂命令ニハ前渡ヲ受クヘキ官吏ノ資格、氏名(銀行ナレハ其名稱)前渡ヲ爲スヘキ金額、支出科目、年度及番號ヲ記載スヘシ

第三十五條 仕拂命令官第三十二條ノ調査ヲ了シタルトキハ其仕拂命令ヲ受取人ニ交付スヘシ但數人ノ債主ニ對スル集合仕拂命令及仕拂命令ヲ當テタル金庫所在地外ニ在ル債主ニ仕拂ヲ要スルモノハ直ニ仕拂命令ヲ金庫ニ送付シ受取人ニ仕拂ノ手續ヲ爲スヘシ

第三十六條 仕拂命令官前條ニ據リ仕拂命令ヲ受取人ニ交付セントスルトキハ前以テ案内仕拂命令ヲ金庫ニ送付スヘシ

第三十七條 (削除)

第三十八條 (削除)

第三十九條 現金前渡ノ仕拂命令ハ左ノ區分ニ從ヒ之ヲ發スヘシ

第一 當時ノ費用ニ係ルモノハ每一箇月分ノ費額ヲ豫定シテ仕拂命令ヲ發スヘシ但シ在外各廳ノ經費外國ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費運輸通信ノ不便ナル内國ノ地方ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費其他仕拂場所ノ一定セサル經費ハ事務ノ必要ニ由リ二箇月以上六箇月分マテ合セテ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得

第二 隨時ノ費用ニ係ルモノハ所要ノ費額ヲ豫定シテ事務上差支ナキ限リハ成ルヘク分割シテ仕拂命令ヲ發スヘシ

第六輯 會計 第一章 會計法

第三 各廳ニ於テ直接ニ從事スル工事ノ經費ハ工事ノ大小ニ由リ其所要ヲ量リ六千圓以内ニ於テ仕拂命令ヲ發スヘシ

第四十條 會計法第十五條第八ニ據リ現金前渡ヲ爲シタルトキハ左ノ場合ヲ除クノ外更ニ同一ノ主任官吏ニ現金前渡ヲ爲スタメ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得ス

第一 前ニ發シタル仕拂命令ノ金額三分ノ二以上ノ仕拂濟證明アリタルトキ但此場合ニ於テハ更ニ發スル仕拂命令ノ金額ト前ニ發シタル仕拂命令ノ仕拂濟證明未濟ノ金額ト合シテ六千圓ヲ超ルコトヲ得ス
第二 前ニ發シタル仕拂命令ノ金額六千圓未滿ニシテ更ニ發スル仕拂命令ノ金額ト合シテ六千圓ヲ超サルトキ

第四十一條 現金前渡ヲ受ケタル官吏監督ノ規則ハ大藏大臣各省大臣ニ協議シテ之ヲ定ムヘシ

第四十二條 會計法第十五條ニ據リ政府ノ命シタル銀行ニ委任シテ現金仕拂ヲ爲サシムル爲メニ發スル現金前渡ノ仕拂命令ハ國債元利金仕拂ノ場合ニ限ル

第四十三條 仕拂命令ハ所屬年度經過後滿五箇年以内ニ仕拂ノ請求アル毎ニ金庫ニ於テ仕拂フモノトス
第四十四條 各年度ニ屬スル經費ヲ精算シテ仕拂命令ヲ發スルハ翌年度五月三十一日限リトス

第二款 仕拂命令ノ執行

第四十五條 金庫ハ案内仕拂命令集合仕拂命令若クハ金庫所在地外ニ在ル債主ニ仕拂ヲ要スル仕拂命令ヲ受ケタルトキ其命令合式ニシテ且仕拂豫算各項ノ金額ニ超過セサルトキハ仕拂ヲ爲スヘシ
金庫ニ於テハ休日ヲ除クノ外毎日其開庫時間内ハ何時ニテモ仕拂命令持參人ニ仕拂命令ト引替ニテ現金ヲ交付スヘシ但集合仕拂命令、金庫所在地外ニ在ル債主ニ仕拂ヲ要スル仕拂命令ニ對シテハ領收證書ト引替ニ現金ヲ交付スヘシ

第四十六條 左ノ場合ニ於テハ事由ヲ仕拂命令持參人ニ告ケ金庫ニ於テ仕拂命令ノ執行ヲ拒ムヘシ
第一 案内仕拂命令ノ到着セサルトキ

第二 仕拂命令ト案内仕拂命令ト符合セサルトキ

第三 仕拂命令汚損シ案内仕拂命令ト照合シ難キトキ

第四十七條 各年度ノ仕拂命令ニシテ翌年度六月三十日マテニ仕拂ノ請求ナキ仕拂命令濟金額ニ相當スル資金ハ會計法第二十條ノ歲計剩餘ニ組入レス國庫ニ於テ繰越整理スヘシ

第四十八條 前條ノ資金中年度經過後滿五箇年以内ニ仕拂ノ請求ナクシテ會計法第十八條ノ期滿免除ニ據リ政府カ負債ノ義務ヲ免レタルモノアルカ爲メ不用トナリタルモノハ其負債ノ期滿免除トナリタル年度ノ歳入ニ組入ルヘシ

第三款 計算報告

第四十九條 金庫出納役ハ毎月仕拂命令受領濟額報告書ヲ調製シ其翌月中ニ大藏省ニ送付スヘシ但運輸不便ノ土地若クハ遠隔ノ地方ニシテ本文期限ニ據リ難キモノハ豫メ大藏大臣ノ認可ヲ受クヘシ
第五十條 (削除)

第五章 決算

第一款 總決算

第五十一條 歳入歳出總決算ハ總豫算ト同一ノ區分ニ據リ大藏大臣之ヲ調製スヘシ

第二款 各省決算報告書及收入支出計算書

第五十二條 各省大臣ハ翌年度十一月三十日マテニ各省豫定經費要求書ト同一ノ區分ニ據リ其省所管ニ屬スル經費ノ決算報告書ヲ調製シ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ
歳入ヲ徵收スル官吏ハ會計検査院ニ證明ノ爲メ毎年度歳入徵收額計算書ヲ調製シ證書類ヲ添ヘ其歳入事務管理廳ニ送付シ歳入事務管理廳ハ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ
仕拂命令官ハ會計検査院ニ證明ノ爲メ毎月支出ノ計算書ヲ調製シ證書類ヲ添ヘ其主管大臣ニ送付シ主管大臣ハ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ

本條第二項、第三項ノ場合ニ於テ歳入歳出ニ關スル計算書ハ特ニ監督ノ任アル官吏若クハ特ニ主管大臣ヨリ委任ヲ受ケタル官吏ヨリ直ニ會計検査院ニ送付セシムルコトヲ得

第三款 國債計算書

第五十三條 國債計算書ハ大藏大臣之ヲ調製スヘシ

第五十四條 國債計算書ニハ左ノ事項ヲ示スヘシ

- 第一 當該年度末日ニ於ケル國債ノ種類及現高ヲ示ス所ノ計算
- 第二 當該年度ニ於テ償還シ及仕拂タル各種國債ノ元高及利子ノ計算
- 第三 最近五箇年度間ニ於ケル各種國債増減ノ形況ヲ示ス所ノ計算

第四款 特別會計計算書

第五十五條 特別會計計算書ハ會計法第三十條ニ據リ特別ノ會計ヲ立ルコトヲ許サレタル事務ヲ管理スル所ノ各省大臣之ヲ調製シ毎年度經過後五箇月以内ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第五十六條 特別會計計算書ニハ左ノ事項ヲ示スヘシ

- 第一 收入計算
- 第二 支出計算
- 第三 最近五箇年度間資金ノ増減
- 第四 最近五箇年度間損益ノ比較

第六章 定額繰越、過年度支出、定額戻入

第一款 定額繰越

第五十七條 各省大臣會計法第二十一條及第二十二條ニ據リ定額ノ繰越ヲ要スルトキハ翌年度五月三十一日迄ニ繰越計算書ヲ作り大藏大臣ノ承認ヲ求ムヘシ

本條繰越計算書ハ歳出豫算ノ區分ニ從ヒ調製シ左ノ事項ヲ示スヘシ

第一 繰越ヲ要スル項ノ定額

第二 右定額ニ對シ既ニ仕拂命令濟トナリタル額及當該年度所屬トシテ仕拂命令ヲ發スヘキ額

第三 右定額ニ對シ仕拂命令ヲ發スヘキ額即チ翌年度ニ繰越ヲ要スル額

第四 右定額中全ク不用ニ歸シ決算ニ於テ取消スヘキ額

第五十八條 會計法第二十一條ニ據リ年度内ニ其經費ノ支出ヲ終ラサリシ金額ヲ翌年度ニ繰越サントスルトキハ其繰越サントスル金額ノ計算書ニ各事件毎ニ竣功遅延ノ事由ヲ示シ又請負ニテ爲サシムル工事若クハ製造ナレハ竣功遅延ノ事由ノ外ニ請負人職業住所氏名ヲ示シ契約書ノ寫ヲ添ユヘシ

第五十九條 大藏大臣各省定額ノ繰越ヲ承認シタルトキハ之ヲ會計検査院ニ通知スヘシ

第二款 過年度支出

第六十條 過年度ニ屬スル經費ノ支出ヲ爲ストキハ現年度各省定額ニ對シ仕拂命令ヲ發スヘシ

第六十一條 (削除)

第六十二條 第六十條ニ據リ支出セントスル經費ノ金額ハ豫備金ヲ於テ補充シ得ヘキモノノ外其經費所屬年度ノ豫算ニ於テ該經費ノ屬スル毎項定額中不用トナリタル金額ヲ超過スヘカラス

第三款 定額戻入

第六十三條 仕拂命令官會計法第二十三條但書ニ據リ定額ノ戻入ヲ爲サントスルトキハ其旨ヲ金庫ニ通知スヘシ

第六十四條 金庫ハ定額ニ戻入ヲナシタルトキハ其旨ヲ仕拂命令官ニ通知スヘシ

第六十五條 各年度ニ屬スル定額戻入ヲ爲スハ翌年度五月三十一日ヲ過タルコトヲ得ス

第六十六條 (削除)

第七章 政府ノ工事及物件ノ賣買貸借

第六十七條 各省大臣千圓以上ノ工事ニ付テハ竣功ノ後其工事ヲ監督シタル官吏又ハ技術者ヲシテ之カ調書

ヲ作ラシムヘシ

契約ニ據リ工事ノ既濟部分又ハ物品ノ既納部分ニ對シ完濟前ニ代價ノ一部分ヲ任拂ハントスルトキハ各省大臣ハ特ニ検査ノ官吏ヲ命ジテ事實ヲ測定シ其調査ヲ作ラシムヘシ
任拂命令官ハ前各項ノ調査ニ據ルニアラサレハ任拂命令ヲ發スルコトヲ得ス

第六十八條 前條第二項ノ任拂ヲ爲サントスルトキハ工事ニ付テハ其既濟部分ニ對スル代價ノ十分ノ九物品ニ付テハ其既納部分ニ對スル代價ヲ超ユヘカラス但箇々ニ分立シ得ヘキ性質ノ工事ニ於ケル各箇ノ完濟部分ニ對シテハ其代價ノ全額マテヲ任拂フコトヲ得

第六十九條 工事又ハ物品供給ノ競争ニ加ハラントシ若クハ其契約ヲ結ハントスル者ハ其工事又ハ物品ノ供給ニ二年以來從事スルコトヲ證明スヘシ

各省大臣ハ工事又ハ物品ノ性質ニ依リ必要アルトキハ前項ノ外特ニ省令ヲ以テ其競争者ノ資格ヲ定ムルコトヲ得

工事又ハ物品賣買ノ競争ニ加ハラントシ若クハ其ノ契約ヲ結ハントスル者ハ現金又ハ公債證書ヲ以テ保證金ヲ納ムヘシ

第六十九條ノ二 各省大臣ニ於テ左ノ各號ノ一ニ該當スト認メタル者ハ爾後二箇年間工事又ハ物品賣買ノ競争ニ加ハルコトヲ得ス其之ヲ代理人支配人番頭又ハ手代トシテ使用シタル者亦同シ

一 工事又ハ物品供給ノ契約ヲ履行スルニ當リ故意ニ工事又ハ物品ヲ粗雑ニシタル者

一 競争ニ際シ漫ニ價格ヲ競上ケ若クハ競下クルノ目的ヲ以テ連合ヲ爲シタル者

一 競争ノ加入ヲ妨害シ若クハ競落者ノ契約履行ヲ妨害シタル者

一 工事又ハ物品ノ検査監督ニ際シ掛員ノ職務執行ヲ妨ケタル者

一 前各號ニ該當スト認メラレタル後二箇年ヲ經過セサル者ヲ工事請負又ハ物品賣買ニ際シ代理人支配人番頭又ハ手代トシテ使用スル者

第六十九條ノ三 前條ニ該當シタル者ヲ入札代理人トシテ使用スル者ハ競争ニ加ハルコトヲ得ス

第七十條 前條ノ保證金ハ左ノ制限ニ據リ各省大臣之ヲ定ムヘシ

第一 競争ニ加ハラントスル者ハ其事項ノ見積代金ノ百分ノ五以上

第二 契約ヲ結ハントスル者ハ其事項ノ代金ノ百分ノ十以上

第七十一條 競争ノ落札者請負又ハ賣買ノ契約ヲ結ハサルトキハ其保證金ハ政府ノ所得トス

第二款 競争契約

第七十二條 競争ハ總テ入札ノ方法ヲ以テ之ヲ行フヘシ

第七十三條 入札ノ方法ヲ以テ工事又ハ物件ノ賣買貸借ヲ契約セントスルトキハ其入札期日ヨリ少クモ十五日以前ヨリ揭示又ハ官報新聞紙其他ノ方法ヲ以テ成ルヘク廣ク公告スヘシ但シ要急ノ場合ニ於テハ公告期間ヲ七日迄ニ短縮スルコトヲ得

第七十四條 前條ノ公告ハ左ノ事項ヲ示スヘシ

第一 競争入札ニ付スル事項

第二 契約書案ヲ示ス場所及其契約ノ取結ヲ擔任スル官吏ノ官氏名

第三 競争執行ノ場所日限及時刻

第四 入札ノ保證金額

第七十五條 各省大臣若クハ其委任ヲ受ケタル官吏ハ其競争入札ニ付シタル工事又ハ物件ノ價格ヲ豫定シ其豫定價格ヲ封書トシ開札ノトキ之ヲ開札場所ニ置クヘシ

第七十六條 開札ハ公告ニ示シタル場所日限時刻ニ入札人ノ面前ニ於テ之ヲ行フヘシ但入札人出席セサルカ

又ハ出席セサル者アルトキハ入札ニ關係ナキ官吏ヲシテ開札ニ立會ハシムヘシ

入札人ハ一旦提出シタル入札書ノ引換變更又ハ取消ヲ爲スコトヲ得ス

競争加入ノ資格ナクシテ爲シタル者ノ入札ハ無効トス

第七十七條 開札ノ上ニテ各人ノ入札中一モ第七十五條ニ據リ豫定シタル價格ノ制限ニ違セザルトキハ直ニ出席入札人ヲシテ再度ノ入札ヲ爲サシムルコトヲ得

第七十八條 落札トナルヘキ同價ノ入札ヲ爲シタル者數名アルトキハ直ニ抽籤ヲ以テ落札人ヲ定ムヘシ

第七十九條 競争ノ落札者請負又ハ賣買貸借ノ契約ヲ結ハサルトキハ更ニ競争ヲ行フヘシ但本條ノ場合ニ於テハ第七十三條ノ期限ヲ七日マテニ短縮スルコトヲ得

第八十條 工事及物件ノ賣買貸借契約書ニハ其契約セントスル事項ノ細密ナル設計、任譯、落成期限、受渡期限、保證金額、契約違背ノトキ保證金ニ對スル處分其他一切必要ナル條件ヲ掲クヘシ

第八十一條 契約ハ各省大臣若クハ特ニ其委任ヲ受ケタル官吏其契約書ニ署名捺印スルニアラサレハ確定セサルモノトス

第三款 隨意契約

第八十二條 隨意契約書ハ第八十條及第八十一條ニ準據シ之ヲ作ルヘシ但一口一千圓未滿ノ隨意契約ノ場合ニ於テハ本文ノ契約書ヲ省略スルコトヲ得

第八十三條 隨意契約ノ場合ニ於テハ各省大臣ノ見込ニヨリ第六十九條ノ規定ニ據ラサルコトヲ得

第八章 出納官吏

第一款 收入官吏、現金前渡ヲ受ケタル官吏

第八十四條 出納官吏ハ其責任ニ屬スル會計ニ付自身ニ事務ヲ執ラサルヲ理由トシテ其責任ヲ免ルコトヲ得ス但各省大臣ノ命令ヲ以テ特ニ其代理官若クハ分任官ヲ定メタルトキ其代理官若クハ分任官ノ所爲ニ付テハ本條ノ限ニアラス

前項代理官ハ出納官吏ノ事務ノ全部ヲ代理シ分任官ハ其一部ヲ分掌スルモノトス

第八十五條 各省大臣ノ命シタル出納官吏代理官若クハ分任官ハ其所爲ニ付會計法第二十六條ノ責任ヲ免ルコトヲ得ス

第八十六條 出納官吏ハ現金前渡及現金收入ニ關シ大藏大臣ノ指揮監督ヲ受ク

第八十七條 (削除)

第八十八條 各省大臣ハ所屬出納官吏ノ所爲ニ由リ政府ノ損失ヲ生シタリト認ムル場合ニ於テハ會計検査院ノ判決以前ト雖モ其出納官吏ニ向テ辨償ヲ命スルコトヲ得

第八十九條 前條ノ場合ニ於テ其辨償ヲ命セラレタル出納官吏負擔ノ責ヲ免ルヘキ理由アリト信スルトキハ計算書ヲ作り證據書類ヲ添ヘ本屬大臣ヲ經由シテ之ヲ會計検査院ニ送付シ其判決ヲ求ムルコトヲ得

各省大臣ハ前項ノ場合ト雖モ其命シタル損失金ノ辨償ヲ猶豫セス

會計検査院ニ於テ其出納官吏ニ向ツテ辨償ノ責ナシト判決シタルトキハ其既納ニ係ル辨償金ハ直ニ之ヲ還付ス

第九十條 (削除)

第九十一條 收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ハ毎年三月三十一日若クハ該官吏轉免死亡停職ノトキ本屬大臣検査員ヲ命シテ之ヲ検査セシムヘシ但臨時ニ現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ハ定時ノ検査ヲ要セス

大藏大臣又ハ各省大臣ハ必要ト認ムルトキハ臨時ニ検査員ヲ命シテ收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ヲ検査セシムルコトアルヘシ

第九十二條 前條ノ検査ヲ執行スルニ當リ主務ノ出納官吏事故ニ由リ自身検査ヲ受クル能ハサルトキハ其代理者若クハ特ニ本屬大臣ノ命シタル官吏ニ於テ立會ヲ爲スヘシ

第九十三條 收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ヲ検査シタルトキハ其檢定書ニ通テ製シ検査員及主務ノ出納官吏若クハ立會人之ニ署名シ一通ハ該官吏若クハ立會人ニ交付シ一通ハ本屬大臣ニ提出スヘシ

第九十四條 收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏他ノ公金ノ出納ヲ兼掌スルトキハ別ニ検査ノ方法アルニ拘